今日のソ連邦

1978
7
4.1.



歴史を秘めた北のまち
ベリーキー・ウスチュグを訪ねて

ウラルの宝石細工

ソ連の労働資源

今日のソ連邦

第7号　1978年4月1日

APN　本誌の材料はノーボスチ通信社の提供によるものです。

本誌を入手するには

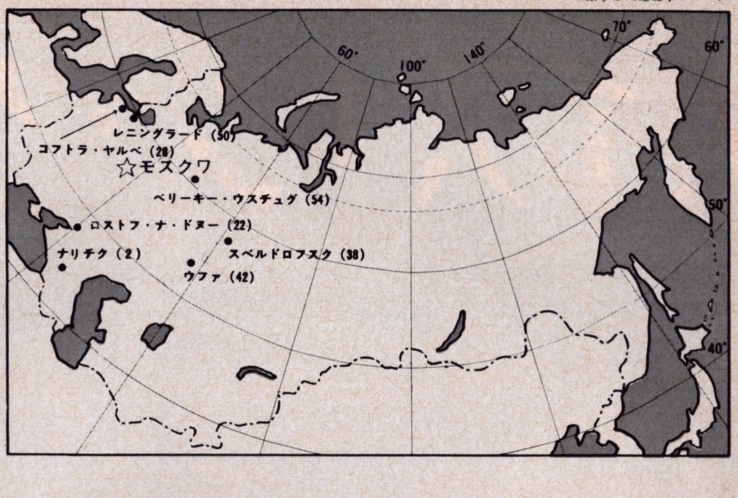
下記送料を添えて広報部にお申込み下さい（誌代無料）。（送金には振替または切手を御利用下さい）

半年分送料…………1200円

1年分送料…………2100円

同時一括送りの部数が多くなれば、送料も割安になりますから、広報部にお問合わせ下さい。

★数字は関連記事のページ



ソビエト社会主義共和国連邦大使館

東京都港区麻布台2－1－1　電話(583)4224

（本誌についてのお問合せは広報部へ）

広報部　東京都品川区東五反田3－9－13

郵便番号141　電話(03)447－3536(代表)

振替口座東京9－122358（加入者名＝ソ連大使館広報部）

還暦を迎えた人民詩人 カイスイン・クリエフ

アレクサンドラ・ストレリツォワ

カメラ　V・チェルノフ



カバルジノ・バルカル自治共和国の首都ナリチクで開かれた還暦祝賀会であいさつするカイスイン・クリエフ。ソ連のすべての共和国からお祝い客が集まった。

人民詩人の還暦

北カフカズにあるカバルジノ・バルカル自治共和国（ロシア連邦共和国に含まれる。カバルジノ・バルカリアとも呼ぶ）の人民詩人カイスイン・クリエフは、このほど60歳を迎えた。クリエフの創作歴は、この自治共和国の人民の生活と文化に深く結びついている。彼は、一九一七年の10月革命後に生まれたカバルジノ・バルカリア文学と同い年である。

カイスイン・クリエフは文字通りの大詩人である。その詩は、善と悪についての、人生の意義、世界の可知性、愛についての哲学的思索に満ちている。詩人はその作品の中で、澄みきった青空、渓谷に流れ落ちる滝、カフカズの山々の雪を頂く雄大な峰をうたった。彼は自国民の生活と運命、その性格と風俗習慣を作品に反映した人民詩人である。そしてさらに、彼はソビエト詩人である。ふるさとの小さな山村の生活と大きな国全体の生活は彼にとっては切り離し難いものである。カイスイン・クリエフの還暦の祝いは、カバルジノ・バルカリア文学だけでなく、多民族的ソビエト文学全体の祝日となった。

詩人の還暦祝賀会は　モスクワと、カバルジノ・バルカル自治共和国の首都ナリチクでも催された。しかし、生まれ故郷ベルフニー・チェゲムの祝賀会で詩人が味わった喜びに勝るものはなかったであろう。半世紀前にこの村で、農民の10歳の息子が初めて詩を作りだした。この村から、彼の初期の詩集が広い読者の世界に送り出された。この村で、村人の生活を見守りながら、彼はインスピレーションの新しい泉を模索し、見出してきた。

…祝賀会の日は太陽の光がさんさんと降りそそぎ、村人総出でお祝いにきた感があった。どっしりと落ち着いた長老たちが、毛皮の帽子を目深にかぶり、しきたり通り上座についていた。到着したカイスイン・クリエフはまず最初に長老たちへのあいさつを済ました。祝賀会が始まった。

音楽が鳴り響く。昔ながらの民族衣装を着た娘たちが、観客の輪の中で踊った。続いて、村人たちが次々と進み出て、同郷詩人の作品について語り、その詩が人々に喜びをもたらし、心が悲しみにふさがれた時には人々を慰めてくれることを話した。そのあと、子どもや大人たちがバルカル語とロシア語でクリエフの詩を朗読した。

ソ連国内のさまざまな共和国や都市からクリエフと共にこの山村にやってきた詩人や作家たちは、この祝賀会で仲間の詩人のために特別な喜びを味わったことであろう。「詩人のすべてを理解し、評価するには、彼の故郷を訪れなければならない」とはよく言ったものである。

ベルフニー・チェゲムから帰るころは、もはや夕やみが迫っていた。夕日が高い岩山のてっぺんにだけ残っていた。カイスイン・クリエフは長い間そこをじっと見ていた。それから仲間たちの所に戻ってきて言った——「こんなに美しい景色をどこかで見たことがありますか？　この岩山と夕日のことを忘れないで下さい！」そして物思

詩人の生まれ故郷ベルフニー・チェゲム村





しきたりどおり、詩人はまず長老たちにあいさつする。かれらはいつもの上座でクリエフの到着を待っていた。



村の少女たちの髪には、詩人の心にいつも生きている子ども時代のにおいがする。



ふるさとベルフニー・チェゲムへ向かう途中で



人民詩人の還暦

“岩山の夕日”——カイスイン・クリエフの
新しい詩集はそう名付けられるかもしれない…

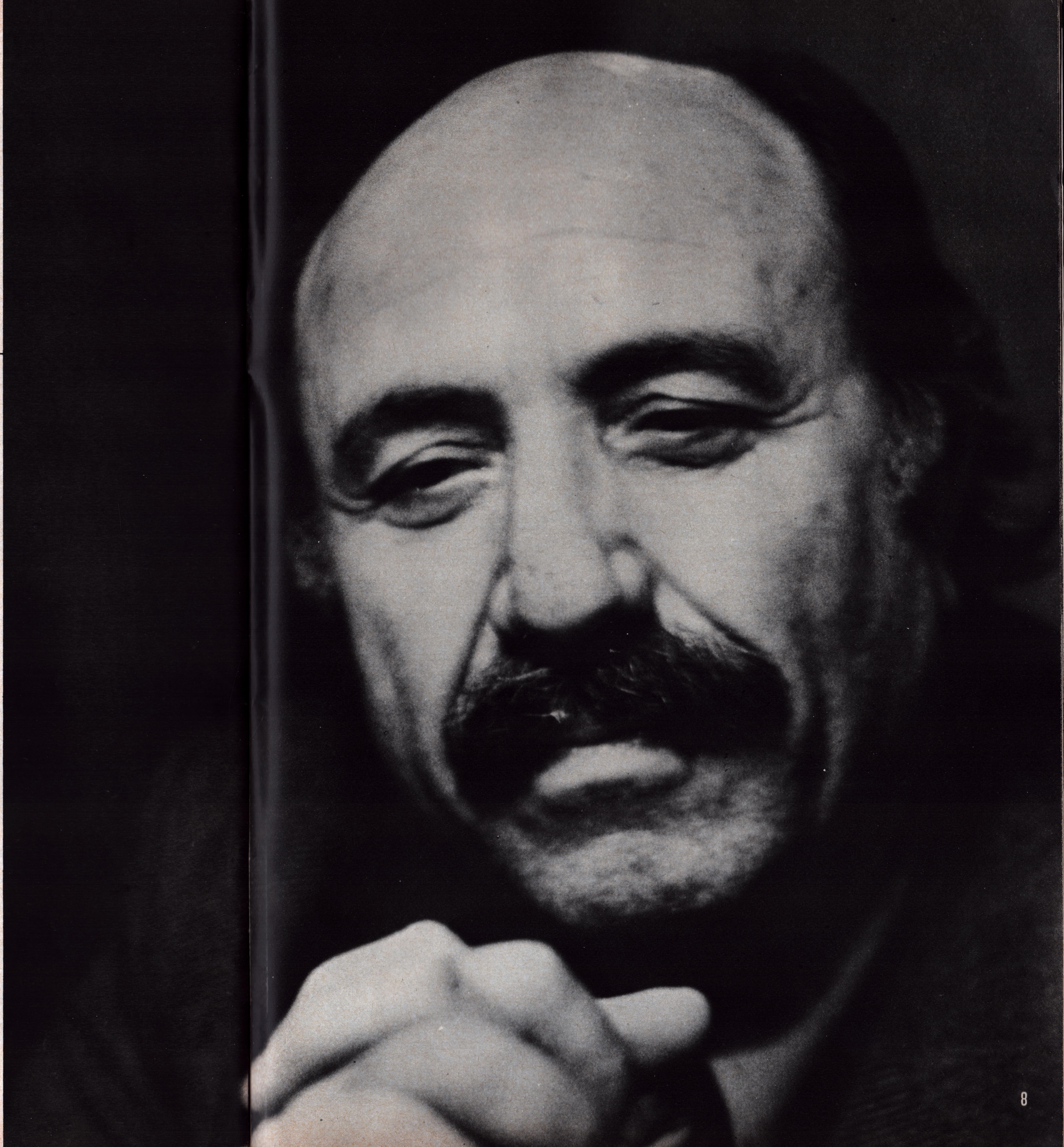
いに沈みながら付け加えた。「〃岩山の夕日〃——これは詩集の題名にいい…」
彼の新しい詩集はまさにこう名付けられるかもしれない。あるいは違った題名になるかもしれないが、いずれにしても、その詩集では、クリエフの詩に一貫したテーマ——祖国と人民への忠誠、愛と友情の鼓舞、勇気、試練にたいする不屈の闘志がうたわれるだろう…
「創作におけるすべての真実は、山の斜面の木、あるいは路傍の石のように自然だ。草は自然に生え、青々と茂り、雨は野に降り、川は流れる。詩はこのように自然で、素朴でなければならない」と、カイスイン・クリエフは主張する。彼はこのような態度で創作活動にのぞんでいるのである。
素朴さと自然さは、クリエフの場合、大きく騒々しい世界で起きているすべてのことと自分とのかかわりを感じ取る助けになっている。そしてまさにこのことが才能と相まって、クリエフをソ連国家賞受賞の最も優れたソビエト詩人の一人に高めたのである。
カフカズに住む民族の中で、バルカル人は最も数の少ない民族である。それだけに、このようにスケールの大きな詩人が彼らの中から出たということは非常に意義深い。きわめて若い文学

人民詩人の還暦

の出身者であるカイスイン・クリエフは、世界詩文学の高みに到達した。彼の作品はソ連の多くの民族の言語に翻訳されているほか、諸外国でも刊行されている。

カイスイン・クリエフは、その作品の詩にそっくりである！ 彼は親切で他人への称賛を惜しまない。彼の性格には、判断の率直さと鋭さが陽気さ、英知、精神的明快さと見事に共存している。60歳の詩人の心は若く、敏捷である。彼は疲れを知らない旅行者であり、モスクワの文学の夕べで講演し、翌日にはシベリアの読者との会合に飛んでゆく。

カイスイン・クリエフの故郷での祝賀行事は数日間にわたって行われた。それは祝典だけでなく、読者たちとの会合もあり、同僚の文学者たちとの詩についての座談会もあり、陽気なカフカズの宴会もあった。



カバルジノ・バルカリアの人民詩人カイスイン・クリエフの人柄は、その作品の詩にそっくり。やさしさ、鋭さ、陽気さ、英知が見事に統一されている。



ウズベク共和国の人民詩人ズリフィヤから祝福を受けるクリエフ。二人は長年の親友でもある。



▲クリエフの自宅で開かれた祝宴



故郷のこの山村が詩人のインスピレーションの源泉だった……

ソ日経済協力シリーズ ⑤

沿岸貿易の現状と見通し

全ソ輸出入事務所「ダリイントルグ」駐日代表
B・D・ウルーソフ



B・D・ウルーソフ・ダリイントルグ駐日代表

15年間の歴史

互恵的経済協力の一形態としての沿岸貿易は、15年前、日本海を平和と友好の海にしたいというソ日両国民双方の念願のもとに開始された。一九六三年2月5日、ソ連外国貿易相と日本国外相のあいだで交換公文が署名され、これが沿岸貿易の基礎になった。沿岸貿易は開始以来比較的短い期間でその活力を証明し、一般に認められるところとなり、ソ日貿易にますます重みのある寄与を加えている。そして、日本における沿岸貿易の人気はきわめて大きい。このことは増大の一途をたどる貿易額、沿岸貿易に参加する日本側商社の数のコンスタントな増加、東シベリアと極東の各地方、州の現地当局の関心によって裏付けられている。沿岸貿易振興への関心は日本の日本海側に位置する諸県、および中小商社、貿易協同組合、貿易協会に強く見られる。一九七〇年代になって、沿岸貿易を促進するため、日本側に日ソ沿岸貿易振興連絡会議が設立され、水産物、木材、農産物などの貿易に関係する全国的な団体がそのメンバーになった。また、一部の県には沿岸貿易の協同組合が組織された（富山県、秋田県、その他）。

初期のうち、つまり一九六三―六四年当時、ソ連側の輸出は全ソ公団「プロドイントルグ」（全ソ食品輸出入公団）を通じて行われ、輸出品も鯨肉、メヌケ、ニシン、小エビ、カレイ類、サケ、スケトウ、カレイ類とスケトウの腹子などの魚類・海産物に限られていた。これに見合う商品として全ソ公団「エクスポルトレス」（全ソ木材輸出公団）、全ソ公団「ラズノエクスポルト」（全ソ雑品輸出公団）を通じて日本から漁具、ニット製品、繊維製品が輸入された。

ダリイントルグの設立

沿岸貿易の振興を重視して、一九六五年にナホトカ市に全ソ輸出入事務所「ダリイントルグ」が設置された。このことは、沿岸貿易に従事する日本側商社の数の増大をもたらした。すでに一九六六―六七年には約50の商社、協同組合、団体が順調にダリイントルグと協力していた。中でも、進展実業、東京丸一商事、日本協同組合貿易、日本貿易協同組合連合会（日貿連）、大陸商事、舞鶴交易、その他の積極性が目立った。

一九六五年にダリイントルグが日本の三都市――富山、舞鶴、新潟で開催した輸出商品見本市は、沿岸貿易の発展に大きな意義を持った。

また、日本側がソ連極東とシベリアの諸都市――ハバロフスク、ナホトカ、イルクーツクで開催した一般消費物資と一部の設備の展示会は、貿易品目の拡大と貿易額の増大に肯定的な役割をはたした。

沿岸貿易のいっそうの発展を促進したのは、一九七三年11月に東京で開催された政府レベルの日ソ沿岸貿易会議である。この会議は、数量でも、品目でも、ソ連の極東地域と日本との間の貿易を発展させるための現実的な可能性があるという結論に達し、この貿易をさらに増大させるために努力することに合意した。そして事実、過去15年間に、沿岸貿易の分野に一定の困難があったにもかかわらず、大きな成果が収められた。沿岸貿易の人気とその貿易額の順調な増大については次の数字が証明している（単位一〇〇万ルーブル）。

年度	貿易額
一九六三	一・三
一九六五	四・四
一九六七	一二・八
一九七〇	一八・二
一九七二	二〇・七
一九七三	二五・〇
一九七四	三五・二
一九七五	三六・七
一九七六	四三・六
一九七七	四八・九

一九六三年と比べて沿岸貿易額が38倍以上も増えたことを指摘しなければならない。沿岸貿易の事実上の発展は、交換公文で見込まれているよりも高いテンポで進んでいる。一九七七年5月30日に調印された新しい協定によると、沿岸貿易による商品の相互供給量は、

一九八〇年には輸出入の均衡のもとで五六〇〇万ルーブルを上回るはずである。

昨一九七七年にはソ連側からブリャート自治共和国、ヤクート自治共和国、ハバロフスク地方、沿海地方、クラスノヤルスク地方、チタ州、イルクーツク州、アムール州、マガダン州、カムチャツカ州、サハリン州、一部の共和国およびソ連邦の諸省が沿岸貿易に参加した。日本側からは一〇〇以上の中小商社、貿易協同組合、貿易協会がダリイントルグと成功裏に協力した。沿岸貿易の発展と友好関係の強化に一貫して大きな貢献を加えているのは、沿岸貿易のパイオニア商社――進展実業、東京丸一商事、日貿連、その他多くの商社である。

ダリイントルグは舞鶴交易と順調な協力関係にある。これは非常に喜ばしいことである。なぜならナホトカ市と舞鶴市は姉妹都市であって、両市の住民は友好と相互協力の緊密なきずなを結んでいるからである。その他の姉妹都市――新潟市、旭川市、小樽市との貿易関係も成功裏に発展している。ソ連側は、北海道日ソ貿易協会や東北海道日ソ友好貿易協会のイニシアチブと崇高な目的を支持し、ソ連極東と北海道の住民同士の友好と互恵協力の強化といっそうの発展の事業に全面的な援助を与えるだろう。

沿岸貿易の特徴

特殊な種類の貿易としての沿岸貿易は、本質的な特徴を持っている。主要な特徴の一つは、中小商社、貿易協同組合、貿易協会との貿易・経済交流、友好的交流の発展である。ダリイントルグは、これらのカテゴリーの貿易パートナーと緊密な実務的関係を保つことによって、中小企業における雇用確保、ソ日両国民間の友好強化に寄与しているのである。

沿岸貿易の第二の特徴は、この貿易ではバランスがとられているということである。双方の間には、相互の輸出額と輸入額を同等にするという合意がある。すなわち沿岸貿易は、FOB（本船渡し）の条件で計算されるバーター取引の原則にもとづいて行われている。

第三の最重要な特徴は、ダリイントルグが輸出にオファーする商品は計画を超過して生産されたものだということである。極東地域の企業や組織が対日輸出用に供給する商品と引き換えに、ダリイントルグは入手した外貨で日用品（ニット製品、織物、くつ、衣料等）や生産手段として使用する商品、特定の種類の設備を大量に買い付けている。

このようにして、実り多い互恵的な協力が実現されている。

ダリイントルグが輸出に向けている商品の品目は実に多種多様である。一九六五年には31品目がソ連から輸出されたが、一九七一年には56品目、一九七七年には90品目を超えた。

新しい輸出商品の探求

われわれは、日本で売れる物資の品目をさらに多くしようと努めている。ダリイントルグは現在調達機関と共同で、日本市場で安定した需要の見通しがある完成品と半製品、とくに各種食料品荷造り用の板、積み荷底板、住宅用削り部材、家具半製品などの生産と調達の仕事をしている。泥炭、花崗岩、大理石、礫岩その他多数の現地産商品の生産と輸出向け調達の問題が現在研究されている。前記の一部の物資を生産するには、日本で専門の設備を買い付けねばならない。ソ連側はこれらの設備をコンペンセーション方式で買い付けることに同意している。

極東と東シベリアの地下には、さまざまな鉱物原料が豊富にある。たとえばダトライト・コンデンセート、硼素石膏、過硼酸塩ナトリウム、エナメル・フリット（ガラス原料）、製陶原料、ひる石、白雲石、砥石、泥炭、砂利、砕石などがそれである。日本の数多くの商社が、これらの物資に関心を示し、これらが近い将来、日本市場でそれ相当の位置を占めることを期待している。

ソ連側はまた、種子、チョウセンゴミシのジュース、薬用植物、松やに、トール油、シベリアベニマツの実、毛皮あるいは骨で作られた土産品、毛皮、角、骨、木などでできた美術品などの商品を日本市場に進出させることで、日本の商社と緊密に協力することを期待している。

沿岸貿易によりソ連に輸入される物資の品目もこれまでに大幅に増加した。日本の物資を極東と東シベリアの住民の間に普及させるため、ソ連商工会議所は需要の大きい日本商品の見本市を定期的に開催している。このような見本市の効果を大きくするために、日本の会社が出品する商品見本が、型、図柄、配色などでバラエティーに富むものであることが望まれている。

ダリイントルグの代表部が日本に設置されれば、沿岸貿易のいっそうの発展によい影響を与えることとなろう。

この15年間に双方によってなされてきたことを評価するにあたり、強調されねばならぬのは、沿岸貿易が前向きの方向で発展しているということである。現在その発展の過程で生じている問題や困難は一時的なものであって、これらの問題や困難が今後克服されることにはいささかの疑いもない。なぜなら双方の課題と利益は、互恵的協力を全面的に発展させ、友好を強めることにあるからである。

ソ連の視点

ベオグラード会議を振り返って

ユーリー・カシリョフ

3月9日、サバ国際会議宮殿で、全欧安保協力会議の35カ国の代表者が参加したベオグラード会議が閉会した。準備段階を計算に入れないとしても、この会議はほとんど5カ月間続き、多くの国の政界、マスコミ、世論の注意を引いた。

ソ連は最初からベオグラード会議の建設的な性格を守り、この会議を不和の行為としてではなく、協力の行為として遂行するために努力してきた。

社会主義諸国の具体的な提案

ソ連や他の社会主義諸国の代表団はベオグラードで最終文書の合意を実現するための多面的な活動について述べ、安全強化にかんする重要な諸提案を行った。その中には核兵器を最初に使用しないこと、欧州に存在するブロックを拡大しないこと、軍事予算を凍結すること、国連軍縮特別総会を支持すること等の提案が含まれている。社会主義諸国は、貿易・経済的、文化的性格を持つ具体的な計画、とくに運輸、エネルギー産業、環境の分野での協力にかんする全欧会議の開催、全欧的文化協力年の宣言、民族芸術フェスチバル、芸術展、青年の会合等の開催などの計画を提案するうえでイニシアチブを発揮した。

残念ながら、社会主義諸国の緊要なイニシアチブの多くは、ベオグラード会議の総括文書に反映されなかった。

西側は何を追求したか?

米国と一連のその同盟国——NATO諸国は、ベオグラードでまったく別の目的を追求した。それは社会主義諸国にたいする宣伝的な〝裁判〟を開き、最終文書の意義を修正して、その文書を他国の内政に干渉するためのつい立てにするという目的である。

同時に米国の代表団も、他のNATO諸国の代表団も、本質的に言って、欧州における軍縮、安全、協力問題にかんする提案を一つも出さなかった。

Y・M・ウォロンツォフ・ソ連代表団長は、総括文書採択後の閉会の辞で、一部の代表団はベオグラード会議の全期間にわたって、この会議を心理戦争の方へ向けさせ、イデオロギー的衝突の場に変え、焦眉の欧州安全問題の真剣な討議から代表者の注意をそらすために努力を傾注した、と指摘した。ソ連は、ベオグラード会談で最終文書が、それを修正し、その内容と意義を変えようとするあらゆる試みから守られたことを満足をもって指摘している。

会議の積極的意義

このようなマイナスにもかかわらず、ベオグラード会議のバランスシートは肯定的なものである。

採択された総括文書のなかでは、緊張緩和過程の意義が強調され、欧州安保協力会議の歴史的役割が確認され、最終文書の諸条項をこんごも実行する用意が参加各国にあることが表明された。言うまでもなく、審議されたすべての問題について全体の同意が得られたわけではないが、意見の交換が行われたことだけでも有益だったことが認められた。

これらの条項のすべてがヘルシンキ会議後初めて、35カ国の代表の共同文書に記録されたことはもちろん、小さからぬ積極的意義を持っている。

総括文書では、ヘルシンキで始められた多面的過程を継続するための一連の具体的措置もきめられた。たとえば一九七八年には、最終文書で予定されている全欧科学フォーラムを準備する専門家会議が開かれる。また一九七九年には、国家間の紛争を平和的に調整する、一般に認められた方式を作成するために35カ国の専門家がスイスに集まる。さらに地中海地域での協力にかんする会議も招集されることになっている。また一九八〇年6月には、ベオグラード型の次の会議をマドリードで開くという重要決議も採択された。

すべてこれは、ベオグラード会議の当初から社会主義諸国の代表団が一貫して堅持してきた方向に沿った有益で建設的な足取りである。

ベオグラード会議は終わった。会議は、緊張緩和が現代の国際関係の主要な傾向であり、これに代わる方法のないことをいまいちど確認した。

ベオグラード会議の結果は、ヘルシンキ協定が欧州の平和な将来を保障する現実主義的プログラムであることをいまいちど証明するものである。この協定が実現されるかどうかは、緊張緩和の水準に、各国がこんごどのような政治路線をとるかに大きく依存するだろう。

アジア問題

朝鮮の平和的民主的統一をめざして

ノーボスチ通信政治評論員 アレクサンドル・ラブレンチエフ

ソ連の世論は、朝鮮の祖国統一問題にたいする外国勢力の干渉の増大によって呼び起こされた朝鮮人民の不安を共に感じている。とくに危険な結果をもたらしかねないのは〝二つの朝鮮〟を永久化しようとする政策である。このような方針は、米国その他一部の国国による南朝鮮の国連加入企図の支持、南朝鮮のいっそうの軍国主義化、ソウルによる38度線休戦ラインの両側に住む国民間の不信の扇動などのなかに、こんにちますますはっきりと現れている。

朝鮮半島における爆発的危険をはらんだ情勢は周知の通り、第二次世界大戦の時から存在している。情勢は一九五〇—五三年の外国の侵略によりさらに激化した。この侵略は国の分裂、朝鮮人民のいま一つの悲劇をもたらして終わった。

朝鮮の統一は、ずっと以前から解決の機の熟している問題である。そして国の両部分の愛国者たちは、この方向で然るべき手段を講じている。北と南はこの6年間、民族の悲願にこたえる目的を達成すべき方法について話し合いを行っている。

統一への三つの原則

朝鮮民主主義人民共和国は、朝鮮の統一過程の基礎として三つの原則を提起した。

ピョンヤン（平壌）の意見では、まず第一に、イデオロギーと社会・経済体制のちがいにかかわることなく、民族統一の強化を達成しなければならない。第二に、交渉はもっぱら民族的性格を帯びたものでなければならず、外部勢力への依存なしに、外国の干渉なしに行われねばならない。そして第三に、論争問題の解決は、武力を使うことなく平和的手段によって行われねばならない。

ところがソウルは当初から、北が南との接触を始めるのを妨害した。ソウルはピョンヤンのイニシアチブをあいついで拒否した。また、全朝鮮民族会議すなわち北と南の政党、社会団体および住民各層の代表が参加する政治協商会議を招集しようという金日成国家主席の提案も受け入れられなかった。

南北調整委員会の線で開始された接触は中断され、事実上決裂するにいたった。

実行されない公約

ソウル当局は、外国軍隊の銃剣に守られなければ、人民の激発を恐らく抑えることはできまい。南朝鮮領土にはいまなお、最新式の兵器で装備された四万人以上の米軍が展開している。

米国の現大統領ジミー・カーターは選挙戦のなかで、自分がホワイトハウス入りすれば、ただちに米軍を南朝鮮から撤退させると約束した。ところが、この公約は事実上実行されていない。この公約は、陸軍部隊のみの撤退計画に変えられ、しかも六〇万人以上の南朝鮮軍の近代化にたいする米国の援助という形で軍事力の必要な埋め合わせをするという条件がつけられた。米軍の部分的撤退後に残されるはずの軍技術設備と弾薬のほかに、ワシントンはこんご4年間南朝鮮に軍事援助を与えるために二〇億ドルちかくを支出している。

米国その他一部の国からの広範な支援があるからこそ、南朝鮮当局はピョンヤンの平和愛好の愛国的提案を無視し、〝北との対決〟を呼号し、朝鮮民主主義人民共和国にたいする武力行動を組織することができ、また外国の圧力に積極的に反対し、北との接触の拡大、朝鮮の早急な再統一を主張する勢力を迫害し、きびしく弾圧することができるのである。

南朝鮮からの米軍の撤退を要求し、外部からの干渉のない、平和的、民主的方法による朝鮮の統一を主張している朝鮮人民の正義の闘争を、ソ連は一貫して積極的に支持している。

☆ ☆ ☆

インフレとは無縁の物価改定

――グルシコフ国家価格委員会議長に聞く

ソ連閣僚会議国家価格委員会議長ニコライ・グルシコフはノーボスチ通信経済評論員ゲンナジー・ピサレフスキーの質問に答え、物価政策について説明した。

ソ連の価格改定にかんして去る3月1日あなたが行った記者会見は、海外のマスコミに大きな反響を呼んだ。西側のある観測者たちは、ソ連経済も、先進資本主義国の経済と同様、インフレをまぬがれないと断定しているが、これは正しいか?

――正しくない。戦争中の混乱期を除いて、ソ連にインフレはなかったし、今もない。たとえば一九七八年現在、食料品の99%、非食料品の90%以上が一九七〇年と同じ価格で売られている。肉、牛乳、およびすべての乳製品、肉製品の価格は一九六二年以来変わっていない。パン、粉、その他の穀物製品の価格は一九五四年から変わっていない。家賃は一九二八年以来五〇年間、ガス、電気、電話、暖房などの公共サービス料金は一九四八年以来三〇年間、一度も値上げされていない。公共交通機関の運賃も三〇年間据え置かれている。

価格の安定性がその不変性を意味するものでないことは、専門家ならよく知っている。ソ連では、生活必需品と重要な公共サービスの価格を意識的に低くおさえている。その他の重要でない物資やサービスについては、価格が上がることもあれば、下がることもある。これらの価格を変更するにあたりわれわれが第一に考慮するのは、ある物の値上げは他の物の値下げによってバランスがとられなければならない、ということだ。たとえば、今年はコーヒー、ガソリン、宝石・貴金属製品などの値上げが、衣服、靴、生地、日用化学製品、テレビ、冷蔵庫その他の値下げによってバランスがとられている。だからソ連の物価指数に変動はない。ここが重要なのだ。

西側のマスコミは特にガソリンの値上げに関心をもっている。そこで、ガソリンの価格改定の理由を説明してほしい。

――3月1日までソ連ではハイオクタンのガソリンが一リットル一〇コペイカ(〇・一ルーブル)以下で売られていた。これはコップ一杯のフルーツジュースより安い価格だ。こんな低価格では当然、ガソリンを合理的、経済的に使おうという気がしなくなる。これも一つの理由だが、値上げの主原因は石油採掘原価が上がったことだ。現在、石油の主産地はシベリアに移った。シベリアの油田開発には膨大な費用がかかる。

しかし、値上げ後でも、ソ連のガソリン小売価格は他の国の水準よりもはるかに低い。ヨーロッパ諸国ではリットル当り〇・三から〇・五ルーブル以上になるが、ソ連ではオクタン価に応じて〇・一五から〇・二ルーブルである。つまり二倍から二・五倍も安い。

ガソリンの値上げはバス代やタクシー代に影響するか?

――まったく影響しない。タクシー、市内交通機関、長距離バスの運賃は上がらない。また、現在無料または割引料金で乗物を提供されている身体障害者には、ガソリン値上げを埋め合わせる補償金が支給される。

別の補償金も予定されている。金、プラチナ製の装飾品の値上がりで、婚約指輪も高くなった。だがソ連では婚約指輪をはめるのが伝統なので、婚約者には一人当り三五ルーブル、合計七〇ルーブルが指輪の補償金として支払われることになろう。また、歯科治療用の金冠も以前の価格に据え置かれる。これも実質的には補償である。

記者会見での発表によれば、一九七八年には、肉・乳製品の生産にたいし総額およそ二二〇億ルーブルの補助金が国家予算から支出されるとのことだが、これはなぜか?

――ソ連では肉と牛乳を国家が意識的に赤字価格で売っている。消費者は実費の約半値で肉と牛乳が買える。ソ連の食料品価格は多くの国に比べて安い。

子供用品、医薬品、その他生活必需品の生産にも補助金が出ている。また住宅関係の公共事業には、毎年五〇億ルーブルが国家予算から支出されている。

だが、損失ばかりでは国家予算が成り立たないだろう。

――もちろんだ。ところがソ連の国家予算には赤字も債務もない。主な予算収入源は国営企業の利潤だ。他の財源はアルコール飲料やぜいたく品からの収入である。国は、たとえば宝石・貴金属製品に高い値段をつけて高所得層の収入の一部を、比較的に所得の低い人々のためにいわば再分配するのだ。

最後に一つ強調しておきたい。一九七八年3月1日のソ連の物価改定は、国民福祉向上の最重要な条件として共産党と国家が一貫して取り続けている小売価格安定方針からの逸脱を意味するものでは決してない。

(3月1日現在、一ルーブルは公定レートで約三四八円)

なぜ原子力発電所を建設するのか?

ルスラン・バズーリン

「原子力発電所は環境を汚染し、人々の健康に悪影響を及ぼしている」――外国ではこういう声がひんぱんに聞かれる。これらの人々は、原子力発電所を建設する必要がはたしてあるのか、という疑問を表明している。ソ連ではそれでは、なぜ原子力発電所が建設されているのだろうか?

世界の原子力発電時代は、一九五四年にモスクワ近郊の町オブニンスクでスタートした。この年、最初の原子力発電所が電気を生産したのである。地球上では現在、一三〇以上の原子力発電所が操業している。その総出力は約八三〇〇万KW。原子力発電は、他のいかなる現代的科学・技術部門とも比較にならないほど、経済の改造と、したがって人々の生活改善に役立っている。

ソ連の場合を例にとって、原子力発電の発展ぶりを見てみよう。現在、電力の約80%がソ連欧州地域で消費されている。この地域の燃料資源はソ連全体の貯蔵量の$\frac{1}{4}$である。このためこの地域へは年間三億五〇〇〇万t以上の有機燃料が東部諸地域から運びこまれている。その輸送費は数十億ルーブルにもなっている。しかもソ連欧州地域の工業の燃料消費はひきつづき増大している。このような状況からの出口はどこにあるだろうか? それは原子力発電所の建設のなかにある。

技術が高度に発達したすべての国で近年、原子力発電が急速に発展している。これは当然のことである。原子力発電には従来の古典的発電にくらべて一定の優越点がある。それはどんな点だろうか?

第一に、原子力発電所は原料源に依存していない。これは核燃料がコンパクトなもので、しかも長期間連続して利用できるためである。運輸機関の必要はなくなる。

第二に、原子力発電所は非常に経済的である。一基の原子炉から最高二〇〇万KWの電力を生産することができる。

第三に、原子力発電所はきれいなエネルギー源で、大気汚染を増大させない。

われわれの計算によると、出力一〇〇万KWの原子力発電所は一年間に三〇tの低濃縮ウランを消費するが、これにたいして同出力の火力発電所を運転するには約二五〇万tの石炭を必要とする。またこの5年間に運転を始めた原子炉を利用することにより、われわれは一九八〇年までに約四五〇〇万tの有機燃料を節約することができる。

原子力発電所は、国民経済にとってより目的にかなっている土地に配置することができる。そのよい例は、北極圏内に配置された、チュコト半島のビリビノ原発である。天然の燃料のない、この遠隔の寒冷地帯に、いまでは電気と熱が保障されているのである。

原子力発電所にたいしては一部に疑念と不信がある。これは、そこで働く人々、そしてとくに発電所付近に住んでいる人々にたいする放射能の危険を恐れることから生まれたものである。このような不安には正当な理由があるだろうか。

ソ連最大のノボボロネジ原子力発電所の放射能の状況を例にとってみよう。この原発はドン川沿岸部の人口密度の高い土地にあるが、ここでは放射性物質によって汚染された廃水を、天然の水面に投棄するようなことはまったく行われていない。この発電所には、廃水を浄化して再利用する特殊な浄化装置がつくられている。換気された空気も入念に浄化されたのち、高さ一二〇mの大気中へ棄てられる。放射性ガスおよびエアゾルを捕捉する装置には、短寿命の放射性アイソトープを捕捉、無害化する特殊の容器(ガスタンク)がそなえてある。

液体および固体の放射性廃棄物を埋める、念入りに考案された装置もある。このために特殊の貯蔵所がつくられているが、これは防水され、漏出を監視する検査井戸が付いている。発電所のいたるところに備えつけられている計器によって専門のグループが、発電所が放射能に汚染されないよう監視している。外部放射線量測定部が発電所構外の半径40kmの地域をたえず監視している。これまでに得られたデータによると、原発の活動は、空中、水域、土壌、食品などの放射能含有量に影響を与えていない。勤務員の放射線被曝水準も衛生上の許容基準(年間5レントゲン)を超えていない。多年の観測により確信をもって言えるのは、入念に作りあげられた放射能安全規則が守られているかぎり、原子力発電所は、他のどんな工業企業よりも危険がとくに大きいということはない、ということである。

モスクワの職業紹介所

ソ連には失業者はいないし、職業安定所は一九三〇年を最後に閉鎖された。それでもソ連のすべての大都市には職業紹介所がある。それはいま、どんな活動をしているのだろうか？　アレクサンドル・デドゥル・ノーボスチ通信記者が、ウラジーミル・ロマノフ・モスクワ職業紹介所所長にインタビューして、質問した。以下はロマノフ所長の回答。

私たちは、求職者の希望、傾向、能力、知識水準を考慮に入れて、多くの求人の中から適職をみつけ、求職者と国家の利益を合理的に一致させるよう援助しています。

現在、モスクワの企業や機関は、ほぼ一〇万人の欠員を抱えています。この四ヵ月間に私たちが就職をあっせんした何万人もの労働者や職員が、もし自分だけで仕事を選んでいたとしたら（強調しておきますが、見つけるのではなく、選ぶのです！）、かなりの手間がかかったでしょう。当紹介所にくる人には数日間で仕事をあっせんします。私たちの協力がなければ、人々は二倍も三倍も時間を浪費します。

もちろん、私たちは、労働力不足にとくに悩む企業や機関を優先的に紹介します。

しかし、それでは選択の自由を制限するのでは？

なぜですか？　私たちは求職者に何も押し付けません。かれらには五件から一〇件の就職先を紹介します。もちろん、最初は、労働力不足がとくにひどい企業の求人職種や労働条件を求職者に紹介します。何らかの理由でそれらが求職者に適さない場合には、他の就職先を紹介します。その結果人々は、たいてい満足して私たちの紹介所を出ていきます。

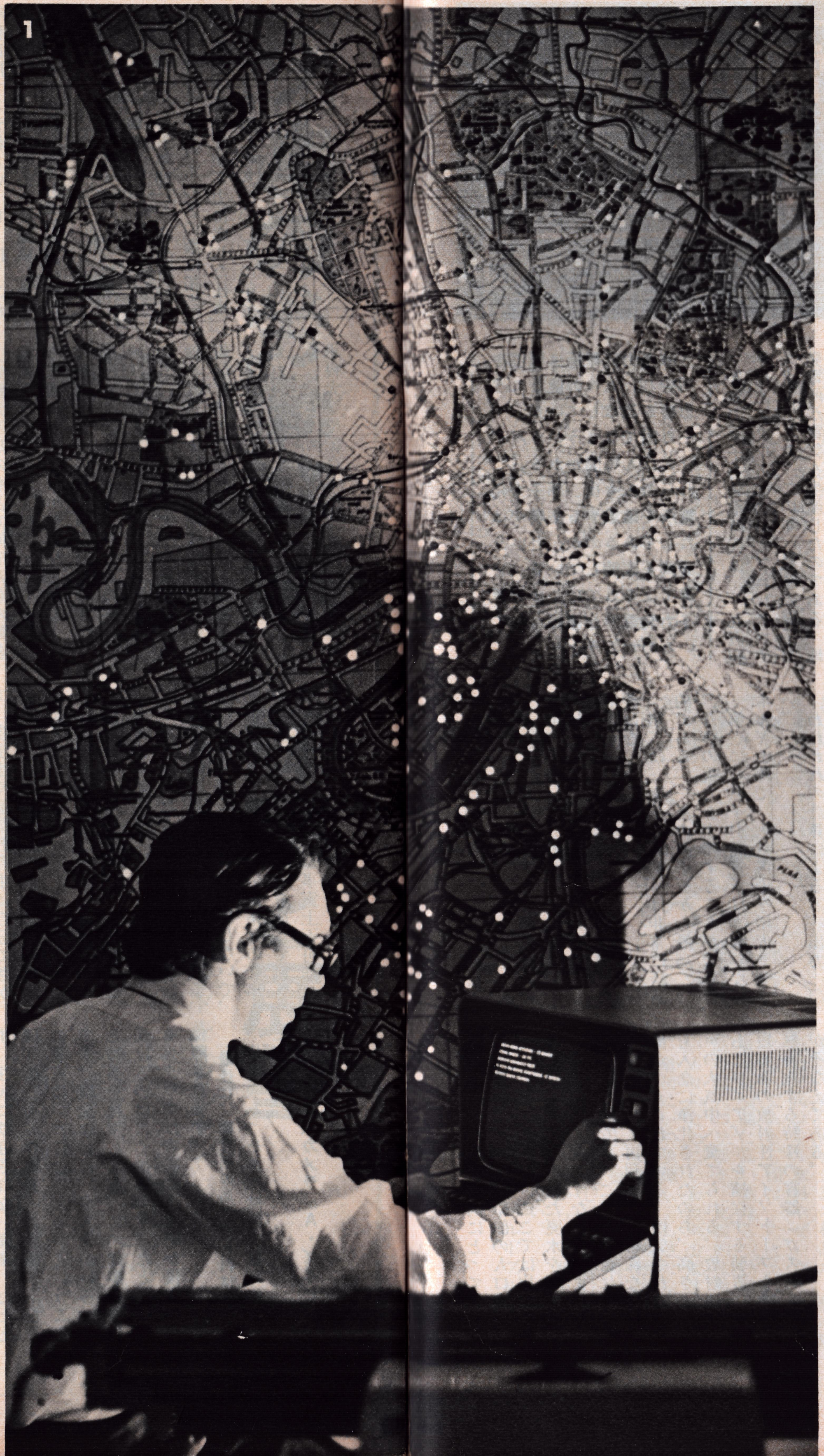
企業あるいは機関があなたの所で紹介した人の採用を拒否する場合がありますか？

企業が紹介所に求人の申し込みをした場合、企業は私たちが紹介した人を拒否することはできません。就職してから、仕事が余り向かないということになれば別ですが。その時は、求職者は再度紹介所にやってきます。私たちは新しい就職先を提案し、その選択にまかせます。

職業選択でまず第一に求職者が関心をもつものは何ですか？　賃金ですか？

私たちは賃金をすぐに求職者に知らせます。しかし、問題は他にたくさんあります。まず第一に、求職者は、新しい職場が住居から近いことを望みます。次に、労働条件です。最新設備をそなえた近代的企業を優先させています。

さらに、若者は技能向上や働きながら学べる可能性、企業のスポーツ施設に興味を示します。年長者は、幼稚園、ピオネール・キャンプ場、休息の家、あるいはサナトリウム等の施設がある



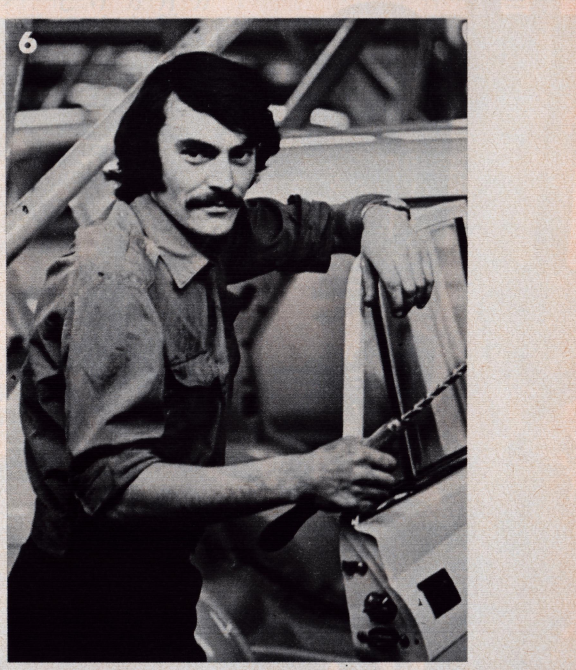






1 職業紹介所では各企業の労働条件についてのデータが、コンピュータですぐに分かるようになっている。
2 計算センターがモスクワの各企業の欠員にかんする情報を処理する。
3 元パイロットの年金生活者エブゲニー・ビノグラードフが職業紹介所であっせんされた仕事は、当の紹介所のポストだった。現在、モスクワのソビエツキー区の支部で主任監督官として働いている。
4 中央テレビでも定期的にモスクワの求人案内を放送している。







5 ラリサ・プロホロワは職業紹介所に時計工場へ転職したいと相談して、希望がかなった。
6 セルゲイ・セリョーギンも、自動車関係の仕事を希望して、紹介所からモスクワの大企業の一つ、リハチョフ記念自動車工場をあっせんされた。
7 リハチョフ記念自動車工場を紹介された人たちは、現在の仕事に満足している。

かどうかに重点をおきます。

求人申し込みを行った企業や機関は、職種に関する資料といっしょに、これらすべての情報を私たちに提供します。

あなた方の紹介者の社会的構成について。

紹介所を利用する人は、有資格者も、まったく専門職をもたない人もいます。たとえば、この五年間に、紹介所の三〇の支部（モスクワ市の区の数に相当）は、年金を受けながら力に応じた仕事をしたいと希望した八〇〇〇人の年金生活者、七〇〇〇人の主婦、約六〇〇〇人の兵役を終えた人々に仕事をあっせんしました。しかし、もちろん、一番多かったのはさまざまな理由で転職を希望する人たちでした。

労働力不足のもとで何千人もの職を求める専門家がどうして出てくるのか、不思議に思われるかもしれません。この問題に伴ういろいろな原因をすべて挙げることはしませんが、次の例だけ挙げておきましょう。この五年間に、約二〇〇万人のモスクワ市民が住宅条件を改善しました。住所変更に伴い、新居に移った人々の多くは、職場も変える決心をしました。そこで私たちはかれらに援助したのです。

ここの紹介者には、中等専門学校、単科大学や総合大学の夜間部や通信教育の卒業生も沢山います。学校が仕事をあっせんする昼間部の卒業生と違って、夜学生や通信教育生は自分でさがして、または私たちの援助で仕事に就きます。

紹介所が引き受けている求人のなかには、多分、悪い労働条件、低賃金の仕事もあるのでは？

すでに述べたように、就職希望者はつねに自由選択ができます。ある企業、または機関がこの状況を考慮しないで、比較的低い賃金や悪い労働条件の仕事の求人をすれば、紹介所を通じて働き手を雇い入れることは事実上不可能になります。

私たちの問題はむしろ別のところにあります。それは、高給にもかかわらず、住民に歓迎されない職業、たとえば守衛、荷役作業員、掃除婦……などの求人にいかにこたえるかということです。残念ながら、求人先がいろいろと特典を提案しても、この仕事を引き受けるのはごく少数です。たとえば、モスクワでは守衛には住宅が優先的に保障されます。

最後に、紹介所のあっせん料は？

仕事のあっせんは無料で行われています。

（カメラ　A・ズイビン）

特集 ソ連の労働資源

ソ連の労働資源——課題と展望

経済学博士・教授　アレクサンドル・ビルマン

労働資源——これは多面的な論題である。労働資源の配分に関連する問題は多い。そしてこれらの問題を理解するには、まず問題を歴史的に、広い範囲にわたってとらえなければならない。

失業から完全雇用まで

革命前のロシアはほとんど農業国だった。一九一三年には、人口の82%が農村に住んでいた。一億五九〇〇万人のうちわずかに九八〇〇万人が労働者、一六〇〇万人が職員だった。個人経営は規模が小さく、新しい世帯が分家するたびに、とどまることなく細分されていった。そして巨大な労働力の過剰があった。

第1次世界大戦とそれにつづく内戦と外国の干渉は、国の経済をさらに破壊した。そして国家は経済機構を次第に整備しはしたものの、それでもソ連の一九二八年4月1日の登録失業者数は一五七万六〇〇〇人をかぞえた。これは労働者・職員総数の10%に当たった。

第1次5ヵ年計画（一九二八—一九三二年）の遂行により、失業者数は急速に減少した。一九三〇年10月1日現在の登録失業者数はわずかに二四万人。労働者・職員の1%をわずかに越えるものだった。

その後、労働者・職員数は次のように増大した（単位一〇〇万人）。

	労働者・職員数
一九二八年	一一・四
一九三二年	二四・二
一九四五年	二八・六
一九六〇年	六二・〇
一九七六年	一〇四・二

地理的分布

ソ連の工業化は、単なる工業創出の過程ではなかった。それは社会主義的工業化だった。すなわち旧ロシア帝国の辺境地域の永年にわたった後進性が克服され、すべての連邦構成共和国の発展水準が上昇すると同時に平均化された。このことは一部の共和国にとっては、本質において無から労働者階級と知識層をつくり出すことだった。これらの共和国における労働者・職員数の増加速度が、全国平均をはるかに超えるものだったことは言うまでもない。

労働者・職員数が総人口に占める比率の推移を全国および一部の共和国別に示せば次の通り（端数は四捨五入）。

	一九四〇年	一九七六年
ソ連邦	一七%	四〇%
ロシア連邦	二〇	四五
ウクライナ	一六	四〇
ベロルシア	一一	四一
ウズベク	一二	二五
グルジア	一四	四〇
リトワ	九	四二
ラトビア	一五	四四
エストニア	二一	四七
モルダビア	四	三三

ご覧の通り、ウズベクとモルダビアでは労働力の余力がはっきりと感じられる。余力がさらに大きいのは、キルギスとトルクメンで、ここでは、人口構成に占める労働者・職員の比率が総人口のせいぜい1/4である。

しかしロシア連邦とウクライナ両共和国内においても、平均数字がどこでも均等にあてはまるわけではない。たとえばロシア連邦を構成する諸自治共和国の数字について見ると、バシキール、ブリャート、ダゲスタン、チュワシその他の地域には大きな労働資源のあることがわかる。同じことはウクライナ西部諸地域についても言える。

しかしこのことは、これらの地域にこんにち失業者が存在することを意味するものではない。そうではなく、すべてのものが働いている。そのうえ、新しい生産が発展している。しかし一定パーセントの労働力を浮かして、これを労働資源が窮くつな状態にあるシベリア、極東、北部で働かせることはできるのである。

失業者がいないところで、どのようにしてこのようなことができるだろうか？　以下、この点について述べよう。

統計のプリズムをとおして

一九七六年のソ連には一億四二〇万人の労働者と職員がいた。同じ年にコルホーズでは一四八〇万人が働いていた。合計一億一九〇〇万人が自分で働いて賃金を得ていた。これは働くことのできる年齢の全住民の90%少々である。これらの労働人口に年金生活者四六〇〇万人の少なくとも半数を加算することができよう。

生産部門別の就業者分布状況は次の通り（端数は四捨五入。単位一〇〇万人）。

工業	三五	農業	二九
建設	一一	運輸・通信	一一

商業	九	科学・文化・保健・芸術	二〇強
住宅管理・生活サービス	四	行政機関（銀行、保険を含む）	三弱

また生産部門と非生産部門の間に、はっきりとした傾向が確認される。これを%によって示すと次の通りである。

国民経済の全就業者数＝一〇〇%

	生産部門	非生産部門
一九四〇年	八八・三	一一・七
一九七〇年	七七・一	二二・九
一九七六年	七五・四	二四・六

そして非生産部門の就業者数が全体に占める割合はこんごも増大するだろう。

婦人と人口学

働き手の不足によるソビエト経済の困難を予言する悲観論者たちは、出生率の低下をとりわけ強調する。この問題は大いに重大である。

どの国においても、人口数の増加を特徴づけているのは自然増、すなわち死亡数にたいする出生数の超過（人口一〇〇〇人につき）である。これまでの自然増の数字を示すと次表の通りである。

一九一三年	一六・四
一九四〇年	一三・二
一九六〇年	一七・八
一九七〇年	九・二
一九七一年	九・六
一九七二年	九・三
一九七三年	八・三
一九七四年	九・三
一九七五年	八・八
一九七六年	八・九

この表は、近年の人口数の増加が、先行の10年に比べて大幅に縮小していることを物語っている。しかし同時に表は、近年の過程が一定水準に安定していることをも示している。しかし専門家の意見では、この水準は不十分なものである。人口の再生産が発展する経済の必要を満たすためには、一家庭に3人の子供が必要である。ところが近年は、3人あるいは3人以上の子供を生む母親は全体の26—29%にすぎない。

個々の連邦構成共和国についてみると、自然増はラトビアの一・七からタジクの二九・七へと振幅が非常に大きい。都市と農村の間にも大きな差がある。農村家庭には子供が比較的多い。

人口学は専門の科学である。ここではその細部に立ち入ることはやめよう。出生率低下の原因は多い。私は経済学者として、婦人の社会的労働への参加の問題について考えてみよう。

労働者・職員の総数に占める婦人の割合（%）は、一九四〇年—39、一九七〇年—51、一九七六年—51となっている。

そして保健部門では働いているもの10人のうち8人強が婦人、教育と商業の分野でもこれよりわずかに少ないが、ほとんどが婦人である。一九七六年には四九万七九〇〇人の婦人科学者がいた。これはソ連の全科学者数のほぼ42%である。学生総数の51%が女性であり、このうちの40%は技術系の学生である。これらの女子学生が、卒業後、子供とともに家庭で暮らすために学んでいるわけでないことはいうまでもない。とすると、出生率との関係はどうなるだろうか？

検討されている対策のなかで、ますます好評を博しているのは、一時的に働かない母親にたいして産後三年間はそれまでの賃金と賞与を維持するというものである。すべての婦人が幼児を保育所に預けたいと思っているわけではないし、また、家庭に居ることは一部の婦人にとって不利だったから、この対策で都市における出生率を高めることができる、と考えられている。すでに述べたように、一家庭に3人の子供が必要なのであるから、国家が支給する手当を3人目の子供にたいしては、大幅に増額することも可能だろう。もちろん、働く婦人の家事労働を軽減するためには多くのことがなされねばならない。このような措置はたえず講じられてはいるが、さらに広範囲に実施されることが必要だろう。

しかし現在の人口増加水準のもとでも、悲観論者の懸念には確たる根拠がない。なぜなら人口数にかんして、わが国には破局的な不安は少しもないからである。

この10年間に、人口数は二四〇〇万人増加した。工業発達国で、このような数字を挙げられる国は一つとしてない。

問題は選択の権利

問題は仕事を得ることではない。とはいっても、無事平穏も時には複雑な問題を生み出す。昨年採択された新憲法は、市民の多くの権利をいちじるしく拡大し、労働にたいする権利の点でも、大きな進展が見られた。いまや憲法第四〇条により、労働の権利だけでなく、天分、才能、職業教育、一般教育に適合し、社会的需要を考慮に入れた職業、業務と作業の種類を選ぶ権利も保証されている。これは、青年男女が、「自分は、かくかくの仕事、かくかくの職業に就きたい」と言えるようになったということである。

多くのアンケート調査のデータが示している通り、15—16歳の青少年が、多いときは20種類もの職業について、多かれ少なかれ知識を持っているのである。しかし自分の実際の能力とか天分とかということになると、それほどよくは知っていない。本来、自分自身を知ることは容易なわざではない、とつねに考えられてきたが、15—16歳の青少年にとって、これが無理なことはいうまでもない。

このことに関連して、青年の職業進路指導という重要問題が生まれたのである。これは事実、最も差し迫った問題である。というのは、職業選択の権利があるからには、われわれは必要なものよりも10倍も多くのバレリーナ、宇宙飛行士の志望者を得ることがあるし、反対に裁縫師、パン焼き職人、看護婦の志望者は必要よりもはるかに少ないことだってありかねないからである。

このため企業は学校で〝ガイダンスの日〟を催すようになった。来て、見て、選べ！というわけだ。教師の手助けをするため指導室が設けられた。ここには専門文献、ラジオ、テレビ、青年向け新聞、雑誌なども備えられている。要するに至れりつくせりというところだが、それにもかかわらず、これはまだ手始めでしかない。

労働余力の探求

すでに長年にわたり、労働生産性の向上が生産高と国民所得の増加の原動力になっている。たとえば前回の5カ年計画（一九七一—一九七五年）では、工業生産の増加分の約4/5以上、建設の増加分の約4/5、農業においてはその全部が労働生産性の向上によって得られた。現在の第10次5カ年計画（一九七六—一九八〇年）においては、国民所得の増加分の90%までが、労働生産性の向上によって得られることになっている。

労働生産性は二つの要素に支えられている。勤労者の教育・資格水準の向上と、手仕事の機械化を含む就業者一人当たりのエネルギー消費量の一貫した上昇がそれである。

前学年度には、ソ連の普通教育学校で四六五〇万人、職業技術学校で三六〇万人、中等専門学校（テフニクム）で四六〇万人、大学で四九〇万人、資格を高めるための各種講習会で三四一〇万人がそれぞれ学習に励んだ。

ソ連では技術が疑いもなく急速に進歩しているにもかかわらず、まだ多くの手労働が残されている。なぜこのようなことになっているのだろうか？労働の現代化のためには、機械、設備、特別の包装材料、輸送手段が必要である。労働力が豊富な間は、機械化のための支出は十分でなかった。いまでは、このような支出が最重要視されており、これによって幾百万人の労働者の手を浮かすことができるだろう。

第三の余力は、一人でいくつもの職種をマスターすることである。

ロシア中部の、レフ・トルストイがかつて生活し、そしてその墓がある村ヤースナヤ・ポリャーナからほど遠からぬところにシチョーキノ化学コンビナートがある。この大コンビナートでは、従業員数が10年近くの間増加していないのに、生産高は毎年10—12%ずつ増加している。〝秘訣〟は簡単。ここでは兼職が広範に発展しているのである。機械のオペレータが修理工、検査係その他の職種を兼ねている。こんにちでは多くの企業がこれを手本にして仕事をしている。しかしそれだけではない。

労働組合のたびたびの監査によって明らかになったところでは、兼職による労働強化は規準をこえていない。というのは基本的作業が自動化されていて、労働者は特別の緊張をともなうことなく、別の仕事をすることができるからである。もちろん別の仕事にたいしては、追加の報酬が支払われる。また労働はいっそう多様化し、興味のあるものとなる。

必要は最良の教師である。新しい働き手を集めることが複雑な仕事ではなかったころは、作業の機械化はかならずしも十分には行われなかった。しかしいまや情勢は変わった。ソ連の欧州地域では、就業者数がこんご増大することは事実上あるまい。他方、作業計画は年ごとに拡大されている。つまり総合的機械化と真剣に取りくまねばならなくなっているのである。

あらたに形成されつつある人口学的状況のもとで、大量の働き手をシベリアその他の遠隔の地域に集めなければならないことが、国民経済全体における労働過程の根本的機械化と自動化の刺激要因となるだろう。そしてこれは、こんにちわれわれ自身でさえ、その大きさを完全には理解できないような効果をもたらすことだろう。

しかしもちろん、これからやらねばならぬことはたくさんある。

失業者がいないという条件のもとで、気候のきびしい地域に幾百万の人々を引き寄せるためには、ここに必要なあらゆる生活・文化的諸条件をつくり出さねばならない。これはそれほど簡単なことではない。それぞれの新移住者に快適な生活条件をつくり出すためには、一人当たり一万七〇〇〇ルーブル（一ルーブルは約三五〇円）の支出が必要である。

現在一連の地区で、安い水力を基盤として巨大な地域生産コンプレクスが建設されつつある。工業生産は農産物の加工と結合し、単一の農工コンプレクスを形成している。これらすべてのことが、生産効率を引き上げ、労働力のより合理的な利用をもたらしている。

年金生活者や子沢山の母親が家庭で仕事ができる融通の利く制度も設けられている。ついでに言えば、年金生活者は労働力の非常に大きな予備資源である。というのは非常に多くの老人が、仕事をせずに暮らすことを望んでいないからである。

大企業の支社が小都市や町にできているが、これは地方の青年に魅力的な見通しを開いている。男の職業が多い採取工業地帯では、裁縫所その他の婦人向けの職場がつくられている。他方、女の仕事が多い繊維工業地帯や保養地では、電機工場とか計器工場とかいった〝男性〟企業が開設されている。言い換えると、人口学的状況の均等化が進んでいるのである。

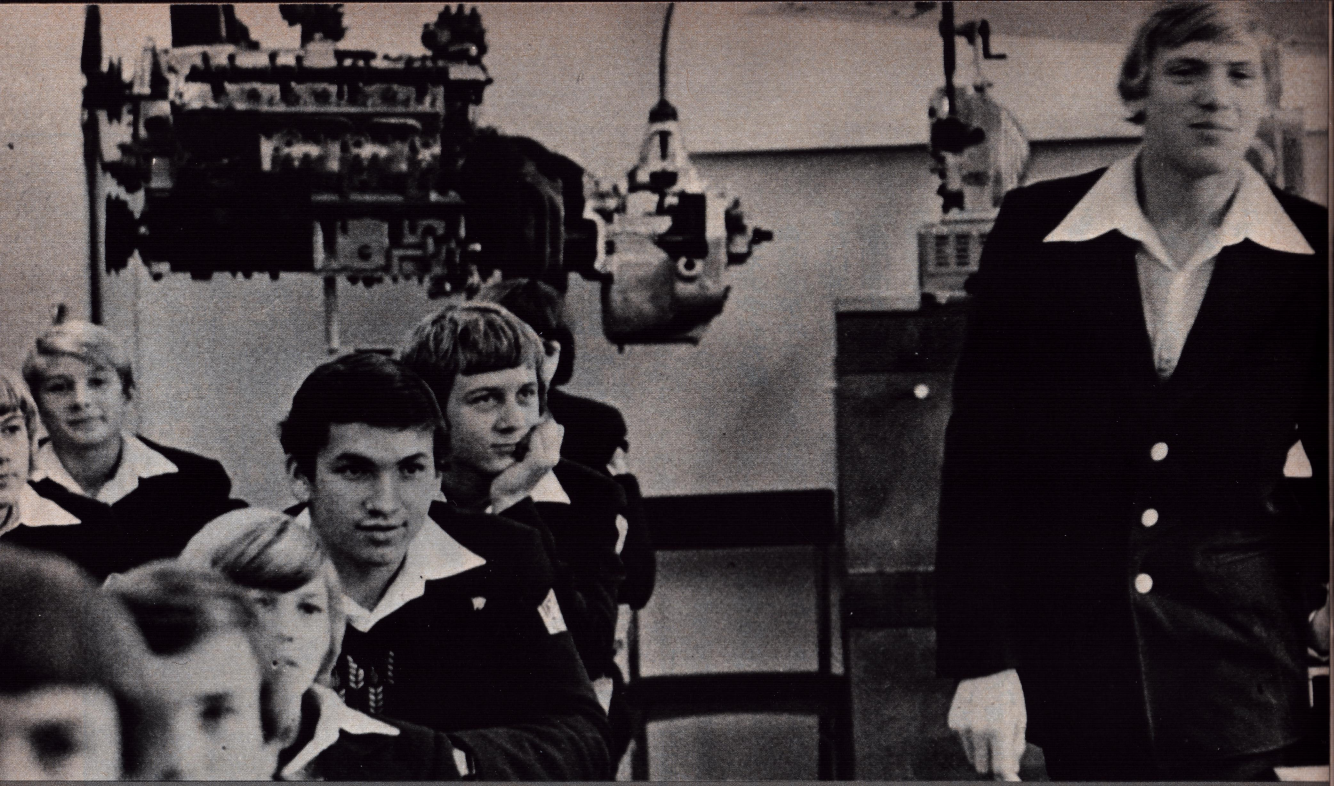
言うまでもなく、これらの課題は一日にして解決されるものではない。しかしすべては解決可能なものであり、現在すでに解決されつつある。

労働者をつくる学校



少し前はまだ普通教育学校の８年生だったこの若者たちは、今はロストフ・ナ・ドヌー市の第一職業技術学校の生徒として労働者をめざして学んでいる。

近い将来、ソ連の中学生の10人のうち８人が労働者になると予想される。少なくとも、わが国の工業はそれだけの労働者を必要としているのだ。だからソ連ではますます多くの職業技術学校が設立されている。多くの中学生は15―16歳（８年生）ですでにどんな仕事に就くかを決めており、必要な知識がすべて得られ、将来の専門領域の実際的な技能が身につけられる学校を容易に選ぶことができる。





　職業技術学校へ入学するには試験を受ける必要はない。だれでもこの学校へ入学することができる。8年制（前期中等教育）学校の修了証書と、選んだ職業への適性にかんする医学委員会の結論を提出すれば十分だ。職業技術学校の生徒の生活は国家によって完全に保障されている。寮（もし必要なら）、制服、三度の食事、教科書——これらすべては無料だ。

　職業技術学校と中等学校第9—10学年の一般教育課程は同じである。職業技術学校のカリキュラムにはそのほか、追加の学科が導入されている。それは経済学の基礎、工業デザイン等だが、中心はいうまでもなく職業教育である。だから教育期間も3年になっている。それぞれの職業技術学校には、生徒が生産実習をする企業が決まっている。これは普通、大規模な工場や建設トラスト等だが、生徒たちの職業教育は主として、これらの企業に就職することを前提として行われている。

　ノーボスチ通信記者のタチヤナ・ワシリエワ、ドミトリー・カズチン、ピョートル・ヤシチェンコの三人は、このほどロストフ・ナ・ドヌー（ソ連ヨーロッパ部の南）へ行き、このまちにある第一職業技術学校のアレクサンドル・ルーチ校長とインタビューした。この学校はソ連最大の農業機械工場「ロストセリマシ」の労働者を養成している。

あなたの学校は市で最も古い職業技術学校で、長い間ロストセリマシの人材を養成する唯一の学校だったそうですが、いまはどうなっていますか？

「第一職業技術学校は一九二九年にロストセリマシと一緒に生まれました。現在までに一万六〇〇〇人の労働者を養成しました。現在はロストセリマシ工場のために職業技術学校が四校あり、全部で毎年約一〇〇〇人を送り出しています。しかしロストセリマシにはこの数でも十分ではありません。二〇〇〇—三〇〇〇人が必要なのです。ですから私たちは毎年学校の募集人員を増やす努力をしています」

どのように学生を募集していますか？　工場は学校にどんな援助をしていますか？

「私たちは9月1日に入学して来る生徒たちに、あらかじめ前もって、職業技術学校とは何か、どういう職種の労働者を養成しているのか、学校の教育課程にどんな科目が入っているかを説明しています。このために〝ガイダンスの日〟を設け、全市から8年生を招待します。教師は市内の中等学校の8年生と会うだけでなく、農村地帯にも出かけます。なお、本校の生徒の約半数は農村地帯から来ています。

　工場もまた、当然のことですが、学校が充実することに関心を持っています。〝募集キャンペーン〟中にはロストセリマシ工場の見学が組織されます。第8学年を修了して工場へ見習い工として就職を希望する者にはすべて、人事課で職業技術学校への入学を勧めています。

職業技術学校はどんな資金で運営されているのですか？

「建物、設備、教師の給料、その他、教育過程に関係した費用の一切は国家予算から支払われます。工場が特に関心を持っている職種を修得中の生徒には、工場は少額ですが奨学金を支払います。たとえば本校では将来の電気ガス溶接工がそれをもらっています。生徒たちがロストセリマシで実習をする時は、当然カネをかせぎますが、かせぎ高の22%は学校の基金に回ります」

学校の教員はどういう人たちですか？

「教育関係または技術関係の高等教育を修了した教師たちです。職業訓練を行う教師はロストセリマシから派遣されています。私も工業大学を卒業したあと、15年間ロストセリマシで働きました」

（カメラ　S・ソロビヨフ）

1　現代の労働者の労働用具は複雑な工作機械。操作する前にまず、理論の授業でその〝解剖学〟をマスターしなければならない。

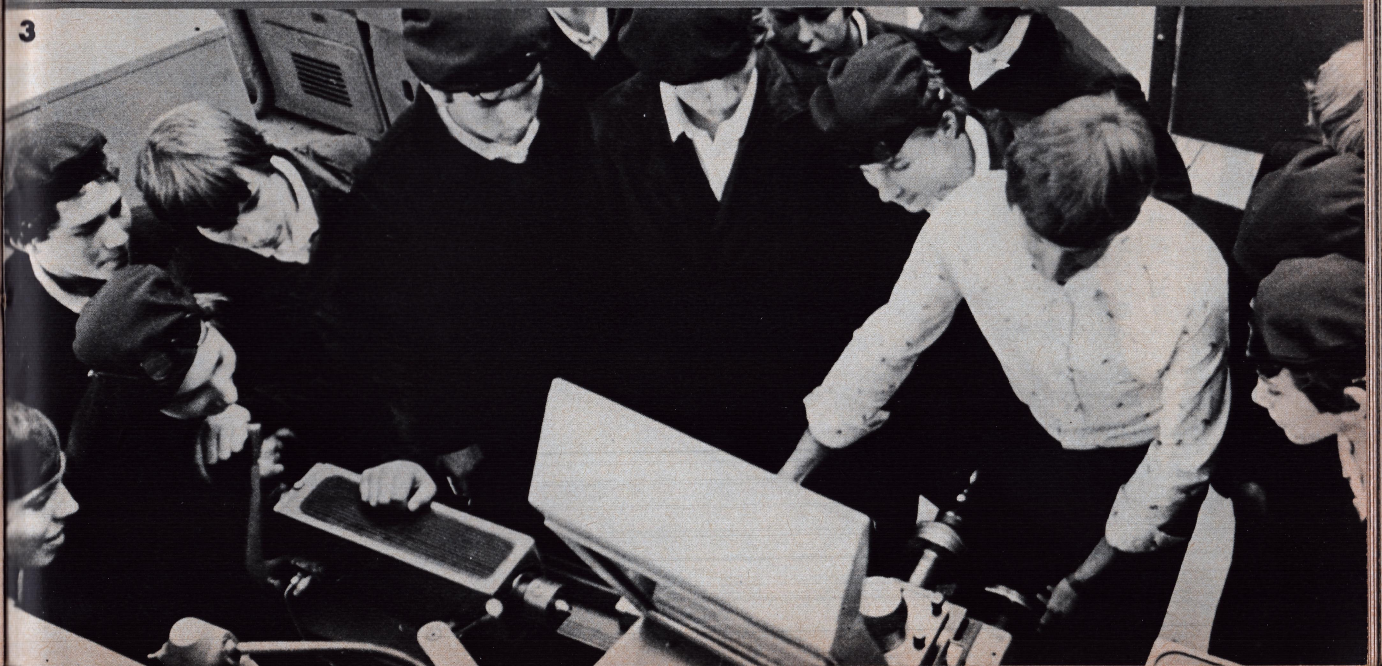
2　第一職業技術学校はロストフで一番古い1929年の創立。農機工場〝ロストセリマシ〟のための労働者を数カ月間で養成した。現在、若者たちはここで3年間、専門の職業教育と後期中等教育を併せて受ける。

3　実技の授業のあと、先生が製作した部品の寸法の精度を測定する生徒たち。

2



3



仕事って一体何だろう?

——二つの雑誌の特集から

——労働の意義とは毎日のパン代を稼ぐことにあるのであって、決して自己表現にあるのではない……

——いや違う！　まさに自己表現、仕事にたいする興味にこそあるので、賃金は第二義的問題だ……

ほぼ同じ時期にアメリカのエスクワイア誌とソビエトの″知識は力″(″ズナーニエ・シーラ″)誌がこのことにかんする考察を発表した。エスクワイア誌(1977年7月号)の″どのように仕事を得るか″という特集は、かなりの皮肉を利かせた一連の現実的忠告によって展開された。

″知識は力″誌(1977年11月号)は、レニングラードの機械工場での社会学的調査をもとにして、仕事への興味について論じた。同誌は仕事を得ることは問題ではない、という点から出発している。ソ連国民には、この前提は証拠立てる必要のないことである。

エスクワイア誌

七〇〇万のアメリカ人がいまだに失業している。新たに一九〇〇万人が一九八一年までに仕事を要求することが予想される。そのうえ経済学者はどんな幻想も抱くべきではないとわれわれに警告している。

統計を捨てて現実問題に立ちかえってみよう。つまり、あなたは、仕事がほしいわけだ。ところで仕事を手にするのはむずかしい。多くの者には困難だ。が、あなたにはそうではない。なぜならあなたは、仕事にかんして幾つかの厳しい真実を前もって理解する能力を持っているからだ。ほらこれが真実だ。

あなたの活動の目的は決して自己表現でなく、毎日のパン代のためだ。これをすぐに納得できたら、あなたは今後、多くの失望を避けられる。

″知識は力″誌

社会学者が行った調査は、若者はより高い賃金を要求するよりはむしろ、興味ある仕事を求めていることを示している。研究者は労働の満足度を三段階に分けている。それは″完全に満足″、″基本的には満足″、″まったく不満足″の三段階である。″完全に満足″している人が一番少なかったのは、高い賃金にもかかわらず、機械化された、決まりきった労働にたずさわっている人の中にみられた。

科学技術進歩発展の現段階で避けられない単調な労働の問題は何度も論議されている。それは、基本的には個人の問題であり、個人がそのような労働において、自己肯定および自己完成のための可能性を見出すのは困難なことである。ソ連ではこれは経済的問題でもある。このような仕事の希望者はますます減少している。

多くの社会学者は、発展しつつある教育水準と生産がオートメーション化された職場での貧弱化しつつある労働内容の矛盾を指摘している。

機械製作においては、この問題は、おそらく、そう鋭いものではない。回答者の83・6%は、自分で仕事の速度とリズムを選んでいると答えた。

″自分の職場でどんな時間に、何をするかを自分で決めるのか、それとも、他人から正確な指示や指令を受けるだけなのか？″という質問にたいして、回答者の半数が″自分自身で決めるほうが多い″と答えた。

エスクワイア誌

雇用主はあなたの協力を最大限に利用することに興味を持っている。あなたにはだれも援助しない。仕事の安泰は、もっぱらあなた自身の配慮にかかっている。

″知識は力″誌

回答者の62・3%は同僚を援助し、同僚に配慮することをごくあたり前のことと考えている。その際、年齢も、勤続年数も、技能資格も、教育程度も明らかにこの感情には影響しない。次の二つの事情はむしろそれを強めている。それは内容の充実した労働と、全体の課題による作業班内の集団的作業形態のことである。

工場では次の三つの労働組織形態がある。(a)個人的形態(作業班外で働く)、(b)個人個人の課題によって作業班で、(c)全体の課題によって作業班で。最後の(c)は経済的観点からみて最も進歩的であり、心理的にも、最も好ましいものであった。このような作業班では自分の仕事に完全に満足している人がほとんどで、彼らには職種を変えようなどという気持ちが起こることは少ない。これらの作業班の労働者は、さまざまな生産、非生産の問題の解決に影響を与える自分の可能性をより高く評価している。

エスクワイア誌

あなたが仕事をうまくこなしているという唯一の証明は、ボスの愉快で、元気な顔である。あなたにとって唯一の真実のボスとは、一人または何人かと相談して職場でのあなたを抜てきできる人であり、また同様にだれにも相談せずにあなたを解雇できる人である。

″知識は力″誌

社会学者は、指導の三つのスタイル——指令的スタイル、同志的スタイル(一般労働者が管理に参加しやすい)、放任的スタイルの中から一つを選ぶよう労働者たちにもとめた。68%の回答者は管理の同志的スタイル、22・7%が指令的スタイル(実行者に責任を負わせないので、このスタイルは実行者に少し精神的特典を与える)、8.7%は放任的スタイルを支持した。その際、同志的スタイルは技能資格の高い労働者に、また指令的スタイルは教育水準の高くない非熟練工にとくに人気があった。

また、労働者に次の文章の中から一つだけ選んでくれるよう頼んだ。

(a)職場または企業の管理は、当局の義務である。労働者はこの件に干渉すべきでない。彼らには自分の義務がある。

(b)労働者の企業管理への参加は、企業を援助できるが、それに大きな望みをかけるべきではない。

(c)管理は当局だけの仕事だと考えるのは間違いだ。労働者が積極的に生産管理に参加すればするほどよい。

$\frac{2}{3}$以上の労働者が3番目の答えを選んだ。

この問題も年齢、教育、技能資格、都会生活の期間に関係しなかった。各労働者の経歴がどんなものであろうと、労働者は、自分とその友人が企業の主人公であることを知っている……

エスクワイア誌

もしもあなたが割り増し賃金をもらいたいと思って、それがもらえるかどうか疑問に思うようなら、割り増しはもらえないだろう。

″知識は力″誌

″あなたの賃金はだれによって、あるいは何によって決まると思うか？″——研究者はこう質問し、多少とも賃金の額に影響する10の要因(上司との関係は含まれない)を挙げて、それを影響力のある順番に並べてくれるように労働者たちにもとめた。実質的には全員が自分の仕事を第一に挙げた——″賃金は私自身の仕事ぶりにかかっている″

エスクワイア誌

あなたの学校の先生はあなたに実際的な仕事の準備教育をしなかった。気にする必要はない。この問題では教育はいまだかつて、だれも助けはしなかったのだから。

″知識は力″誌

現在このレニングラードの機械工場では労働者の半数が中等教育、中等専門教育の修了者、または高等教育を受けている。

社会学者の表現を借りれば、″文化・教育能力の成長″が起こっている。社会学者の主張によると、この成長は若者たちの高い一般教育水準と生産経験の不十分さの間に矛盾を生み出している。矛盾は、欲求とそれらの実現の間のかっとうとして若者の意識の中で屈折する。このかっとうはいとも簡単に解決される。若者たちには再び学習し、技能を高めようという強い向学心がわいている。

調査が示しているように、自分の仕事、企業の管理にたいして人間の要求はますます厳しくなっており、さらに、管理への参加は単なる希望ではなく、各人の日常生活の必須のノルマになっている。

"自由な勤務時間"の実験

ヤロスラフ・トルスチコフ

遅刻してもかまわない

全員が正確に定められた時間に始業する、といった厳格な規定は、そんなに必要だろうか? たとえば設計者の場合、自分の事務所へ30分遅く来て、同じく30分遅く家へ帰るとしても、きっと何も問題は起こらないだろう。もしそうなら、このような職種の働き手のためにフレックス・タイム制、つまり自由勤務時間制を設けてもかまわないのではないだろうか?

オイルシェールの加工コンビナート「コフトラ・ヤルベ」はエストニア共和国の最大の企業。ここで風変わりな実験が行われている。フレックス・タイム制、ここでの名称によればスライド労働時間制に中央経理部、設計局、その他いくつかの部課が移行したのである。

スライド労働時間制では一日の平均勤務時間は以前と変わらない。しかし朝の出勤時刻は7時でも、8時でも、かまわない。終業時間についても同様の広い幅が設けられている。昼休みの時間帯も大幅に広げられた。一番都合のいい時刻に食事に出掛けることができる。しかも昼休みは必要なら1時間ではなくて、1時間半または2時間でもかまわない。ただ一つの必須条件が定められている。それは、だれでも10時から12時までと14時から16時までは自分の仕事場に居なければならないことである。職員がたがいに意思を疎通させ、共同で解決しなければならないいろいろな問題を解決するために必要なのだ。

実験を始める前に、学者と現場関係者はこの実験をこまかい点まで詳細に検討した。たとえば一日の労働時間だが、職員は1時間遅く出勤しても、その日に同じ時間だけ残業する義務はない。その〝借り〟は翌日でも、5日後でも埋め合わせればいい。またこれとは違ったやり方もある。残業して、その時間をためておき、のちに代休を取るという方法だ。制限はただ一つ。全体として1ヵ月間に、勤務の不足も、残業分も5%——約9時間を越えてはならないということである(この〝プラス・マイナス〟5%はけっして賃金に影響しないし、翌月に持ち越すことができる)。

減少した労働時間のロス

スライド労働時間制適用の結果は?

この問題に当然のことながら強い関心をもつニコライ・セレブリャンニコフ・コンビナート理事長の意見を聞いてみよう。

「新しい時間制に設計者と会計係を移行させるにあたって、彼らの要求をも、労働時間の損失をどうやって減らすかについても考えました。なにしろ、それまでは労働時間のロスは必至と思われていたからです。厳格な規律の擁護者が何と言おうとも、実生活には規則からはずれたり、家庭の事情による職員の早退を認めたりしなければならない場合が沢山あります。その結果、管理部の許可したロスタイムは1ヵ月間を総計すると結構多いのです。スライド労働時間制は事実上この問題を解決しました。いまではこの事由による労働時間損失はまったくゼロになりました」

オイルシェール研究所の職員の計算によると、それぞれの職員の労働時間の損失は月に平均2時間減った。次のような興味深い事情も明らかになった——フレックス・タイムはけっしてすべての者にその習慣を変えさせたわけではなかった。フレックス・タイムに移行した職員の約半数は、以前と同じようにきちんと定時に始業し終業している。平均して始業時間は少しずれている。朝の8時が7時50分になった。しかも代休をつくるために労働時間を蓄積するという傾向がはっきりと見られた。たとえば設計局では職員5人のうち約4人の割合ですでに6時間、7時間、あるいはそれ以上の時間の代休をためこんでいる。心理面からこれを説明するのはむずかしいことではない。なにかの場合にそなえてたくわえをつくるということは、一般に人間に特有の行為である。オーバータイムは一種の預金通帳のようなもので、いつでも必要なだけの自由時間を引出すことができる。

この実験の結果を正確に評価し、実態をつかむのは、かなりめんどうなことだ。技師や技手の仕事量の算定は、たとえば出来高払いで働く工作機械労働者の作業量の算定よりもむずかしい。フレックス・タイムへの移行後の労働生産性の向上は、設計局の職員の半数以上が指摘している。

〝気分的に楽な〟新制度

実験は、これとは別の、いっそう計算しにくい利益をもたらした。

コンビナートの多数の職員と話してみると、「気分的に楽になった」と異口同音に語っている。これこそきわめて重要なことだ! 遅刻する心配や上司に休暇や早退を〝願い出る〟必要がなくなったという事実そのものがすでに心理的、神経的負担を軽くする。一方、人々は個人の心理的特質に適している時間に労働に参加することができるようになったので、最も生産的な作業条件にいっそう速やかに溶け込む。さらに始業時間や終業時間が一定していないので、ラッシュ時の輸送問題の解決もはるかに容易となる。

今のところ、コンビナートの技術関係者だけが実験の対象になっているが、それはかれらの仕事が新しい条件にいっそう適応しやすいからである。労働者をフレックス・タイムに移行させることができないだろうか?

コンビナート理事長は次のように答えた。

「原則的にはそれも可能です。まず第一に、工作機械労働者や、班のメンバーがいくつかの関連職種を習得している個々の作業班をフレックス・タイムに移行させることができるでしょう。なぜなら欠勤している仲間の代わりをいつでも務めることができるように労働を組織しなければならないからです」

実験の第1段階は成功裏に終わった。次の段階は、それを拡大し、注意深く研究し、蓄積された経験を普及することである。

日ソ交流協会 第14回総会



日ソ交流協会の総会であいさつする
ポリャンスキー駐日ソ連大使

日ソ交流協会の第14回総会が3月1日午後5時から、東京の番町共済会館で開催された。総会には協会の役員、会員をはじめ、この総会のためにソ日協会代表としてとくに来日したソ連科学アカデミー極東研究所のB・クリフツォフ副所長、ポリャンスキー駐日ソ連大使、ジノビエフ同公使ほか、在日ソ連機関関係者多数が出席した。また、桜内義雄建設大臣ほか多数の名士が来賓として列席した。

総会は中地昭常任理事を議長にして議事に入り、若狭理事長から会務報告、三谷好子理事から婦人部事業報告、二本松常任理事から会計報告、岡本監事から監査報告を聴き、それぞれ承認した。

続いて佐藤副会長が本年度事業計画について説明し、日ソ親善月間の行事とロシア語講習所開設計画を発表した。また、高野明常任理事が青年部新設の提案理由を説明し、各界の協力を要請した。欠員中の副会長には理事の江守栄作氏(ケット科学研究所KK社長)が選出された。

あいさつに立った時子山常三郎会長は日ソ両国の親善と交流の推進、相手国の理解を深める手段として語学研修機関の開設について決意を語った。

ポリャンスキー大使、クリフツォフ・ソ日協会代表はそのあいさつで、ソ日親善関係発展に日ソ交流協会がはたしている役割を高く評価するとともに、ソ連政府が提唱するソ日善隣友好条約が両国間の親善関係の進展に好影響をもたらすだろうと語った。クリフツォフ氏から平和の使者——おとめの姿を刻んだ彫金作品が協会に贈られた。

総会のあと、日ソ交歓パーティーが盛大に行われた。

イデオロギー問題

社会主義革命の一般法則は不変

哲学博士　ユーリー・クラシン

すべての社会主義革命が直面する問題

今日、社会主義革命への道の独自性や社会主義の民族的モデルについて、一部の者は、マルクス・レーニン主義にとって新たな問題が生じているかのように言っている。実際には、この問題は新しいものではなく、それはあらゆる社会主義革命の前に不可避的に起こるものである。レーニンは、ロシア革命が一般に認められている図式や観念に比べて独自性を持っていることを再三強調した。かれは、将来――なによりもまず植民地民族の革命の将来がこの点ではさらにいっそう大きな独自性を呈するだろうと予言した。しかし、レーニンはこれらの特殊性を一般的な法則に対立させるようなことはしなかった。レーニンは、ロシア革命の独自性が「世界の発展の一般的方向にそって」（レーニン全集、日本語版、第33巻、四九七ページ）いることをとくに強調した。

今日まで発生したすべての社会主義革命を比較すれば、そのいずれの革命も、たとえ同じ歴史的時期に起こった場合でも、他の革命の模倣ではなかったし、つねにそれ独自の特徴を持っていることがはっきりと分かる。

現代の諸条件のもとで社会主義をめざす闘争の独自性にかんしては、問題の二つの面を区別することが大事だと思う。一つの面――これは、10月革命勝利後の60年間に世界で起こり、この革命がもたらした歴史的過程によって決定的に引き起こされた、真に巨大な変化の具体的な分析である。ここでは各国、各地域の諸条件の独自性を明らかにし、各国の労働者階級、革命勢力の国際主義的課題の解決への道を正しく選ぶことが実際に必要である。この方向でマルクス主義者、共産党が行った創造的活動は最も高い評価に価する。

もう一つの面は、社会主義への道の独自性が社会主義革命の一般的な諸法則に、社会主義をめざす国際労働者階級の闘争のすでに蓄積され、理論的に総括された経験にどれほど一致しているかにある。独自性の絶対化は、革命過程における一般的なものと特殊なものという問題のこの最重要な面を忘れ去る危険性をともなう。

現代の経験

革命の一般的な法則について近年の革命的実践は何を物語っているか？チリ革命の場合も、ポルトガル革命の場合も、その他一連の諸国におけるある程度先鋭化した危機的状況の場合も、労働者階級や共産党は、なしとげられた社会主義革命が経験したのと同じ共通の問題に不可避的に直面させられている。これは権力の問題、革命的階級による権力の決定的なテコの利用の必要性でもあり、広範な階級的政治同盟の問題でもあり、古い国家機構の破壊の問題でもあり、労働者階級とその同盟者の独立した、有効な大衆組織の創設の問題でもあり、革命的獲得物の擁護の問題でもあり、その他多くの問題でもある。

レーニンは、革命は複雑な、むずかしい科学であると語った。あらゆる科学はその法則を持っている。もし肯定的な結果を得たいと望むならば、この法則を考慮に入れ、この法則を習得しなければならない。このレーニンの結論は、二〇世紀の革命の全歴史によって得心のいくように証明されている。

いうまでもなく、革命の諸法則にたいしては、具体的・歴史的アプローチが必要である。これらの諸法則が表現しているのは一般的な、安定した、本質的な連関だが、それにもかかわらずこれらの法則は、人類の社会的存在における深刻な変化の歴史的流れの局外に置かれているわけではない。法則そのものが変化し、新規に、特殊な形で現れている。社会的進展の未曽有のダイナミズムと深さをその特色とする現代では、とくにこのことを考慮することが重要である。

形態は本質を変えない

一般的なものと特殊なものの客観的弁証法は、革命家にたいし、時間と場所の具体的な条件にあてはめて革命の諸法則の作用を具体的に分析することを要求している。もちろんこれは理論的、実践的・政治的探求を必ずともなった複雑な創造的作業である。しかしその作業によってはじめて、法則を凝固した、死んだ図式としてではなく、生き生きとした姿で、行動への指針と

して理解することができるのである。

名優が自分自身の俳優としての個性を保ちつつ別人になる能力を持っているように、社会主義革命の諸法則も毎回、つねに自分の本質を保って特殊な形で現れている。これはマルクス主義者の前に重要な認識論的問題を提起しているが、この問題は一応、新しい歴史的諸条件のもとでの特殊な現れにおける法則の〝認知〟と呼ぶことができるだろう。

自分の考えを説明するために、歴史的な例を引用しよう。『平和と社会主義の諸問題』誌の一九七六年第九号に、デジョ・ネメシ・ハンガリー社会主義労働者党中央委政治局員の、権力をめざすハンガリー労働者階級の闘争の教訓にかんする論文が発表された。一九四六年に共産党は、人民民主主義がプロレタリアート独裁のない社会主義への道を示したと考えたことを筆者は指摘している。これは戦術ではなくて理論的結論であった。周知のように、一九四六―一九四九年に一部の他の東欧諸国でも共産主義者は同様の立場に立っていた。しばらくしてはじめて、人民民主主義革命の実践は、社会主義への移行のさいのプロレタリアートの政治的支配にかんする一般的な法則の廃止を示したのではなくて、新しい歴史的状況のもとでのその法則の現れの新しい形態を示したのだということが分かった。社会主義革命の一般的な法則を、これまでの既知のその諸体現と異なる独創的な体現において〝認知する〟ためには、一定の時間、実際的経験の蓄積、その理論的把握が要求されたのである。

真理への道は国際協力に

今日でも先進資本主義諸国における社会主義への移行のさいの政治権力の本質にかんする論争の中に、何かこのようなものが現れていないか、という質問が当然出てくる。明らかにここでは、労働者階級の権力成立の道、左翼勢力の同盟による過渡型の革命的・民主主義的権力成立の可能性、社会主義への移行期における労働者階級の政治的支配の特殊形態にかんする一連の新しい諸問題解決の創造的探求が必要である。しかし、だからといって、これらすべてのことによって、社会主義的タイプの国家権力の必要性にかんする問題が論議の対象でなくなるようなことは決してない。たとえわれわれがこの権力をどのような用語で示そうとも、である。問題は、〝昔なじみ〟、つまり、新しいメーキャップを施し、変わった衣装をまとった社会主義革命の一般法則を、今ここで〝見違えない〟ことにあるのではないだろうか？

前記の問題の解決は、現代の革命的過程における一般的なものと特殊なものの弁証法の他の諸問題の解決と同様に、マルクス・レーニン主義政党の国際的協力を要求している。L・I・ブレジネフはベルリンで開かれた欧州共産党会議での演説で、さまざまな党の見解と経験の広範な対比に賛成して、このことを呼びかけた。マルクス・レーニン主義理論の創造的発展は国際主義的アプローチなしには、プロレタリアートの階級闘争の国際的経験やすべての革命勢力、民主勢力の解放運動の経験の全面的な総括なしには考えられない。他方、マルクス・レーニン主義理論は、現代の社会革命の一般的な法則を表現しながら、プロレタリア国際主義の重要な要因として立ち現れている。この理論は、共産主義者にたいし、世界革命過程全体の国際主義的な座標系における各国の労働者階級の革命運動の経験を評価するための客観的な基準を与えている。それは民族的な狭小と限界をはらんだ政治的プラグマチズムを防いでいる。一般的なものと特殊なものとの相互関係の問題のマルクス・レーニン主義的解決は、このように、プロレタリア国際主義の立場から切り離しがたいのである。

トピックス

マユの処理に窒素を利用

バクー市のアゼルバイジャン科学アカデミー物理学研究所でマユの新しい処理方法が開発された。

1個のマユから平均1400m の生糸が取れるとして、6kgの生糸を得るには、60kgを超すマユを加工する必要がある。この生糸を取るために高温の蒸気でマユに特別の処理が施されている。この方法は現在、ソ連をはじめ諸外国で使われているが、加熱中に繊維が焦げついたり、ちぎれたり、高温でさなぎが液を出しマユの内側をだめにしたりする欠点を持っている。その結果、100個のマユのうち平均して13個が傷物となっている。

この損失を防ぐために同所究所の科学者たちは、新しい処理技術を開発した。この方法は、液体窒素で生きたさなぎの入ったマユを低温状態にする。マイナス196度の温度で、マユの中で起こる生物学的プロセス、物理化学的プロセスは完全にストップする。窒素そのものは、気化して、マユの表面から簡単に遊離する。

ソ連の国勢調査

次回のソ連全国国勢調査は来年1979年1月17日から8日間にわたって行われる。これは人口の移動が少ない厳冬期で、しかも学校の冬休みが終わる時期を選んだもの。この国勢調査は革命後6回目のもの。過去の調査は1920、29、39、59、70年に行われている。



トラクタただいま"受験中"……

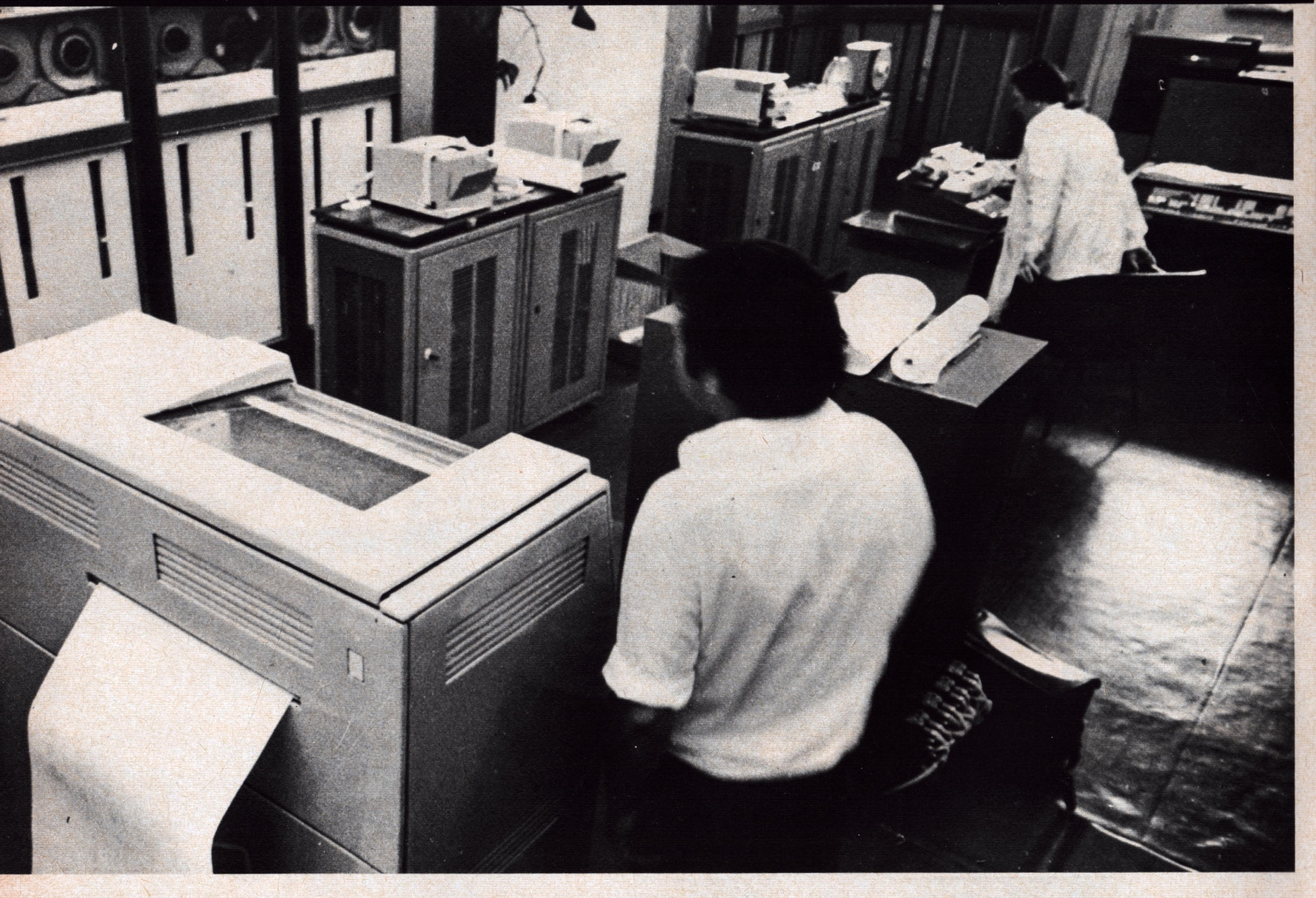
農場で使う前に、新しい農業機械は国の厳しく、精密な検査を受ける。そのために、ソ連のさまざまな気候帯に32の機械試験場と2カ所の研究所がある。その一つ、クバン(ロシア共和国南部)にある研究所をイリーナ・ニキーチナ・ノーボスチ通信記者が訪れた。以下はそのリポート。

運転手のいない機械

クバン・トラクタ・農業機械試験研究所の検査場で、何千もの新しい機械が、毎年試験を受けている。検査場の上に立っている明るい建物に上ると、そこからテスト場の様子がよく見える。セルゲイ・カルムイコフ技師が、無線操縦装置の自動制御盤を見せてくれる。機械は窓の向こうにあり、運転手はいない。いま"受験中"の機械は"ニバ"型コンバインと"ベラルーシ"型トラクタ。二台とも装着農機具を取り付け、信頼度の試験を受けている。テストコースには、くぼみ、とげ、鉄筋コンクリート製の急勾配の硬い波型板等いろいろな障害物があり、人間が乗っていたらとてももちこたえられそうもないが、運転手のいないトラクタやコンバインは、振動も、急カーブも恐れずに激しくジャンプしながら何時間もコースを行ったり来たりすることができる……。

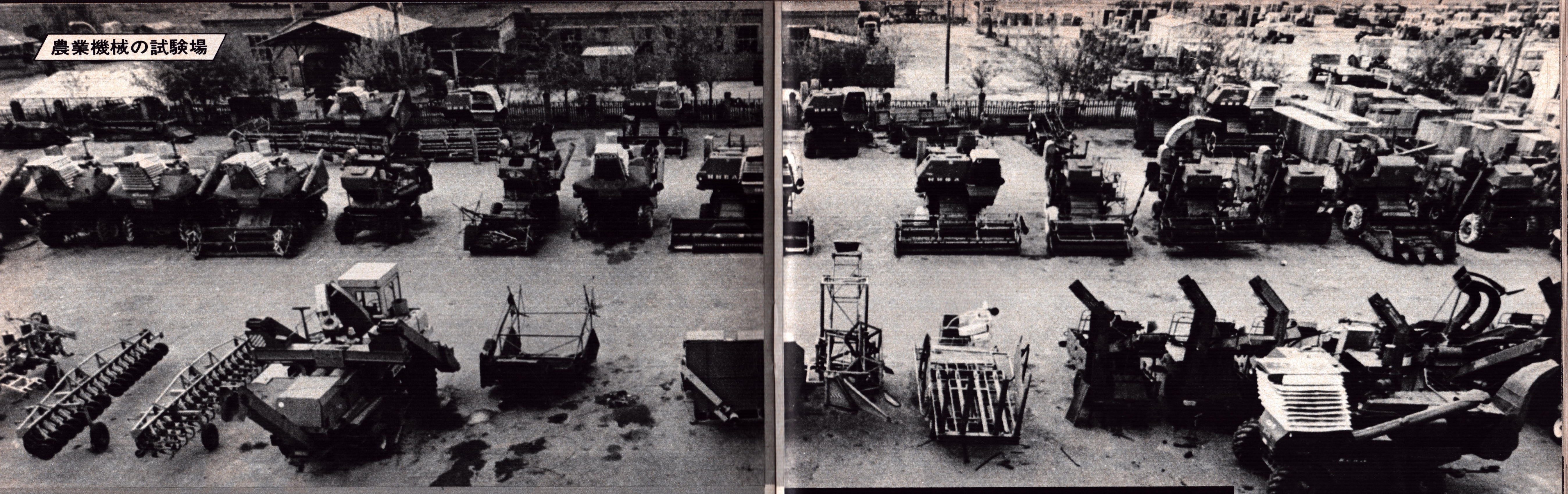
毎日、研究所では新型機械を試験している。つい最近、ジャガイモ収穫用の万能機械が"合格"した。種子といっしょに粒状の化学肥料をそれぞれのウネにまいていく種まき機が試験された。好成績を収めたのは、トマトの実を株ごと切り取り、それをえり分

▶作動中のトラクタの騒音を測定するのは、労働条件評価研究室の担当。



研究所の各セクションはコンピュータなど最新式の設備・測定器をそなえている。

農業機械の試験場



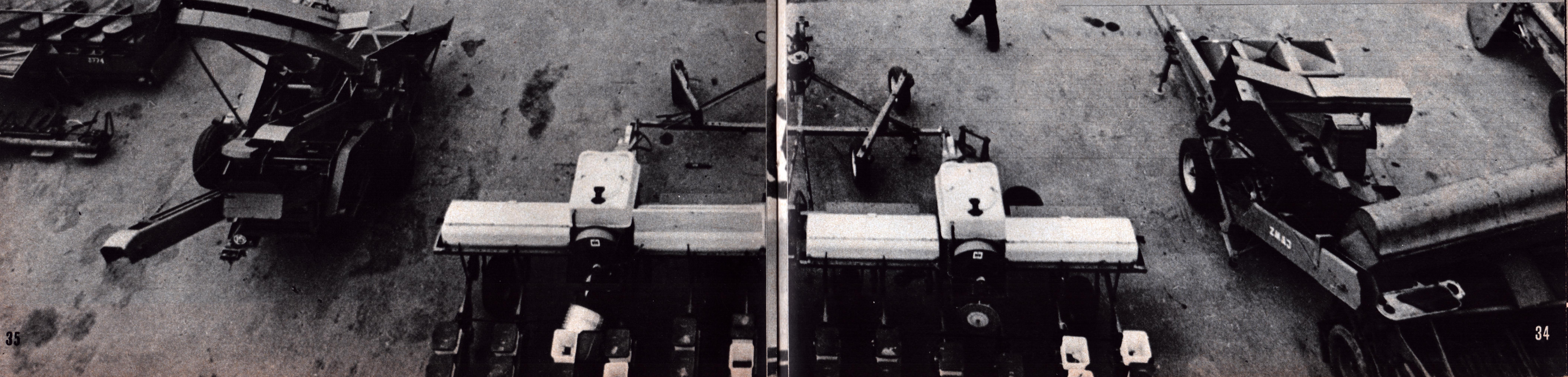
数十点、数百点の農機の見本が、ここクバン・トラクタ・農業機械試験研究所のテストコース、畑、多数の実験室で厳しい検査を受けている。

け、汚れをきれいに取り、赤いトマトと青いトマトに選別する自動式トマト収穫コンバイン。この機械は一時間に7tのトマトを処理できる。専門家はこのコンバインをタマネギ、キャベツ、ピーマンの収穫にも役立てようとしている。根に傷をつけないで一〇〇%収穫するビート収穫コンバイン〝スラブチナ〟も興味深い新製品。

外国との交流

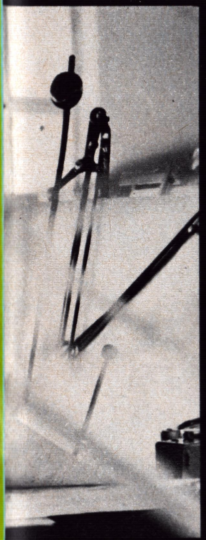
工学博士候補アレクサンドル・コロベイニコフ同研究所所長との会談が始まった直後に、ハンガリーからの電報が届けられた。研究所は社会主義諸国の同僚たちと密接に交流している。経済相互援助会議加盟諸国の農業機械製作では、各ユニット、エレメント、部品の規格統一が広範に進展している。従って、統一した試験法と評価法を各国が共同で作成することが必要になっている。

実務的な相互交流が行われているのは、社会主義諸国とだけではない。私が研究所を訪れた時、アメリカ製トラクタと日本製の稲刈りコンバインを試験していた。外国の企業は〝ソ連で試験済み〟のマークに敬意をはらう。ソ連の国家検査システムが農機にたいして厳しい要求を出していることを知っているからである。





検査に合格したソ連製穀物収穫用コンバイン"コーロス"



設計局では農機検査の方法や技術手段の改善、規格と方法論の作成に取り組んでいる。

労働条件の評価

同研究所で検査しているのは、農機の性能、信頼度、経済性だけではない。人間の労働条件の研究と改善にも大きな注意が払われている。

労働条件評価研究室長ニコライ・クズネツォフ衛生医は、"不合格"という、短い決裁つきの検査記録書を見せてくれた。不合格の基準は何か、とたずねたところ、クズネツォフ医師の説明は次のとおりだった。

「トラクタの操縦室が快適でなく、狭く、運転手が仕事中に自由に姿勢を変えられない場合。ハンドルが重く操作が難しい時、操縦室の暖房システムが効果的でない時、モーターの音が規準オーバーで、振動が規定以上の場合。運転手に、農地での仕事につきもののほこりよけがない場合……」

この研究室は、労働条件の規準が守られない場合には、量産機械の生産を停止させる権限を持っている。ある種類のコンバインは、検査用見本はすべての条件にパスしたが、工場のコンベヤから抜き出した機械が運転手の仕事の安全要求にこたえられなかったため、"摘発"された。

どんなに複雑な技術でも、人間優先は恒常不変の真理である。すべての農業労働者の労働をより楽で、安定した、危険の無いものにするという課題も、ここから出てくるのである。

☆　☆　☆

（カメラ　A・マカロフ）





一番大きな検査場のテストコースでは機械の信頼度、耐久性が試験される。

ウラルの宝石細工

「きわめて貴重な宝石がこれほど一個所に集まっている場所は、ウラル以外には世界中どこをさがしてもない」――と、著名なソ連の鉱物学者アレクサンドル・フェルスマン科学アカデミー会員は書いている。自然は、ウラル地方に、すべての色と陰影の宝石を、まるで特別に集めたかのよう。

ウラルの〝鉱物天国〟発見の端緒となったのは、今から約三〇〇年前に発見された煙水晶で、鉱山（やま）師たちがこの石を注意深く灰の中で焼いたり、衣をつけて焼いたりすると、それはきれいな金色を帯びた。ウラルに水晶が多いことがわかると、ゴールドラッシュならぬ〝宝石ラッシュ〟が始まった。事業欲の盛んな冒険家は煙水晶を〝漁（あさ）り〟そのついでに新しい宝石――ざくろ石とジャスパー、サファイアとくじゃく石、アメジスト、エメラルドやその他無数の鉱物を発見した。

18世紀にウラルのエカテリンブルグ市（現在のスベルドロフスク）に、ロシア最初の貴金属・宝石細工と研磨の工場ができた。だれにも教えられず独力でウデをみがいた名工たちの製品は、西欧の高名な職人の細工品と張り合った。ウラルの鉱物で作られた多くの貴金属・宝石装飾品は、レニングラードのエルミタージュ美術館、モスクワのクレムリンの武器庫や外国の大美術館に所蔵されている。

ロシアの職人に最も人気のあったのはくじゃく石。この宝石は婦人の装飾品だけでなく、手箱、花びん、小卓、宮殿のマントルピースの細部にも利用された。くじゃく石で作られたものに、冬宮の一ホールの壁、レニングラードのイサク寺院の巨大な円柱、エルミタージュ美術館に展示されている大花びんがある。

宝石細工は、職人に莫大な労力と芸術的才能を要求した。自然のままの鉱物の大部分は、少しも美しくない。だが、熟練工の手にかかると、見ばえのしない石塊でもみごとな芸術品に早変りする。たとえば、研磨した石板から、ロシアの職人は宮殿の美しい卓を作り、さまざまな色彩の鉱物を全体に敷き詰めた複雑なモザイク模様でその卓を装飾した。

20世紀初め、ウラルの宝石細工工芸は衰退したが、現在になって復活し、特に地下鉄駅のインテリア、レニングラードの宮殿の修復作業になくてはならぬものとなっている。

昔の職人の伝統は大切に保存され、今日では、スベルドロフスクの〝ロシアの宝石〟工場で発展している。この工場の製品は、ウラルの宝石で作られた装飾品や土産品。ウラルの宝石細工は、ソ連の他の地方の職人の細工と間違われることはない。オリジナルな手法はそれぞれの製品をまたとないものに仕上げる。スベルドロフスクの職人は金張り浮き彫り、金線、金粒、黒金象眼を用いている。その秘伝は昔から今日まで受けつがれてきた。

昔は宝石細工はすべて手作業だったが、今日では、レーザー、超音波、自動工作機がうまく利用されている。

たとえば、数字のコードをつけたカットの方式を機械に指示すると、機械は一つまた一つと面をカットする。しかも一つの結晶だけでなく、一度に三〇個の結晶を加工する。しかし、機械の作業がどんなに正確でも、最後の仕上げはやはり職人の手にゆだねられる。

スベルドロフスクの〝ロシアの宝石〟工場が、これらの非常に珍しい芸術品を出しているのは国内市場だけではない。工場の博物館には、さまざまな国際展や見本市でウラルの名工たちに授与された金メダルや賞状がたくさん保存されている。展示されているのは優れた作品であり、その一つに優美なくじゃく石の花がある。硬く重い石板をカッターで切った花弁だが、重さは感じられない。これは、現代の研磨工が美術館に贈呈したもので、古い民間伝承をモチーフとしたもの。

…昔、ウラルにダニーラという名工が住んでいた。ダニーラは、緑のくじゃく石から花を彫るという夢をいだいていた。そのやり方を知っているのは、銅の山の精であった。銅の山の精の地底の王国にある花や木はすべて、宝石で出来ていたが、銅の山の精は自分の財宝を人々には見せなかった。しかし、ダニーラの清い心と〝黄金の手〟に免じて、手に負えないくじゃく石をおとぎの花に変える才能を与えた。

（この伝説は、有名なソビエト作家パーベル・バジョフの民話風の作品『石の花』に描かれた。なおバジョフの作品は本誌前号で紹介）。

現代のウラルの宝石細工師は、そのすばらしい芸術を大切に保存し、発展させている。ここに紹介するのは彼らの作品の一部。

（カメラ　V・コルニューシン）



ウラルの宝石はこうして磨かれる…

ウラルの宝石細工





▲ミハイル・レスニク作のネックレス“春”。材料は洋銀と緑玉髄。
◀肉紅玉髄と洋銀の針金細工を使ったネックレス（V・ペトロフ作）
▼銀の針金細工をあしらったくじゃく石のペンダント（V・ペトロフ作）





▲V・ペトロフ作のネックレス“ウラルの調べ”（部分）。材料は玉髄の結晶鉱と洋銀。



▶草入り水晶に銀を組み合わせたペンダント（V・フラムツォフ作）
▼ウラルの名工の手になる宝石細工の数々



森林を守る生徒たち

文と写真　アレクサンドル・グラシチェンコフ



学校営林署員たちの〝物知りコンクール〟。パネルには「アリは森林の最高の看護人」と書いてある。生徒たちはアリ塚を保護しているが、アリ塚１個当たり２ha以上の森林が必要。



ウファ市第29学校の営林署員エジク・ボロンコフ(左)とユーラ・フラムツェフは、ヘリコプターから発見された山火事の消火に参加

学校営林署の活動

……ヘリコプターはもう三時間も飛び続けているが、下界の景色はいっこうに変化しない。青い川の流れに切り刻まれた、緑のタイガ地帯。しかし、巡視員の関心のまとは青や緑ではない。それとは別の色――炎の赤い色、煙の灰色をさがしているのだ。ヘリコプターは南ウラル、バシキール自治共和国（バシキリアとも呼ぶ）の森林保護局に所属しているが、今回の巡視員は学校営林署の〝署員〟――13歳のエジク・ボロンコフと14歳のユーラ・フラムツェフ。二人とも7年生で、鳥の鳴き声を聞き分け、獣の足跡を見分け、種を見て樹種を鑑定し、山火事森林用機械を運転し、

（46ページに続く）



20年後、ここは立派な松林になる…

森林を守る生徒たち



▲ロシア連邦共和国の学校営林署大会は、ロシアで最も森林の多い地域の一つ、バシキール自治共和国で開かれた。



だれが一番早く、正しく巣箱を組み立てられるか？これもコンクールの課題の一つ。



学校営林署員の技術コンクールに出品されたスノーモビル"バシキリア"。冬の森林巡回用に使われる。▼



▶カリーナの木はおいしい実をつけるだけではない。樹皮も葉も、民間薬として利用されている。



学校営林署員たちのコンクール。林業で使われる肥料の種類を当てなければならない。

を消すことができる。

ユーラとエジクが通学しているウファ市の第29普通教育学校の窓ぎわに、ドイツトウヒの木が立っている。そのそばの標札には、このドイツトウヒの子孫一〇〇本以上が自治共和国の首都ウファの通りに育っている、ドイツトウヒはヨーロッパで最も若い木であり、この土地に現われてから〃わずか〃一万年、有害な細菌を殺す物質――フィトンツィドを空中に分離放出する、と書かれている。

「第29学校の営林署は昨年、ソ連の学校の営林区の中で優秀なものと認定されました。バシキール自治共和国の面積は一四万平方km以上ですが、その約半分が森林地帯です。バシキリアでは現在、約二五〇の学校営林署が活動しています。一九七七年だけで、若い自然愛好者たちは一万ha以上に植樹し、二五三〇kgの種子を集め、約六〇〇〇個の鳥の巣箱を作り、約二〇〇〇のアリ塚を保護しました。子供たちは生物気候学的観察を行い、森林の奥深くの草地にエサをまいて獣や鳥の越冬を助けています」と、バシキリアのマルセル・アブドゥーロフ林業相は語った。

四〇万人以上が参加

ソ連には八〇〇〇の学校営林署が設けられており、四〇万人以上の子どもたちが活動している。学校営林署員のすべてが林学者になるわけではまったくないが、今、二枚のカシの葉がついた制帽をかぶっている生徒の大多数は、将来、森を愛し、大切にする人となるだろう。生徒の活動を積極的に援助しているのは、コムソモール中央委員会、林業省や教育省、林業労働組合中央委員会、自然保護協会のような権威ある組織である。

12歳以上の生徒ならだれでも学校営林署員になれる。営林署の仕事と活動を指導するのは、生物学の教師や林業の専門家。学校営林署には一定の森林地帯が確保される。二年に一度学校営林署の大会が開かれ、ソ連の森林の大部分が存在するロシア連邦共和国のあらゆる自治共和国、地方や州から七〇〇人の生徒が参加する。この大会は同時に、大きな祭典であり、経験交流、真剣な知識点検、陽気な競争の場でもある。

学校営林署員たちは山火事の消し方も知っている。





森の中のコンクール

「一番長生きする木は?」

「森にはどれくらいアリが必要ですか?」

「試験の時に〃役に立つ〃薬草は?」

私ならこの問題に一つも答えられなかっただろうが、〃物知りコンクール〃の参加者の12歳と14歳の子どもが、素早く、自信たっぷりに答えた。

このコンクールの優勝者は、カムチャツカのニーナ・イワノワとウスリースク市のレーナ・ペトロワの二人の女生徒。だが、技術者コンクールでは男生徒が雪辱した。そうそうたる専門家から成る審査委員会に高く評価されたのは、ノボシビルスクのアリョーシャ・シチェンドリクの作品である。彼は〃シベリアベニマツ〃と名づけた電子器具を設計製作した。これは、播種前に種子の水分と温度を計るものである。「シベリアベニマツは20年で実を結び、五〇〇年まで生きます」と、アリョーシャは設計の説明を始めた。

「極東のシベリアベニマツが貴重なのは、材木になったり、薬効ある油のとれる実がなるからだけではありません。タイガの動物界の半分の生活がこの樹種に依存しています。大変多くのことが、私たちがいかにシベリアベニマツを保護し、どれだけ新しい植樹をするかにかかっています。ですから、種子の質を正しくきわめるのはとても大事なことです…」

コンクールで二等になったのは、ペトロザボック(カレリア自治共和国首都)の9年生のビクトル・リュリュの考案。これは到達困難な場所での植樹に飛行船を使うという案で、飛行船から投下する苗木の根系は、肥料を含んだ土が詰まったビニール袋に入れておく。地上に投げ落とされると袋は破れ、苗木の植えつけはこれで完了。

しかし、最も感動的だったのは、大会参加者全員――大人も生徒も――が友情の森の植樹に出かけた日である。30―40年後には、植樹した人々と共に木々は成長し、今日の苗木の場所には松林がざわめいていることだろう。

国内問題

宇宙での偉業と地上の生活

『今日のソ連邦』評論員 ミハイル・エフィーモフ

3月はソ連では春の最初の月だ。春はつねに希望の季節であり、夢のふくらむ時でもある。だが一九七八年春はそれにもうひとつ、宇宙開発の新時代という特別な色どりが加わっている。今春は、宇宙開発の分野と社会主義諸国間の全面的協力強化の面の両方で、まさしく特筆すべき大事件のあった時なのだ。

宇宙開発の新時代

本号の発行日は4月1日だが、この日は〝エープリル・フール〟の日でもあり、友人や知人同士が信じられないようなニュースをいいふらして楽しむ習慣がある。私がここで〝4月バカ〟の話を持ちだしたのは、もし20年ほど前に次のようなニュースを流したら、文句なく、エープリル・フールの冗談だと思われたに決まっているからだ。読者のみなさんはどう思われるだろう。ニュースはこうだ。地球の周りをまわる軌道上のサリュート6号＝ソユーズ27号＝ソユーズ28号の、一台の軌道ステーションと二台の宇宙船からなる学術観測コンプレクスに乗ってロマネンコ、グレチコ、グバレフ（以上ソ連）とレメク（チェコスロバキア）の四人の宇宙飛行士の国際クルーが観測調査を行った。ソユーズ28号がドッキングして、軌道ステーションの機械室に装備されたドッキング・ユニットの空気もれがないかどうか確認した後、グバレフ、レメク両宇宙飛行士はサリュート6号に乗り移った。このユニットにはこれまでソユーズ26号と無人輸送船がドッキングを行っている。

こうして宇宙開発史上初めて軌道上で三つの連結機器をつなぎ合わせたコンプレクスが組み立てられた。

ソ連が実施している宇宙計画の科学上の偉大な意義はさておき、私がここでとくに強調したいのは、ソユーズ28号の打上げにより、インターコスモス計画にもとづいて社会主義諸国と協力して行う研究と宇宙空間の平和利用という新しい段階が開けた事実だ。この計画の実施にはソ連をはじめ、ブルガリア、ハンガリー、ドイツ民主共和国、キューバ、モンゴル、ポーランド、ルーマニア、チェコスロバキアが参加している。そしてチェコスロバキア人であるウラジーミル・レメク宇宙飛行士は祖国をソ連、米国に次いで三番目に地球周回軌道に人間を送った国にした。

レメクは今年30歳。チェコスロバキアで無血革命により政権が勤労者の手に渡った一九四八年2月政変の年に生まれている。20年後の一九六八年には反動勢力がチェコスロバキアを資本主義のもとへ戻そうとする重大な企てをした。〝反2月政変〟を夢みていたのだ。しかしこの企ては水のアワだった。チェコスロバキア国民は社会主義諸国の国際主義的援助によってみずからの獲得物を守り通した。私は、今度のウラジーミル・レメクの宇宙飛行こそ〝プラハの春〟を本当に体現したものだと思う。そしてこの快挙は社会主義諸国の科学技術の進歩の結果、また、兄弟諸国の緊密な協力とソ連・チェコスロバキア両国民をひとつに結びつけている真の友好の結果、可能となったのだ。

両国の国家と党の指導者レオニード・ブレジネフとグスタフ・フサークは、サリュート6号に宛てた祝電の中で、「宇宙における国際協力は社会主義諸国間の兄弟関係をあらためて証明するものであり、社会主義的国際主義の力を示すもうひとつの証拠にほかならない」と書いている。

国家価格委員会の発表

一方、この時地上でもある事件が起こっていた。3月1日、ソ連の全中央紙にソ連閣僚会議国家価格委員会の発表が掲載された。この発表は、個々の商品の小売価格やサービス料金を整理するために一連の値上げ、値下げが実施されるというものだ。値下げされたのは一七品目の小売価格で、白黒テレビ（昨年の生産台数は六〇〇万台で、テレビのほぼ86%）が20%、家庭用小型冷蔵庫が平均15%、合成繊維が平均20%、各種の合成繊維製品が25—30%などとなっている。値上げされたのは四種類の商品価格とサービス料金。具体的には、金・プラチナ製品が60%高くなったほか、ガソリン、自家用乗用車の修理・サービス料金、コーヒーおよびチョコレート菓子製品が値上がりした。

値下げ品目に比較すれば問題にならぬほど小さいというものの、今度の値上げが大きな社会的反響をよんだのは当然のことだ。

これに関連して、次の一連の点について読者に注意を向けてもらいたい。

たとえ四種類の品目・サービスであろうと、値上げが注目されたのは、何よりもまず、このこと自体がソ連の現実では極めてまれだからだ。恐らく、ここ数年に小売り価格が上がったことは数えるほどしかあるまい。ソ連では食料品の99%、非食料品の90%以上が一九七〇年以来値上がりしていない、と言えば十分おわかりだろう。

安定している物価

わが国の価格安定は、目に見える風貌をさえ持っている。これは外国人には余りなじみのない顔だ。ソ連ではふつう、ほとんどの商品の値段が直接レッテルに、時には品物自体に印刷される。ゴム長靴の底にその値段が始めから鋳こまれているのを見て、ある日本人旅行客がかなり驚いたことを私は覚えているが、わが国の消費者にとってこれはごく当たり前のことだ。ソ連の消費者は、店頭の値段や洋裁店の価格表が店主の気まぐれで決められるものでもなく（そんな人間がわが国にはいないから）、不安定な市況に左右されるものでもないことを知っている。

ガソリンとコーヒーの値上げ

値上げの原因は物によって異なる。ガソリンが二倍くらい高くなったのは、わが国でその原価が上がっているためだ。なにしろ現在、石油を得るためには、シベリアの奥地まで行き、永久凍土層に孔をうがち、寒気を克服しなければならない。これは莫大な金銭的支出、物質投下を必要とする。

値上げ前のわが国のハイオクタンガソリン価格は、原油価格と同じだった。これからは一リットルのガソリンが一五—二〇コペイカ（約四五—七〇円）になる。排気量二四〇〇ccの〝ボルガ〟を愛車とする私にとって、これはかなりの痛手だ。しかし公平な目で見れば、値上げ後でさえ、ガソリンがふつうのミネラルウォーターより高くないことを認めざるをえない。

コーヒーとカカオ製品の値上げ理由も納得できる。この場合、値上げは、これら商品の貿易価格が著しく上がった結果だ。コーヒー、カカオ豆は国内では産出しないので、ソ連はそれらをすべて輸入しているのだ。モスクワ・プーシキン広場にあるわれわれの編集局のビュッフェで飲むコーヒーが、われわれに無関係な理由によって一杯五コペイカ（約二〇円）から一四コペイカ（約五〇円）になるのは、もちろん残念だ。いくらかのなぐさめは、コーヒー愛飲家がソ連にはそれほど多くないということだ。圧倒的に多数の人々、ことに地方の人々は紅茶の方を好む。ココアとなると、ソ連には愛好者が多く、値上げの影響はコーヒーより強い。

社会政策の確固たる原則

金・プラチナ製装飾品の値上げについて私に言わせれば、これはわが国の物価面での社会政策を反映するものだ。その政策の要点は次のように説明できる。第一に、国家は生活必需品（肉、牛乳、パンなど）の価格を〝凍結〟しており、そのために毎年およそ二〇〇億ルーブルを国家予算から支出している。第二に、基本的なサービス（交通機関、住宅、教育、医療）は、社会のどの成員にとっても完全に手が届くように整えられている。第三に、いくつかの品物（貴金属製品、アルコール飲料、珍味食品など）の価格を比較的高くすることによって、国家は物質的な富を、やや余裕の乏しい家庭に再分配している。

この社会政策の確固たる原則は、前述の国家価格委員会の発表にも現われている。べつに経済学者でなくともわかることだが、数多くの日用品が値下げされる結果、ソ連国民が得るものは、値上げによって失うものより多くなる。

加えて、布告の後半に含まれる付帯条件が注目に値する。つまり、金製品の値上げは歯科治療用の金冠には及ぼされない。また、婚約指輪をはめることは伝統になっているから、初婚の男女には指輪購入のために一定額の補助金が支給される。さらに、無料または割引料金で自動車を貸与されている身体障害者（この制度はわが国で非常に広く適用されている）にたいし、ガソリン代、自動車修理・整備料金の値上がり分を補償することが規定されている。

最後に次のことを強調しておきたい。ソ連の経済・社会発展国家計画にもとづき、一九七八年の国民一人当たりの実質収入は3%上昇することになっている。これが実現することを疑うソ連国民は一人もいない。だから、われわれの家庭では、将来にたいする明るい希望に満ちた楽天的な気分で、暖かい春の訪れを迎えることができたのだ。

☆ ☆ ☆

トピックス

じゅうたんの博物館

アゼルバイジャン共和国の首都バクーに、世界で唯一のじゅうたんの国立博物館が開設された。世界で有名なカフカズじゅうたん（特にけば立てのないもの）の90%がアゼルバイジャン製である。歴史学者は紀元前二〇〇〇年代にこの地域でじゅうたん織りが行われていたと主張している。昔のアゼルバイジャンの家庭生活は、じゅうたんなしでは考えられなかった。人々はその上で食事をし、眠り、そしてじゅうたんで寒さを防ぎ、家を飾った。

水田の水を自動調節

ソ連最大の米作地帯クラスノダル地方（北カフカズ）では、これまで水田の水量調節を人手に頼っていたが、このほど、この水量の自動調節設備が開発された。この設備の導入により、稲の成育に必要な水量が常時保持され、一t／haの増収が見込まれる。

科学技術

“カゼ”との闘い

“早い”ワクチンの開発

すべての伝染病のなかで、人間がもっともかかりやすいのは、ビールス性インフルエンザ。毎年、インフルエンザは数百万人の健康を害し、社会に計り知れない損害をもたらしている。だからこそ、インフルエンザとの闘いは大きな問題なのである。

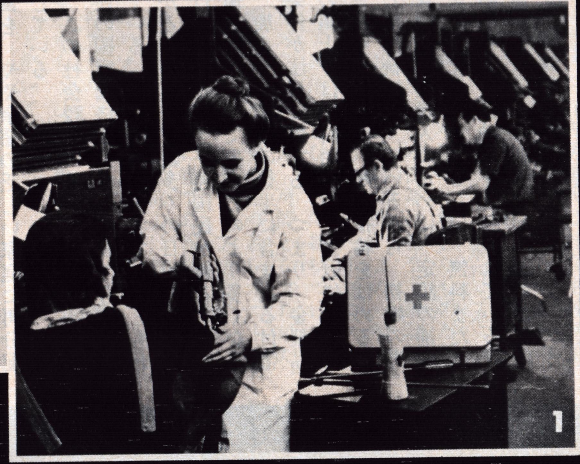
ソ連では、住民に免疫をつくるために、以前は生ワクチンが使用されていた。これは、病原体の活動がすっかり弱められ、実際の病気を引き起す力はないが、人間の身体に自然な抵抗力をつけるように処理されたビールスである。こうして身体は伝染病と闘うことを“覚える”。

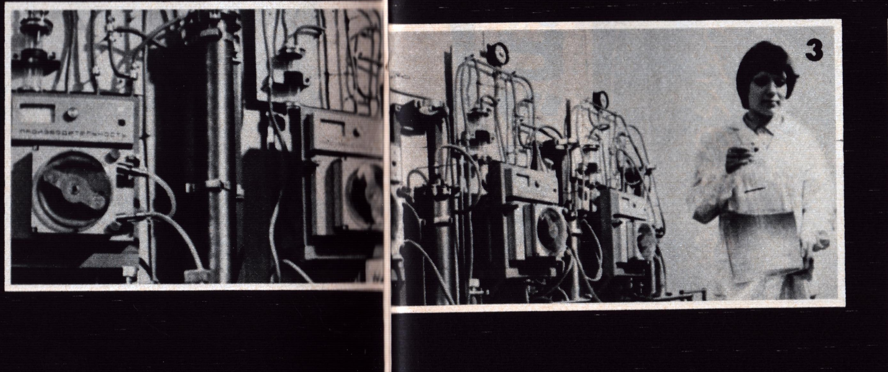
しかし、生ワクチンの製造には、人体に予期せぬ余病を併発させる“思いがけない”ビールスの混入を未然に防ぐという仕事が付いて回る。従って、汚染防止の徹底的検査が要求されるが、これは大変難かしい。地上に存在するあらゆる微生物を一つ残らず、迅速に、確実に発見する方法はまだ無いからだ。ビールスの力を弱める過程もきわめて複雑である。これらすべての処理が行われた後でも、ワクチンは研究室の綿密な検査を必要とし、さらに、医学者の監視のもとに志願者に試されなければならない。それが済んで初めて、ワクチンを生産に回せるのである。こうして、流行病をもたらしたビールスの確認から、それに抵抗力をもつ生ワクチンの大量生産までには何カ月もかかる。

この時間を短くする方法は、いわゆる“死んだ”ワクチンの生産である。このため、ここ数十年、ソ連ではこのようなワクチンの開発に熱心に取り組んでいる。この種のワクチン製造には、伝染病が最初に猛威を振るった場所の初期の患者からとったビールスが利用される。ビールスを鶏卵で培養し、集め、不要物を取り除いたあと、このビールスを“殺す”。その結果、ビールスは、人間の身体に抵抗力をつけるのを助ける能力は保ちながら、病原体としての力を失う。この作業には多くの時間を必要としない。

ソ連では、インフルエンザ用の“死んだ”ワクチンが数種類開発されている。これらすべては綿密に検査され、研究されている。レニングラード市のパスツール記念伝染病学・微生物学研究所だけで、二種類の“死んだ”インフルエンザ用ワクチンが実用化のために準備された。それらはすでに最初の実験を終え、すべての大人（年齢制限なし）だけでなく、児童にも接種して良いことが証明された。

（カメラ　V・バラノフスキー）







1　レニングラードのポリグラフマシ印刷機工場の従業員たちに予防接種をするパスツール記念伝染病学・微生物学研究所のラリサ・ムーヒナ所員

2　インフルエンザ研究所（レニングラード）の計算センターでは、コンピュータを使って、ソ連のすべての都市から入ってくるインフルエンザ流行のデータを処理している。

3　新しい効果的なワクチンを製造するための半工業的装置。いずれ、この装置によって、一定の型のインフルエンザに指向的な効果を持つワクチンを前もって開発できるようになるだろう。



▲ワクチンの接種はこういう高圧注射器で行われている。

読者のページ

読みやすくなったサイズ

東京都　川崎　弥生

とても読みやすくなりました。手軽に持ち運びできますし。もう少し働く婦人についての記事が欲しいですね。

東京都　加藤　紀夫

B5版になって携行しやすくなり、気軽に読めるようになりました。楽しみにして毎号読んでいます。

名古屋市　稲垣　康幸

他の本といっしょに持って行く時、本誌の大きさがちょうど合って便利になった。日本で行われる催し物等の紹介がもっと豊富だとたいへんありがたい。

モスクワ放送への要望から

兵庫県　前田　英明

超音速旅客機TU＝一四四のことを紹介して下さい。

山形市　市村　悟
仙台市　猪股　俊行

「ソ連の歴史」という番組をつくって放送してください。

秋田市　小山　洋幸

新しいシベリア鉄道について、もっとくわしく知りたいと思います。

八戸市　中渡　明弘

今学校でソ連の工業を勉強しています。ソ連の工業地帯と、石油、ガス、石炭が採れる地域について教えて下さい。

鎌ヶ谷市　清田　誠一郎

ソ連の大望遠鏡のことを放送して下さい。

富山市　山森　靖雄

どうしてソ連では物価が上がらないのですか?

福井市　谷口　雅一

モスクワ・オリンピックについてもっと知りたい。

釧路市　柳谷　純一

社会的消費基金についての放送を聞きましたが、よくわかりませんでした。もっとわかりやすく説明して下さい。

〔編集部から〕

これらの質問や要望はすべてモスクワ放送あてにきたものです。『今日のソ連邦』誌は、モスクワ放送編成局と緊密に連絡を取りあっています。しかし聴取者の方々は、仕事や学校へ行っていて、いつも放送をお聴きになれるというわけではありません。そこで、本誌編集部が代わって、日本の聴取者の皆さんのいくつかのご要望におこたえすることになりました。

本誌のバックナンバーには、上記のような質問や要望に答えている記事が掲載されています。

『今日のソ連邦』の編集部では、ご質問をお寄せくださったすべての方に、適当な資料をお送りします。

トピックス

地震帯に高層ホテル

カザフ共和国の首都アルマアタで25階建て、一〇〇〇人収容のホテル〝カザフスタン〟がこのほど完工。このホテルの高さは一〇二m。ソ連の地震多発地帯でこのように高い建物が建てられたのは今回が初めて。

新しい高層ホテルはアルマアタの最も美しい建物の一つになった。ホテルの外装には現地産の貝殻石灰岩、色とりどりの大理石、花崗岩が広く使われている。快適なシングルやツインの客室の窓からはアルマアタ市街のパノラマ、ザイリースキー・アラタウ山脈の峰々が見える。レストランと喫茶室は一度に一〇〇〇人以上にサービスできる。ホテルは集中空調システムを持ち、8台の高速エレベータがある。

このホテルは鉄筋コンクリートの一体構造で、スライディング・フォーム工法で建設された。なお、この工法で同時に積み上げられた壁の外周は四八〇mもあった。

連邦構成共和国と自治共和国のちがい

●読者の質問に答える●

連邦構成共和国と自治共和国とはどうちがうか、という本誌の読者、湯沢良樹さんの質問にお答えします。

湯沢さんも恐らくすでにご存じのことと思いますが、ソ連は、大小一〇〇以上の民族を統一した多民族国家です。これらの民族は、人口数と領土の広さに従って、連邦構成共和国、自治共和国、自治州、自治管区に統合されています。

ソ連邦が15の同権の連邦構成共和国で構成されていることは、読者のみなさんもご存知でしょう。それぞれの共和国はすべて主権国家で、それぞれが自国の憲法、首都、国章、国旗を持っています。諸共和国の統合は、もっぱら各共和国の自由意思によることですから、ソ連邦憲法により、それぞれの共和国には、ソ連邦から自由に脱退する権利が留保されています。すべての共和国が、自国の内政を管理し、ソ連邦全体の指導に参加する同一の権利を持っています。たとえばそれぞれの共和国は、全連邦的意義を持つ諸問題の解決に参加し、ソ連邦のすべての最高機関に代表を出しています。ソ連の国会であるソ連邦最高会議では、それぞれの共和国が、民族会議（2院のうちの一つ）に32の議席を持ち、もう一つの院である連邦会議には、共和国の人口に比例した数の議席を持っています。

連邦構成共和国の最高会議幹部会議長はソ連邦最高会議幹部会副議長となっています。また連邦構成共和国最高裁判所の長官はすべてソ連邦最高裁判所の構成員となっています。

連邦構成共和国は、ソ連邦の権限のわく外で、自国領内で国家権力を自主的に行使し、自国の行政区画問題を解決し、自主的に外国と関係をむすび、国際組織の活動に参加する権利を持っています。たとえば、ウクライナ、ベロルシア両連邦構成共和国は、ファシズムにたいする勝利への両共和国の貢献が認められた印として国連に代表を出しています。

自治共和国は、連邦構成共和国のなかに入っています。自治共和国が最も多いのはロシア連邦でその数は16、グルジア共和国には二つ、ウズベク、アゼルバイジャン両共和国にはそれぞれ一つずつあります。

ソビエト社会主義自治共和国（ASSR）は、ソ連邦および所属の連邦構成共和国の権限に属さないすべての事柄について自治権を行使しています。たとえば、自治共和国の最高機関は必要があれば自国の憲法を修正し、自国の国民経済計画と予算を承認し、共和国に所属する現地の工業、農業、商業各企業と組織を管理し、現地の産業を指導し、ソ連邦および連邦構成共和国に所属する諸企業の状態と経営の監督をしています。

それぞれの自治共和国が、その国の国会、政府、法律、憲法を持っています。自治共和国の憲法では、その共和国の民族的特質が考慮されていますが、この憲法はソ連邦および所属の連邦構成共和国の憲法に従って構成されています。自治共和国の領土は、その共和国の同意なしには変更できません。

自治共和国の外国との交際は、その共和国が入っている連邦構成共和国の然るべき機関をつうじて行われています。自治共和国には、連邦構成共和国およびソ連邦の主権が及んでいます。

自治共和国は連邦構成共和国を構成する国としてソ連邦にも加入しているのですが、これらの自治共和国はすべて、ソ連の最高国家権力機関であるソ連邦最高会議に直接に代表を送りこんでいます。たとえばソ連最高会議民族会議へは、各自治共和国から11人ずつの代議員が選出され、また連邦会議へは、その共和国の人口数に相応した数の代議員が選出されています。



歴史を秘めた北のまち

——ベリーキー・ウスチュグを訪ねて

文と写真 ユーリー・ルイプチンスキー

スホナ川から見たベリーキー・ウスチュグの町並み。川岸と白い石造りの建物が見事な調和を見せる。

モスクワと”同い年”

ベリーキー・ウスチュグの住民は、15分ごとに古い時計——ウスペンスキー寺院の銅製の鐘の音を聞く。この時計はモスクワのクレムリンのスパスカヤ塔にある時計をそっくりそのまま小さくしたもの。そしてどちらの時計も、このベリーキー・ウスチュグの名工たちによって作られたものである。

モスクワとベリーキー・ウスチュグはともに一一四七年に創立された。しかし、時は両都市の命運をそれぞれ違ったものにしている。ボログダ州（ソ連ヨーロッパ部の北）のつつましい地区中心地ベリーキー・ウスチュグ（人口四万）の面積は一〇〇年前とほとんど変わらない。端から端まで歩いても二、三kmである。

中距離ジェット旅客機ＹＡＫ＝40のタラップから降りれば、そこはカミツレの草原。遠くの方で、コルホーズの家畜の群れの鈴の音がかすかに聞こえる。スホナ川の岸に出ると、遠い昔そのままに、水際の広い桟橋のところで女たちが洗濯をしている。

円柱のある古い家のそばをジーパンをはいて、小わきにトランジスタラジオを抱えた若者が歩いている。向こうから同じような”カウボーイ”がくる。二人は出会って、会話が始まった。間違いなく、北の若者だった。独特の方言で分かるのだ。そしてこの方言はおそらく、彼らの孫の代にも、ひ孫の代にも伝えられていくだろう。

ウスチュグは長い間、歴史の騒音から離れて存在し、多くの古いしきたり、好み、伝統を残している現代では数少ない都市の一つである。しかし、時がこの地に大切に守ってきたもっとも貴重なものについて語るならば、それは疑いなく、ウスチュグの外観——またとない建築物、芸術的な文化財の数々である。

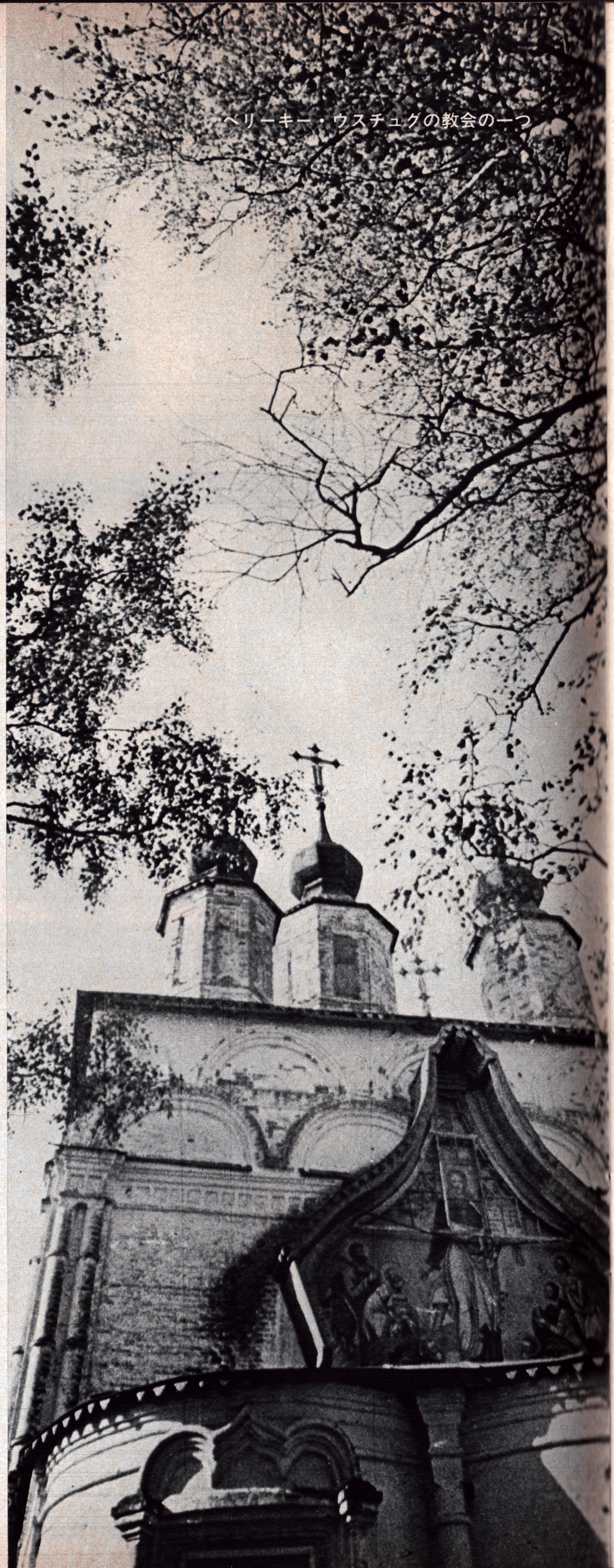
今日でも、スホナ川から見たウスチュグの眺めは、高い川岸が、川に沿って広がる白い石造りの建築物を一つに結びつけて、すばらしい、調和のとれたアンサンブルを見せている。

ウスチュグには壮麗な教会、昔の商人や貴族の邸宅など約80の建築記念物が保存されている。その中で最もすばらしいものはベリーキー・ウスチュグの最盛期であった16—17世紀に建てられたものである。

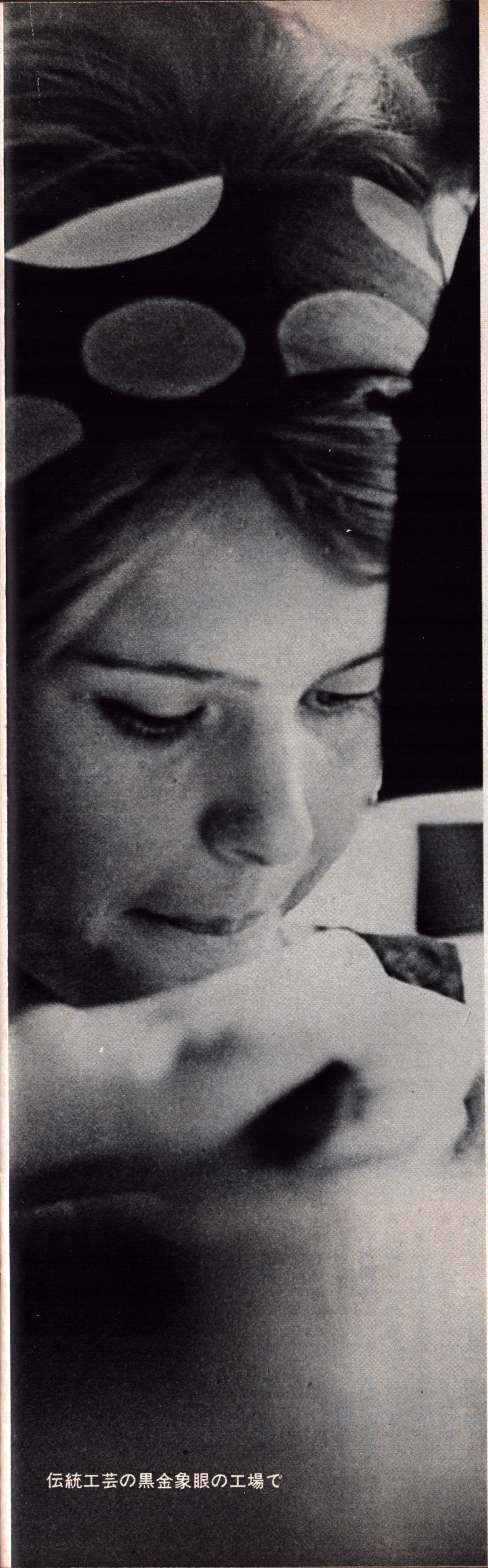
ある古文書に書いてある通り”水と外国交易のお陰で”、ウスチュグは富み、美しさを増していった。



船舶修理工場の食堂のインテリアも歴史の町にふさわしく…



ヘリーキー・ウスチュグの教会の一つ



伝統工芸の黒金象眼の工場で



伝統的な窓の飾りかまち。ウスチュグの人々は100年前も、そして200年前も、このようにして自分の家を美しく飾った。

北方の歴史のまち

一五五三年、暴風雨を避けるため、白海から北ドビナ河口に、リチャード・チャンスラー船長のイギリス船が入ってきた。この外国の客は、商人や役人たちの大きな関心を集めた。チャンスラー船長はイワン雷帝に引き合わされた。皇帝の鋭い眼力は、北部ルーシにイギリス船が出現したことの重要性をすぐに見てとった。バルト海沿岸への通路を断たれていたモスクワ公国は、こうして白海経由で外国との貿易の可能性を得たのである。

新しい交易路はまずモスクワからボログダまで陸路を行き、それからスホナと北ドビ



黒金象眼工場で働く人たちは女性が圧倒的に多い。



黒金象眼の長老エフスタフィー・シリニコフスキー（左）と画家のイワン・ロフレツォフは古くからの親友。二人ともウスチュグでは非常に尊敬されている。



小さな都市のよさは、市長が一日の間にどこへでも顔を出せること。写真は幼稚園を訪れたプレハーノフ市長。

ナ両河の水路で白海に通じていた。スホナ河畔のウスチュグから水路はさらに東のウラルへと延びていた。こうして、ウスチュグは交易の一大中心地となった。ウスチュグの大規模な定期市は、多くの外国商人たちでにぎわった。ここではシベリアのクロテンの毛皮と東西の遠い国々の商品が取引された。ウスチュグの町に〝ベリーキー〟――〝偉大な〟という称号が与えられたのは、この時期のことである。

〝貿易事業〟の名人になったウスチュグ人たちは遠方からの客を受け入れるだけでなく、彼ら自身未踏の困難な旅に出かけて行った。ウスチュグの中心部に市民が自慢にしている現代の記念碑がある。これはこの土地の出身者セミョン・デジニョフ（一六〇五―七二または七三）を記念したものである。デジニョフは数隻の小さな船に装備を積み、わずかな乗組員たちと共にチュコト半島沿岸を航海して、アジアとアメリカの間に海峡が存在することを証明したのだった（ベーリングよりも80年早い）。ウスチュグからはこのほか、エロフェイ・ハバロフ（ハバロフスク市の名称はその名を記念する）、ウラジーミル・アトラソフ、ニキータ・シャラウーロフ、ワシリー・

シロフなど、勇敢な探険家たちが輩出した。

名工のまち

私の新しい知人である建築技師ニコライ・ユージンツェフは喜んで案内役を引き受けた。彼は生粋のウスチュグ人である。レニングラードで学び、今は市の建設局の保安技術部長をしている。

ウスチュグの生活はどうかとたずねた。

「とても気に入っています。そうでなければレニングラードに残ったでしょうよ。大体、われわれの時代に地方ということが何かを意味するでしょうか? モスクワまで飛行機で2時間です。レニングラードも同じです。私たちはモスクワと同じテレビ放送を見ています。さらに、観光都市としてのウスチュグには特別の事情もあります。ここには画家、作家、ジャーナリストなどいろいろな文化人がしょっちゅうやって来ます」

私たちは一緒に土地の伝統工芸——黒金象眼の工場を訪ねた。

ベリーキー・ウスチュグの黒金象眼は昔から有名だった。しかし、19世紀末にこの工芸は衰え、消滅寸前にまでなった。最後の熟練工（自営職人）たちは協同組合を結成した。現在、黒金象眼は第二の誕生を迎えている。協同組合は大きな企業に成長し、今では数百人が働いている。従業員は主として婦人である。才能だけでなく、大きな忍耐を要求するこの工芸は女性向きの仕事なのだ。

ウスチュグの黒金象眼はまれに見る堅固さを特色としている。ここの名工たちの細工は世界的名声を博しており、ニューヨーク、パリ、ブリュッセルの博覧会でも大きな人気を集めた。

再び〝偉大なまち〟に？

果てしないらせん階段を回りながら、市ソビエト執行委員会議長（市長）のアレクセイ・プレハーノフと共にウスペンスキー寺院の鐘楼まで登っていった。

ここからの眺めはすばらしい。まちの全景、遠くの森、スホナ川の向こうの村々、そして北国の峻厳さを漂わせながら、地平線に向かってゆっくりと流れていく川そのものが、一望のもとに見える。

「町外れの住宅団地が見えますか?——と、プレハーノフ市長が聞いた——あれは船舶修理工場の労働者の住宅です。そして、あの建物が工場です。地上の、市の中心部からは団地や工場は全然見えません。だからウスチュグはまち全体が今も昔のままだと考えることもできます。市の中心部は建築保護区として保存することが決定されています。しかし、郊外は急速に開けて行くでしょう。これは市の発展計画で予定されています。最近、スホナ川の船の航行がこんなにも活発になっているのには、それだけの理由があるのです。

今ちょうど、あのカリ塩を積んだ船を曳いているタグボートは、われわれのところで作ったものです。同じ型のタグボートはボルガ川やシベリアの河川でも活躍しています。そしてそれらの船の船長の多くが、ウスチュグ河川水運学校の卒業生です。このほか市には、さらに4校の中等専門学校があります。

ところで、とくに注目していただきたい新建造物は、鉄道の駅です。鉄道そのものは、すでにできています。ベリーキー・ウスチュグの星がいつ消えたか、ご存知ですか? 一八九七年、モスクワからウラルへの鉄道がウスチュグを無視して開通したときです…」

ベリーキー・ウスチュグの未来について、ウスチュグが再び〝偉大〟（ベリーキー）な都市になる運命にあるかどうか予想するのはやめよう。しかし、ウスチュグも自分なりに時代に追い付く努力を続けているのである。



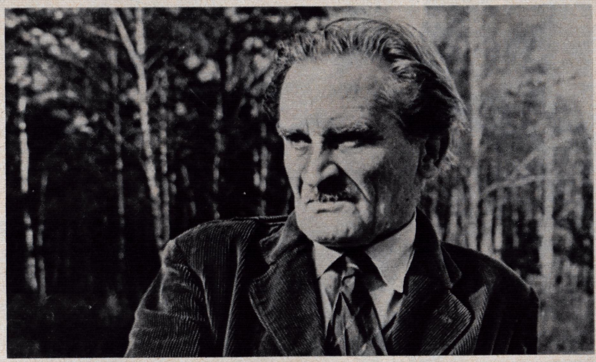
この川がかつてこのまちに富と繁栄をもたらした。



今は建築文化財と工芸で知られるこの小さなまちは、モスクワと同じ1147年の創立（写真の日時計にこの数字が示されている）。ここはまた、多くの勇敢な探検家を生んだ土地でもある。

ユーリー・オレーシャ

文芸批評家　エブゲニー・シードロフ



ロシア・ソビエト文学のアンソロジー

ユーリー・オレーシャ（一八九九―一九六〇）は、ひじょうにもてはやされたこともあれば、読者にまったくかえりみられなかったこともある作家ですが、同時代の人々の意識の中には、つねに、容赦ないまでに正しい作家的洞察力に恵まれた人として残っています。その散文は、ソビエト文学の傑出した現象と言えるでしょう。

オレーシャはオデッサで育ちました。ソビエト政権の最初のころ、ここで多くの詩人や作家が創作活動を始めました。バグリツキー、カターエフ、イリフとペトロフ、バーベリ、パウストフスキー、スラービンなど、世界的に有名な人々がそれです。そしてこれらの人々の中で、もっとも才能ある作家のひとりが、オレーシャでした。

オレーシャは生涯、歩いて散歩するのが好きでした。歩きながら、彼は短編をつくり、面白いシチュエーションを考え、物語を設定しました。彼が机に向かっている姿は、めったに見られませんでした。

一九二〇年代にオレーシャはモスクワへ移り、ソ連の鉄道従業員の新聞『汽笛』で、コラムニストとして働く一方、夜になると、童話『三人の太っちょ』や長編『羨望』を書くのでした。この二つの作品は、オレーシャのあり余る空想力が心理分析の大胆な真実と結合しているこの作家の散文の、驚嘆すべき世界を読者のまえに展開しました。

この二つの作品は、オレーシャを一躍有名にしましたが、オレーシャはそのとき、まだ30歳でした。

これらの作品の最初の句は、そのまま人々の記憶に刻まれました。それはこうです――「彼は毎朝、トイレットで歌をうたう。彼がどんなに楽天的で、健全な人間かが分かるだろう」

この一節で『羨望』は始まっています。だから読者は、この一つの思いがけない、端的なデテールによって、この書き出しに込められている皮肉を感じとりながら、同時にこの作品の登場人物を想像することができます。

皮肉なイントネーションはアンドレイ・バビチェフをねたんでいる語り手ニコライ・カバレロフのせいです。アンドレイはきっぱりとソビエト政権の側に立ち、ボリシェビキといっしょに新生活を建設します。

オレーシャは小ブルジョア的諸関係、虚栄心、小市民的心理の滅びゆく世界を、皮肉な色彩で描いています。革命体制の楽天的で健全な生活が、アンドレイの弟、イワン・バビチェフとその友人カバレロフの個人主義的な意識と鋭く対比されています。バビチェフやカバレロフは、生活から脱落した〃精神的地下〃の人々で、彼らの告白は、個人的なものだけが大切で、社会的なものは理解できないばかりか敵対的でさえあるインテリゲンチアのエゴイズムの破滅を伝えています。

（この作品が、このような対立が若いソビエトでは珍しい現象ではなかった一九二七年につくられたということを忘れないようにしましょう。社会主義は〃創造的個性〃に害を加えると誤って考えていた、才能ある、感受性の鋭いインテリゲンチアたちは少なくなかったのです）

オレーシャにとってこの問題は、すでに青年時代に、はっきり解決されています。物語『三人の太っちょ』の中で彼は、革命の創造的な力にたいする、人民の力にたいする信頼を表明しています。彼は読者をまっすぐ、それとなく故郷のオデッサを思わせるおとぎの町へつれ込みます。町は海辺にあって、運河が縦横に走り、アーチ型の橋が運河をまたいでいます。これが、労働者や学者や芸術家たちの指導のもとに立ち上がった人民が、自由に、楽しく、幸せに暮らすために貪欲な支配者たち――三人の太っちょを追放した町です。

オレーシャはこう語っています――「ブルジョア童話作家は、子どもたちに一つの考え――きみたちをとりまく世界の中では、人間は恐ろしく孤独だ、獲得しなければならない富がどこかできらめいている、すべては富のためだ！　奪ったり、辱しめたり、卑しめたりするのは、富のためだという考えを吹き込んできたし、いまも吹き込んでいる。われわれは、このような考えを打破し、子どものための自分たちの本の中で、〃富〃や〃幸福〃や〃名誉〃を再検討し、古くからのこれらの概念を新しい意味で満たさなければならない」

『三人の太っちょ』は何度も上演されたり、映画化され、これを題材にオペラも書かれています。すでに何年も、ソ連の子どもたちのもっとも好きな作品の一つになっています。奇知に富む、腕白な、詩的なこの童話の運命は幸せでした。ここには、オレーシャの若き日の才能のもっともふんだんな、明るい特徴が刻まれています。退屈とエゴイズムは終生、オレーシャの創作の主要な敵でした。

作家の外貌には、拭いがたい子どもっぽさと、経験の苦い英知とがまじり合っています。彼はあるときこう書いています――「犬たち万歳！　虎たち万歳！　オオムよ、バクよ、カバよ、灰色のクマよ万歳！　しゅすのズボンに金ぶちメガネの秘書・小鳥さん万歳！　草の中で、洞窟で、石のあいだで生きているすべてのものよ万歳！　私のいない世界よ万歳！」

オレーシャはすぐれた短編を少なからずつくっています。それらの中でも、もっとも有名なものの一つが、本号に紹介する『さくらんぼのタネ』です。物語は二つの尺度の中で――真の芸術家に賦与された愛と空想の国と、世間の時間表の日常的な空気の中で起こっているかのようです。現実と空想は、オレーシャにあってはしばしば衝突しています。オレーシャは、無関心な目からは隠された、創造的な個性の空想によって面目を一新された世界の晴れやかさを、頑強に主張しています。

オレーシャの作品がほとんど発表されない時期がありました。映画の仕事をして、脚本を書いていたのです（たとえば、ドストエフスキーの長編『白痴』の映画化）。

オレーシャの死後初めて、作家の創作の〃内幕〃が明らかにされました。生涯の最後の10年、オレーシャは自分の主要な作品になるだろうと考えていた作品の草稿に、苦しみながら取り組んでいました。毎日毎日オレーシャは、自伝的回想や小編や生活についての哲学的思考が複雑に交錯したメモや日記をつけました。

『一行として書かざる日なし』（オレーシャの最後の作品）が世に出たとき、読者や批評家たちはその中に、大作家の複雑な精神世界を知りました。

オレーシャはごまかしを憎み、自分の作品にたいしても、きわめて厳格な態度をとりました。この感情は、時には病的とさえ見えるほどです。オレーシャが手本としたのは、プーシキンやトルストイの作品であり、手本があまりにも立派だったので、オレーシャのペンははかどりませんでした。その苦闘のあとは、この最後の作品の行間にも明らかに感じられます。

だが読者は、無条件でこの作品を受け入れました。ユーリー・オレーシャは、何世代もの人々が注意を向ける告白を残したのです。

最後に、この告白的な作品を飾る一部分を引用したいと思います。

「この世とのお別れについての本を書かなければならない。私はじつにしばしば、ひとりで大変遠くまで行く。にもかかわらず、ある種の拠点との結びつきは切れない。つまり、私は自分自身の中に暮らしているのだろうか？　まさか？　果たして私は、自分の中に生活のすべてを持ち合わせているのか？　果たして私の中に、すべてが備っているのか？　すべての蓄積が？　この私が、私の生活のすべてなのか？　そんなことはありえない。私がこの世に現れたときから、私の一歩ごとに、外的な環境が私を支配し、たえず私を針金や紐でつないでいる太陽が、私を動かし、永遠に充電してくれる私のステーションなのだろう。

太陽は、雨雲の密ではない、だがほとんどすき間のない障害を通してぼんやり輝く円として、にじみ出ている。ただにじみ出ているだけでも、ほら、石に影が見える。かろうじて識別できる程度ではあるが、それでも私は歩道に自分の影を、門の影を、そして肝心なことに、木から垂れさがっている何かの花の房をさえ見ることができるのだ！

太陽とは、一体何だ？　私の人間としての生活の中には、実質的なものとしても、隠されたものとしても、リアルなものとしても、比喩的なものとしても、太陽の関与なしですんだものは一つとしてなかった。私が何をしようとも、私がどこへ行こうとも、眠っているときも、年老いてからも、私はつねに光線の末端にいた」

短編

さくらんぼのタネ

Y・オレーシャ
山田　はじめ訳

日曜日に、私はナターシャの別荘に呼ばれた。客は私のほかに、あと三人——二人の娘とボリス・ミハイロビチだった。娘たちとナターシャの弟エラストは、川へボート遊びに出かけた。私たち、すなわちナターシャとボリス・ミハイロビチと私は、森へ出かけた。森で、私たちは小さな空き地に陣どった。空き地は、明るく日が射していた。ナターシャが顔を上げた。とつぜん、彼女の顔は、輝く白磁のお皿のようになった。

ナターシャは、私には対等な態度で話しかけ、ボリス・ミハイロビチには目上の人に対するように話しかけ、少し媚（こ）びるのだった。それが私にはしゃくなこと、私がボリス・ミハイロビチを嫉（ねた）んでいることを彼女は知っていた。だから彼女はしばしば私の手を握って、有無を言わせず、こう尋ねるのだった——

「そうでしょ、フェージャ？」

つまり、私に許しを求めているのだろうが、直接的に表現しないで、遠回しに表現しているのだ。

小鳥の話になった。というのは、茂みから、小鳥の滑稽な声が聞こえてきたからだ。私は言った——私はいままで一度もツグミを見たことがない、と。そしてきいた——ツグミってどんな鳥ですか？

茂みの中から小鳥が飛び出して来た。小鳥は空き地の上を飛び過ぎて、私たちの頭上近くにつき出した枝にとまった。とまったというよりも、揺れる枝の上で腰を浮かしていた。

私は考えた。小鳥の目はなんて美しくないんだろう。眉がなく、まぶたがひどく目立つ。

「あれは何ですか？」と私はきいた。「ツグミですか？　そうなんですね？」

だれもそれに答えなかった。私は彼らに背を向けた。私の貪るような視線は、彼らを追ってはいなかった。彼らは、二人だけになったのを楽しんでいた。私は小鳥を見ていた。ふり返って見ると、ボリス・ミハイロビチはナターシャの頬をなでている。その手は、おまえは小鳥を見ていればいいんだ、しゃくにさわる若造め！　と言っているようだった。私はもう小鳥を見てはいなかった。私は耳をそばだてていた。ねばっこい接吻の音がした。私はふり返らない。だが彼らのことは分かっている。彼らは私が身ぶるいしたのを見ているのだ。

「あれはツグミ？」と私はきいた。

小鳥はもういなかった。樹冠をくぐり抜けて、上空へ飛び去ってしまったのだった。くぐり抜けるのは並大抵のことではなかった。小鳥は木の葉をかすめながら飛んで行った。

ナターシャは私たちに、さくらんぼをごちそうした。子どものころの癖で、私はタネを一つ、口の中に残しておいた。それは口の中で転がり、まわりをきれいにしゃぶり尽くされた。私はそれを取り出した。それは、木でできているように見えた。

私はさくらんぼのタネを口に入れたまま、別荘をあとにした。

私は、目に見えない国を旅していた。

こうして私は歩いて行く。別荘からまちへ帰る途中だ。太陽は沈みかかり、私は東へ向かって歩いている。私は二重の旅をしているのだ。一つの旅は、だれからも見える旅だ。行き会う人は、人気のない、緑の茂る場所を歩いている人間を見るだろう。だが、この平和そうに歩いている人間には何が起こっているのだろう？　彼は、前方に自分の影を見ている。影は遠くに伸びて、地面を動いて行く。その足は長くて、たよりない。私は空き地を横切る。影はレンガの壁を這いのぼり、とつぜん頭が見えなくなる。出会った人は、そこまでは見ていない。見ているのは私ひとりだけだ。私は、二つの棟の間にある廊下へと歩を進める。廊下の天井はかなり高いのに、影でふさがっている。ここの地面はじめじめして、野菜畑のように弾力性がある。こっちに向かって、壁ぞいに、あらかじめよけながら、野良犬が走って来た。私たちはすれちがった。私はふり返る。越えて来た敷居が光っている。その敷居のところで、一瞬、赤い太陽の光が犬を包んだ。そのあと、犬は空き地へ駆け出したが、そのときになって初めて、犬の色が赤かったということが分かった。

これらすべては、目に見えない国で起こっているのだ。なぜなら、ふつうの目でみえる国では、別のことが起こっているからだ。たんに、歩いている者が犬に出会い、日が沈み、空き地に緑が茂っているにすぎない……

見えない国は、関心と想像の世界である。旅人は孤独ではない！　二人の姉妹が両脇を歩き、旅人の手をとって導く。その一人は関心であり、もう一人は想像である。

だからといってどうなのだ？　それはすべてに逆らって、秩序や社会に逆らって、私自身の感覚の幻の法律以外のいかなる法律にも従わない世界を私がつくり出しているというのか？　それなら、どうなのだ？　世界は二つある——古い世界と新しい世界が。でもどんな世界だ？　第三の世界は？　道は二つある。それでは、第三の道はどんな道か？



ナターシャは私にデートを約束したが、自分はまだ来ていない。

私は約束の半時間まえに着く。

街頭時計が交差点の上にかかっている。それは樽を想起させる——そう思わない？　二つの文字盤。二つの底。おお、空っぽの時間の樽！

ナターシャは3時半に来るはずだ。

私は待つ。おお、もちろん、やっては来ない。3時10分。

私は路面電車の停留場に立っている。まわりではすべてが動いており、私ひとりだけが立ちどまっている……歩いている人々が、遠くから私を見ている。

さあ、始まるぞ……見知らぬ婦人が近づいて来る。

「あのう」と見知らぬ婦人が言う。「27番でクドリンスカヤまで行けるでしょうか？」

私がデートの相手を待っているなんて、だれも知るはずがないのだ。〈屈託ない笑顔の若者が他人に親切を施すために街頭へ出てきた、彼ならなんでも話し、道を教え、安心させてくれる……彼のところへ行きましょう！　彼のところへ！〉ぐらいに思っているのだろう。

「はい」と私は、いんぎんさのあまり、ぐったりして答える。「27番にお乗りになれば、クドリンスカヤまで行かれます……」

そう言ってから気づいて、あわてて婦人のあとを追いかける。

「ああ、ちがいます！　ちがいます！　16番にお乗りになって下さい」

デートのことは忘れよう。私は恋人じゃないんだから。私は善良な街頭の天才だ。私のところへどうぞ！　私のところへ！

3時15分。時計の針は重なって、横に伸びている。それを見ながら、私は考える。

〈ハエが足をこすっている。落ちつきのない時間のハエが〉

ばからしい！　それにしても何という時間のハエだ！

彼女は来ない、まだ来ない。

こんどは赤軍兵士が近づいて来る。

「おたずねします」と彼はきく。「ダーウィン博物館はどこでしょうか？」

「知りません……多分あっち……ごめんなさい……ごめんなさい、知らないんです、同志、知らないんです……」

それから！　お次はだれ？　押し合わないで……

タクシーが急カーブを描いて私の方へやって来る。ああ、運転手が何と私を蔑視していることか！　魂によって蔑視しているのではない、ちがう！　魂で私を蔑視してくれるのなら、むしろ好意的でさえある……彼は手袋で私を蔑視しているのだ!!　同志運転手、信じてくれ、私は素人だ。だから私は、あなたの車をどこへ回したらいいか知らないのだ……

私がここに立っているのは、方向を指示するためではない……私には私の用がある……私が立っているのは、やむをえない、悲しいわけがあるのだ！　私が笑っているのは、親切さからではない。私は緊張のあまり笑っているのだ……よく見てくれ！

「ワルソノフィエフスキーはどっちかね？」と運転手が肩ごしにきく。

私は大わらわで説明する。こう行って、こう行って、それからこう行って……

どうしてこんなことになってしまったのだ、なぜ私は往来のまん中につっ立って、しなければならない仕事に本腰を入れて取り組まないのだ？

盲人が行く。

おや、私を呼んでいる！　ステッキで私をつつく……

「10番は運行してますか？」と彼はたずねる。「えっ？　10番は？」

「いいえ」と私は、相手をさするようにして答える。「いいえ、同志、これは10番ではありません。2番です。ああ、10番がやって来ます」

すでに、約束の時間より10分すぎている。これ以上待つことがあろうか？　あるいは彼女は、どこかで急いでいるかもしれない。飛んでいるかも？

〈ああ、遅れてしまったわ、ああ、遅れてしまったわ!!〉

最初の婦人は、すでに16番で行ってしまった。赤軍兵士も博物館のひんやりしたホールを歩き回っているだろう。タクシーの運転手は、ワルソノフィエフスキーでクラクションを鳴らしており、盲人もステッキを頼りに、腹を立て立て、自分本位に、バスのステップを登っていることだろう。

みんな満足している！　みんな幸せだ！

だが私は、意味もなく笑いながら立っている。

そしてまた、人々が近づいて来て、質問する。老婆、酔っ払い、旗を立てた子どもたちの一行。そして私は、すでに両手で空気を切り刻み始めていた。もうたんに、偶然質問された通行人としてアゴをしゃくっているのではない。そうではない！　私はすでに手のひらを縦にして、手をのばしている……さらに一分後には、私の手には指揮棒が握られていることだろう……

「さがって！」と私は叫んでいることだろう。「ストップ！　ワルソノフィエフスキーですか？　Uターンして！　おばあさん、右へ！　ストップ！」

おやおや！　私は笛をくわえている……ピピー……私は笛を吹く権利があるのだ……子どもたち、うらやましいだろう！　さがって！　おお……これはどうだ。私はもう、向き合った2台の車両のあいだに立つことができる。私は立っている。ほら、片足を前に出して、腕をうしろに組んで、真紅の棒を肩胛骨にあてがいながら。

私を祝福してくれ、ナターシャ。私は民警になったのだ……

そのとき私は見た。アベリが少し遠くに立って、私を見ている。

（アベリは私の隣人である）

ナターシャは来ない。それははっきりしている。私はアベリを呼ぶ。

私――きみは見ていたのかい、アベリ？

アベリ――見ていたよ。きみは気違いだ。

私――きみは見ていたのかい、アベリ？　私は民警になったんだ。

間。そして、もう一度時計の方に目をやる。これは何と！　4時10分まえだ。

私――もっとも、きみには分からないだろうが。私が民警に早変わりしたのは、見えない国の中でのことなんだ。

アベリ――きみの見えない国は、観念のたわごとさ。

私――もっとも驚くべきことは何だか知ってるかい、アベリ？　驚くべきは、この魔法の国では、私はなぜか民警として登場していることなんだよ。きっと私は、そこでは支配者のように落ちついて、堂々と歩き、私の手の中では、賢者のすばらしい錫杖（しゃくじょう）が輝いているはずだ……ほら、私は指揮棒を持っている！　実際の世界と空想の世界の、何と奇妙な交差だろう。

アベリ（沈黙）

そしてさらに奇妙なのは、私を民警に変えている前提が、受け入れられなかった愛だということだ。

アベリ――ぼくにはさっぱり分からない。ベルグソン哲学のようだね。

私は、タネを地面に埋めることに決めた。

私は場所を選んで、埋めた。

〈ここに、ナターシャへの私の愛を記念して植えた桜の木が生えるのだ〉と私は考える。〈きっと、5年もすれば、私とナターシャは、春、この新しい木の根もとで出会うだろう。私たちは、木をはさんで向かい合う。桜の木はそう高くはならないから、つま先で立てば、いちばん上の花にもさわることができる。太陽は明るく輝き、春はまだ閑散としていることだろう。それは、どぶが子どもたちを誘惑する春の日だ。そしてすでに、想像のこの木も、満開になっていることだろう〉

私は言う。

「ナターシャ、日は晴れて、明るく、陽光をいっそう明るくするような風が吹いている。風が私の木をゆすぶり、木はエナメル塗りの小枝をきしらせている。その花の一つ一つが、吹き起こされては、またうつむく。そのために、木はバラ色になったり、白くなったりする。これは春の万花鏡だよ、ナターシャ。5年まえ、あなたは私にさくらんぼをごちそうしてくれた。覚えてますか？　受け入れられなかった愛が、記憶をいっそうみじめに、鮮明にしています。私はいまでも覚えています。あなたの手のひらは、さくらんぼの汁で赤紫色でした。あなたはその手のひらを筒のように丸めて、私にさくらんぼを渡してくれた。私は、タネを口の中に入れて持ち帰りました。私はそれを、あなたが私を愛してくれなかったことの記念として植えました。その木が、いま花咲いています。ごらんなさい。あのとき私は笑いものにされました。あなたを獲得したボリス・ミハイロビチは勇敢だった。私は空想家で、未熟だった。私は、あなたたちが接吻しているあいだ、ツグミを探していました。私はロマンチストだったのです。でも、いいですか、たくましい、堂々たる大木も、ロマンチシズムのタネから育つのです。サクラの花は男の魂だと日本では考えられています。ほら、ずんぐりした、たくましい日本の木が立っています。いいですか、ナターシャ、ロマンチシズムとは勇気あるものです。それを笑ってはいけません。問題は、どのようにアプローチするかにあるからです。ボリス・ミハイロビチが空き地にうずくまって、未熟なタネを埋めている私に出会ったなら、彼は私にたいする勝利、空想家にたいする男の勝利を、もう一度味わうでしょう。そのとき私は、地中にタネを隠していたからです。この木は、あなたにもらった私の幼子です、ナターシャ。ボリス・ミハイロビチがあなたに産ませた息子を、連れておいでなさい。彼が、未熟な主体から生まれたこの木ほどに健康で、純粋で、泰然自若としているかを見てあげましょう」

私は別荘からわが家へ帰った。とたんに、壁のかげからアベリが出て来た。彼は労働組合の仕事をしている。背が低く、木綿のジャンパーを着て、青いソックスにサンダルをひっかけている。ヒゲを剃っているのに、頬は黒い。アベリはいつ見ても、ヒゲが生えているようだ。彼には頬は二つではなく、一つしかないと考えることもできる。黒い一つの頬。アベリはカギ鼻で、黒い頬が一つ。

アベリ――どうしたんだい？　ぼくは今日、郊外列車へ乗ったら、きみがぽつねんとしゃがみ込んで、両手で地面を引っ掻いているのが見えた。どうしたんだい？

私――（沈黙）

（部屋の中を歩きまわっている）。男がしゃがみ込んで、地面を掘っている。彼は何をしているのだ？　分からない。彼は実験しているのか？　それとも発作か？　分からない。きみには発作があるんじゃないの？

私――（しばらく間をおいて）。私が何を考えていたか分かるかい、アベリ？　私は、空想家は子どもをつくるべきではないということを考えてたんだ。新しい世界に、空想家の子どもたちがなぜ必要だろう？　空想家は、新しい世界のために、樹木を植えればいいんだよ。

アベリ――そんなことは、計画のように決めるわけにはいかないよ。

関心の国は、あなたがこれから就寝しようと、服をぬぎながらベッドの方へ引き寄せる枕もとの椅子の上で始まる。あなたは早朝目を覚ます。家はまだ眠っているが、部屋には陽光が満ちている。静かだ。じっと動かない明暗を乱すから、動いてはいけない。椅子の上にはソックスがある。褐色だ。だが、明暗の落ちつきと鮮明さの中に、とつぜん、あなたは褐色の上に個々の、空中にからんだ、真紅、青、オレンジ色など、さまざまな色の羊毛を認めるだろう。

日曜日の朝。私はふたたび客に呼ばれて、通いなれた道をナターシャのところへと歩いている。〝見えない国の旅〟を書かなければならない。もしよければ、この〝旅〟の中の一章を紹介しよう。題して――

『急いで石を投げた男』

レンガの壁の下に低木が茂っていた。私は茂みに沿って、小道を歩き出した。私は壁にくぼみを見つけて、そこへ石を投げ込みたくなった。私は身をかがめた。足もとに石があった。そのとき私は、アリ塚を見つけた。

20年ほどまえに見つけたのが、私が見た最後のアリ塚だった。おお、もちろんこの20年間に、私は一度ならずアリ塚に出くわしたことがある。それでは少ない？　恐らく私は、アリ塚を目にしただろう。だが見ても、〈アリ塚の脇を歩いている〉とは思わなかった。ただ〝アリ塚〟という単語が、意識の中で分離したにすぎない。生きた形象は一瞬のうちに、このていねいに折れ曲がった術語によって追い出されてしまうのだった。

おお、私は思い出す。アリ塚が不意に見つかったのだ。一つ……おお！　それから、もう一つ！　さらに、もう一つ！　おやおや！　さらに、もう一つ！　同じことが今度も起こった。三つのアリ塚が次々に姿を現わしたのだ。

立ったままの位置からは、アリ塚を見つけることはできなかった。視線はただ、動くはずがないと見なすべき形の、何か落ちつかなさを捉えたのだった。だから視線は、よろこんでだまされた。私はアリ塚を見て、これはアリたちが大勢アリ塚のまわりを歩き回っているのではなく、アリ塚そのものが、砂丘のように崩れているのだ、と考えることにした。

私は石を握ったまま、壁から4歩ほどのところに立っていた。石は、くぼみの中に残るはずだった。私は手を振り上げた。石は飛び、レンガに当たった。一条のほこりが舞い上がった。命中しなかったのだ。石は壁ぎわの茂みの中に落ちた。そのとき私は、手のひらが開かれる以前にすでに私の手のひらの中で鳴っていた石の、喚声を聞いたにすぎない。

「待て！」と石が叫んだ。「私を見なさい！」

そして実際に、私は急ぎすぎた。石を点検すべきだったのだ。なるほど、石は注目に値するほどのものではない。だから石は、低木の茂みの中に消えてしまった！　そして私は、それを手に持っていながら、それがどんな色をしていたのかさえ知らないのだ。石は、あるいは紫色っぽかったかもしれない。あるいは、単色ではなく、いくつかの成分でできていたのかもしれない。何かの化石が、カブト虫の死骸かさくらんぼのタネが入っていたかもしれない。あるいはあの石は、多孔質だったかもしれない。そしてさらに、私が地面から拾い上げたのは、まったく石ではなく、緑色がかった骨だったかもしれない！

私は途中で、見学者たちの一行に出会った。

20人が、さくらんぼのタネが眠っている空地を歩いていた。引率しているのはアベリだった。私は脇へよけた。アベリは私に気がつかなかった。より正確に言えば、分からなかったのだ。彼は私を見はしたが、知覚はしなかったのだ。あらゆる盲信者と同様、彼は同意や反対を待ちおおせることなく、私を呑んでしまった。

アベリは一行から離れて、一行の方を向き（私に背を向けて）、勢いよく手を振って叫んだ。

「ここです！　ここです！　ここなのです！」

間。沈黙。

「クールスクのみなさん！」とアベリは叫んだ。「私はあなた方の想像力に期待します。想像して下さい、心配しないで!!」

おやおや！　アベリは想像の国へ入りこもうとしているのだ。彼は一行に、受け入れられなかった愛を記念して咲いている桜の木を見せようとしているのではないのか？

アベリは、見えない国への道を探している……

彼は歩く。彼は片足を振って立ちどまる。もう一度足を振る。そして、もう一度。彼は、歩いているあいだに足に巻きついた小さなつる草から逃れようとしているのだ。

彼は足ぶみをした。つる草はぷつんと切れ、小さな黄色い玉がころがった。

（この話の中にはどれだけ植物や樹木が出てくることか！）

「ここに、私がみなさんにお話しした巨大なものがそびえ立つでしょう」

……親愛なナターシャ、私は肝心なことを忘れていたよ。計画だ。計画があるのだ。5年後に、いまは空き地とどぶと無用の壁しかないこの場所に、巨大なコンクリートの建造物がそびえ立つのだ。春には、基礎工事が始まる。私の妹――想像は、軽率な性分だ。そうなったら、私の愚かなタネは、どこへ身を置けばいいのだ！　そうだ、あの見えない国では、あなたに献げた木は、花を咲かせる暇がないのだ……

見学者たちが、巨大なコンクリートの建造物へやって来るだろう。

彼らは、あなたの木は見ないだろう。本当に見えない国を見える国にすることはできないのだろうか？

この手紙は想像の手紙だ。私はこれを書いたわけではない。アベリが次のようなことを言わなければ、書くことができただろうに。

「建物は半円形に設置される」とアベリは言った。「半円形の内部は、すべてが庭園になる。きみには想像力があるのかい？」

「あるよ」と私は言った。「見えるよ、アベリ、はっきり見える。ここに庭園ができるのだ。そして、きみが立っているその場所には、桜の木が生えるだろう」

（さし絵　F・テルレツキー）

ソビエト・バレエのおし鳥スター

ソビエト・バレエの二つの星――エカテリーナ・マクシモワとウラジーミル・ワシリエフを別々に語ることはできない。それは二人が夫婦だという理由からではない。マクシモワとワシリエフが、バレエ史上かつてない踊りのデュエットを作っているからである。


振り付け師としてのワシリエフのデビュー作「イカロス」で熱演する二人。

踊りの二重奏

ボリショイ劇場のプログラムにこの二人の名前が初めて現われたのは一九五八年。そしてまたたく間の大成功、エトアール、国際コンクールでの数々の金賞。

しかし自分自身については、二人はしばしば否定詞を使って語る。

「私には、まだまだ自分がなってはいないように思われます」(と言うのはマクシモワ)。「脇から自分の眼で自分自身を見ようとするとき、まだまだ未完成の点が多いように思われます」(ワシリエフ)。「私には特別の天分があるようには思えません。歩行も回転も跳躍もします。しかし何人かの人はもっと上手です」(マクシモワ)。

控え目なのだろうか？ そうでもあれば、そうでもない。名手がすべてそうであるように、この二人もまた本当の価値を自分で知っている。恐らくこれが、かれらの最も大きな特徴であろう。たとえ成功が、あっという間に手に入ったとしても、毎日のきびしい仕事、新しいもののはてしない探求をやめることはない。

「どうすればいつも同じように踊ることができるか、と考えているわけではありません。別の踊りで自分を試してみたい、純情ものや恋愛ものだけでなく、別のものも踊ってみたいと思っています……」と、エカテリーナ・マクシモワは言う。

不断の探求、それはウラジーミル・ワシリエフの場合も同じだ。かれは役柄のない踊り手と呼ばれている。それほどかれの幅は広いのだ。古典バレエでも現代バレエでも、輝くばかりに演じる。しかしかれは、バレエ俳優だけでは満足しない。かれは振付け師としても自分を試している。そして自分で、メーキャップを探求し、主人公の顔や姿を自分で決めるのである。

ついでにいえば、ワシリエフについて書いたほとんどすべての人々が、この〃踊りの神様〃には、その顔にも姿にも、人間業ならぬものは何一つないということで意見が一致している。かれは、人々に振り向かれるような類の男ではない。髪はブロンドで、目は黒く、顔立ちもりっぱだが疲れた感じ、人の心をひきつける顔ではない。足は必要以上に太く、手も大きい。

しかしひとたびかれが舞台の人になると、その顔と姿からあらゆるものが作り出されるのである。ローマの剣闘士、フランスの王子、ギリシャ神話のイカロス、ロシア皇帝パーベル一世等々……

ウラジーミル・ワシリエフが28歳で演じた役は古典となった。それはソ連の作曲家アラム・ハチャトゥリャンのバレエ『スパルタクス』の主人公スパルタクスの役である。絶望、反抗、熱情、優しさ。この主人公においては、すべてが最高点まで、絶頂まで、そして狂暴にまで高められている。とくに印象的なのは、スパルタクスが身をかがめて愛人フリージャの足に頬を押しつける恋の場面である。ワシリエフにあっては、生命のすべてがこの接触のなかにある。過去と未来のすべてが、戦い、流血、死、不死がその姿の背後にあるが、優しい振舞いのこの一瞬だけは、これまでになく長く続くのである……

ワシリエフはこの役のなかで、それまでのあらゆる妙技の記録を破ったように思える。ワシリエフが宙を飛ぶかのように跳ねながら、空中で思いもよらぬコンビネーションをやってのけたあのすばらしい対角線跳躍は、いまでは伝説となっている。この跳躍は、即興的な意外性によって、人々に深い感動を与える。そしてここに、ワシリエフが人々の心をひきつける秘密がある。舞台でのかれの動きのすべては、目に見える努力など少しも必要としていないかのようである。しかし幕間のかれはいまにも倒れそうで、非常に疲れているように見える。だから、かれが次の幕をつとめる力をどうやって自分の中に見出すのか、ふしぎなほどである。

しかしあるとき不幸が起こった。足の傷は非常に重かったので、医師は、ワシリエフが舞台に完全に復帰できるかどうか不安に思った。

モスクワ近郊のサナトリウム、松葉杖、強制休暇。しかもこれらすべては、セルゲイ・スロニムスキーのバレエ『イカロス』の初演直前のことだった。このバレエを、かれはバレエマスターとして演出し、しかもそこで主役をつとめた。不幸のなかにありながら、この芸術家の鋼鉄の意志、その明確な目的意識と生活愛が、すべてを決定したのである。ウラジーミルは痛みをこらえながら、下げいこを始めた。それは筋肉を弱くしないためであり、自分の絶妙のテクニックを失わないためだった。そしてかれが舞台に復帰したその日が、かれの第二の誕生日となったのである。

マクシモワもワシリエフも、舞台芸術には関係のない家庭の出だった。マクシモワの母親は文芸関係の編集者だったし、ワシリエフの父親は自動車運転手であり、母親は合成繊維工場で働いていた。しかしモスクワ舞踊学校のきびしい委員会の審査を受けた数百人の子供のなかから、二人とも優秀な成績で採用された。学年が始まった。マクシモワは、かの女の最初の教師で、かつての名バレリーナ――エリザベータ・ゲルドトから見事な古典バレエを継承した。なおこの教師は、マイヤ・プリセツカヤ、ライサ・ストルチコワのようなスターを育てている。若い踊り手マクシモワがボリショイ劇場の一座に加わったとき、そこにはまだ大ウラノワが君臨していた。しかしそれはウラノワの最後の数シーズンだった。ウラノワは舞台を去ってからも、劇場にとどまって教師として働いた。マクシモワはウラノワのクラスに入ることができた。ウラノワは、自分がボリショイ劇場の舞台で踊った数多くの役をこのお気に入りの女弟子に伝えた。伝えながらも、マクシモワが自分自身を失わないようさとし、その最も大切なもの、かの女の個性を発揮させた。


『眠れる森の美女』の一場面。



往年の名バレリーナ、ガリーナ・ウラノワ（右）のレッスンを受けるマクシモワとワシリエフ。

ミンクスの『ドン・キホーテ』における軽率なキトリ、チャイコフスキーの『眠れる美女』における尊大なアブローラ、プロコフィエフのバレエ『シンデレラ』における善良で　素朴なシンデレラ、そして『スパルタクス』の優しくて愛情の深いフリージャ。形象はさまざまだが、マクシモワのどの役にも、"生きいきとした精神"が輝き、明るくて美しい人間の運命の太陽が輝いている。

舞台のマクシモワ、あの軽やかな、魅惑的で優雅なマクシモワを見れば、これが下げいこではいつも緊張し、ときには陰うつにさえ見える、あの同じバレリーナかとふしぎに思えるほどである。マクシモワが入念に、緊張して、汗だくになって仕事をすることは、かの女の輝かしい名声に劣らずよく知られている。

栄光も苦難も共に

ワシリエフの場合と同じようにエカテリーナ・マクシモワも、その創造的キャリヤの絶頂で大きな試練をうけた。椎骨の病気になり、医師から出演を禁止されたのである。観客は、自分たちの好きなバレリーナの姿が舞台から消えたことを悲しんだ。かの女の健康が心配され、手紙や花がとどけられた。そして長期休演のあと、マクシモワが『ジゼル』で舞台に復帰したとき、すべてのバレエ愛好家がこれを大々的に祝った。

いまではマクシモワとワシリエフがまたいっしょに踊っている。二つのユニークな天分がこれ以上にうまく結合され、相異なる個性がこれ以上にかたく溶け合うことを想像することは恐らくできまい。一方はマクシモワの洗練された女らしさ、もろさ、優雅さであり、他方は、ワシリエフの男性的な力強さと明るい気質である。ほかならぬこのような対立物の統一のなかに、このすばらしいカップルの成功の秘密があるのである。「踊りの相手をかばう」などという気持ちは、この二人には無縁である。反対にかれらは、たがいに補足し合い、それぞれが持っている最良の素質をたがいに引き立たせている。それは、めったにない統一、めったにない調和、そしてめったにない相互理解のデュエットである。

マクシモワとワシリエフをあらたに熱中させているのは、トレルの第八バイオリン協奏曲である。

〈何という音楽だ、気も狂わんばかりだ！　どんなすばらしいバレエが生まれることか〉ワシリエフはこのような考えのとりこになっている。

ワシリエフは上衣を脱ぎ、トリコ（バレエ用のタイツ）だけになって、壁一面の大鏡を背にして、ベンチに座る。自分のテープレコーダーを静かにかけて、聞き入る。それはかれにとってトレルの音楽と踊りのほかにはなにも存在しない緊張の瞬間である。マクシモワがならんで座り、リボンをトー・シューズに縫いつけている。上衣を肩にかけ、足を伸ばし、どこから見ても奔放自在のポーズである。

ワシリエフはやがてテープレコーダーの音をいっぱいに高める。休憩時間は終わった。一つ一つのポーズと、一つ一つの振付楽句の練習が始まる。

……この二人の労働日はぎりぎりまで充実している。しかし、ひまなときには、劇場で演劇の初演を見たり、絵画展を訪れることもできる。チェスのようなバレエの世界からは遠く離れた分野でさえ二人にとっては無縁ではない。この夫婦は、概してスポーツが好きだ。ワシリエフは水泳の名人であり、サッカーや、バレーボールもうまい。マクシモワはピンポンに凝っている。二人はよくモスクワ近郊で休暇を過ごす。二人とも、どちらかといえばロシアの中部地方、そこの森、川、きのこが好きである。

二人はいっしょにこの道に入り、喜びや困難や勝利をいっしょに分かち合ってきた。そしてソ連邦人民芸術家という高い称号もまた、ワシリエフとマクシモワにいっしょに与えられた。

ご要望にこたえて

日本で教えるソ連人教師

日本にいるロシア語教師のことを紹介してもらいたいという、本誌第6号に掲載した石田真弓さんのお手紙にお答えします。

尊敬する石田真弓さん！

ソ連から日本にやって来たロシア語教師にあなたは関心をお持ちですが、私もそのような教師の一人です。私が日ソ協会の日ソ学院で、ロシア語を教えるようになってから、もう2年になります。私は日ソ協会の招きで日本に来ました。日ソ協会がソ連のソ日協会にたいして、日ソ学院のためにロシア語教師を派遣してくれるよう依頼したのです。私は、日ソ学院がソ連から招待した最初の教師というわけでありませんが、2年というように長期間滞在するのは私が初めてです。

日本では近年、ロシア語の学習にたいする関心が高まっています。NHKがテレビでロシア語講座を放送しているほか、ソ連から来たロシア語教師が日本の多くの大学で教えています。そしてNHKロシア語講座の放送には、ソ連から特別に招かれた講師をはじめ、日本の大学で学んでいるソ連人学生、在日ソ連機関（大使館、通商代表部、新聞・通信社支局など）の働き手、勤務員の家族たちが絶えず参加しています。ソ連から来て日本の大学で教えているロシア語教師たちは、日本の大学で単に一定期間だけ教えるとか、あるいは交換方式によるなど、さまざまな条件でこれらの大学に招かれ来日しています。交換方式というのは、その大学の然るべき教員が引き換えにソ連へ行って、そこで教えるというものです。



日本人の"教え子"たちと

たとえば神戸外大は長年にわたってモスクワ国立大学と教師の交換をしています。私も一九七一年から七二年にかけて、このような交換協定にもとづいて、神戸外大で教えたことがあります。天理大学、大阪外大もソ連からロシア語教師を一貫して招へいしています。いまでは東京外大にもソ連のロシア語教師が招かれており、北海道にさえこのような教師がいます。このように日本にいる多くのソ連人ロシア語教師が、日本の若者にロシア語を教えていますが、若者だけではありません。私が教えている学生のなかにも、幾人かの年輩の人がいます。これは、かつてロシア語を学んだことがあるとか、あるいはロシア語に関係のある仕事をしている人たちです。この人たちは普通、ソ連と貿易をしている貿易会社の社員です。この人たちには、ロシア語の知識が求められているか、あるいは現在すでに身につけられている知識を深める必要があるのです。また数多くの人々が、ロシア文学の名作を原文で読みたいと思っています。あなたもきっとご存じだと思いますが、これらの名作は日本においても広く読まれています。

母国語を私のすべての学生に教えることは、私の大きな喜びです。私のささやかな仕事が、隣人同士である日ソ両国民の理解と友好関係を深める事業に役立つことを、私は期待しています。

モスクワでは、私はモスクワ国立大学付属アジア・アフリカ諸国大学に勤務しています。私は学生に日本語を教えています。お分かりのように、私はこうすることによって、ロシア人と日本人の両方に、たがいにいっそうよく理解し合い、たがいの国の文化を尊重し、愛することを学ぶのを助けているのです。

名前を言うのを忘れていましたが、私はイリーナ・ビャチェスラボブナ・カパルキナといいます。カパルキナは姓、ビャチェスラボブナは私の父の名に由来する父称、イリーナが私自身の名前です。こんなにも長い（ややこしい）姓名を持つ国民の言葉を学習してみようとは思いませんか？　私たちの学院には、昼間、夜間の課程のほかに通信課程もあります。

友人としての挨拶と最良の希望をこめて

カパルキナ

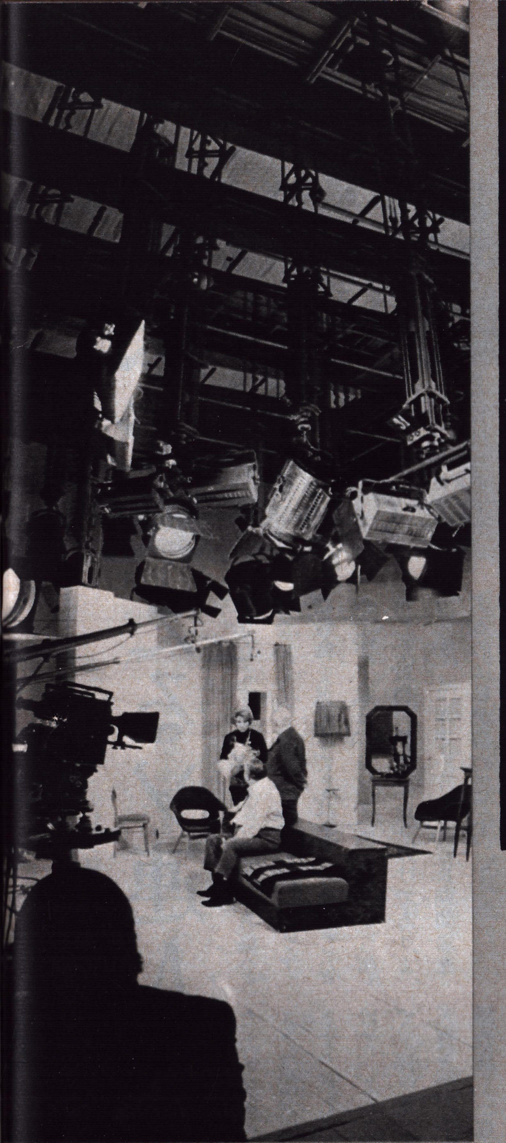

モスクワ風刺劇場は首都で最も人気の高い劇場の一つ。なかなか切符が手に入らない。

笑いの劇場

——モスクワ風刺劇場

アーラ・エンチナ

カメラ　A・ポルーニン


◀風刺劇場の俳優たちは中央テレビの番組の人気者でもある。定期番組のほか、喜劇ドラマにもよく出演する。これはセルゲイ・ミハルコフ作のコメディー「平手打ち」の録画風景。


スウェーデンの女流童話作家リンドグレン原作のミュージカル「長靴下のピッピ」には、ジムとブックという二人の道化の役が加えられた。若い女優ニーナ・コルニエンコ（左）とタチヤナ・ワシリエワが好演している。

数あるモスクワの劇場の中で一番古くもなければ、一番新しいというのでもありませんが、モスクワ風刺劇場にはつねに若々しさが感じられます。それは、この劇場が笑いを〝武器〟にしているからです。なにしろ、笑いというのは、古い東洋の知恵を信じれば、若がえりの秘訣といいますから。

劇場がまず第一にほほえみをプレゼントするのは子どもたちです。

スウェーデンの女流童話作家アストリッド・リンドグレン原作の『長靴下のピッピ』と『屋根の上のカールソン』が上演される時には、客席は終始笑いにつつまれ、出演者たちも次々に離れ技を見せ、工夫をこらして熱演を惜しみません。こうして観客の子どもたちはお説教のにおいを感じないで友情や善、正直や誠実さを学びとるのです。

劇場のもつ最高の出し物の一つにボーマルシェの『フィガロの結婚』があります。この喜劇は他の劇場でも何度となく上演されましたが、風刺劇場の『フィガロの結婚』は名舞台の折り紙つきで、入場券がなかなか買えません。ロココ調の優美、けんらん、悲喜こもごものみごとな舞台は演劇ファンならずとも心が動くところです。

風刺劇場は古典の新しい解釈による上演にも力を入れています。ゴーゴリの『検察官』やグリボエードフの『知恵の悲しみ』といった19世紀ロシアの文豪の〝人生コメディー〟はこの劇場で生まれ変わったといわれています。両作品はもともとはツァーの専制政治や当時の権力者の愚鈍さにたいする痛烈な風刺なのです。

しかしレパートリーの大半は、無論、現代のソビエト作家の作品です。詩人セルゲイ・ミハルコフの喜劇『泡』もそのひとつです。『泡』の主人公は非常に小才のきく人物で、〝貫禄〟をつけるために博士候補の肩書きを手に入れようと夫婦して決心します。ところが学識などなにも持たない人物のこと、他人の論文を簡単に金で買い、そうして流行の家具やファッションに流行の学位をつけ足そうとします。この作品はこうした人たちを描いて、すべての御都合主義者やおべっか使いをきびしく批判しているのです。

風刺劇場は詩人マヤコフスキーのドラマツルギーを発見し、後にこれを舞台によみがえらせたという栄光の歴史をもっています。『南京虫』『風呂』『ミステリア・ブッフ』の三大名戯曲を次々と上演しましたが、マヤコフスキーはその作品の中で官僚主義や小市民根性をはじめ、新生ソビ


ゴーゴリ作『検察官』の主役フレスタコーフを演じるアンドレイ・ミロノフ（中央）はこの劇場の中心的俳優の一人。その芸域は非常に広い。



モスクワ風刺劇場の首席演出家、ソ連人民俳優のワレンチン・プルチェク（左）は疲れを知らない情熱家。幕が下り、拍手が静まると、すぐに次の戯曲のリハーサルに取りかかる。

『フィガロの結婚』の舞台から。アルマビバ伯爵はロシア連邦功労俳優アレクサンドル・シルビント、伯爵夫人はロシア連邦人民俳優ベーラ・ワシリエワが演じている。



エト国家の行く手を妨害したすべてのものに立ちむかいました。労働や日常生活での新しい関係を肯定し、素晴らしい未来を夢みていたのです。

マヤコフスキーの作品は20年以上も風刺劇場で上演され続けてきており、俳優の代もかわり、装飾も変更されましたが、作品はつねに新鮮で、今日性を失っていません。

劇場の立派な建物はモスクワの中心部のマヤコフスキー広場にあります。劇団がマヤコフスキーの〝共産主義者たる演出家よ、まがいもののガラクタを清算して、生活をたて直せ！〟ということばを創作上の信条に選んでいるのもうなずけます。

ほぼ四半世紀にわたって劇団の指導にあたっているワレンチン・プルチェク首席演出家は風刺についてこう言っています――「風刺とは対象の激しい否定の裏に、熱いペーソスや豊かな感受性がかくされたものだ」

こうして風刺劇場は、欠陥をあばき、人々の意識の古さを笑いの対象にしながら、社会主義社会の規範とモラルの強化につとめているのです。

☆　☆　☆

КАК СТАТЬ КРЕСТЬЯНИНОМ?

Вероя́тно, слова́, вы́несенные в заголо́вок, мо́гут вы́звать недоуме́ние. В са́мом де́ле, крестья́нин не профе́ссия. Это, поми́мо всего́ про́чего, о́браз жи́зни, то, что почти́ всегда́ дава́лось с рожде́ния. А зна́ния, о́пыт земледе́льца и́ли животново́да переходи́ли от отца́ к сы́ну, обрета́лись в повседне́вности. Опыт э́тот — дар бесце́нный, и́бо он не про́сто су́мма фа́ктов и на́выков, в нём как бы аккумули́рованы жизнь, труд, наде́жды отца́, ма́тери, де́да, всех пре́дков, их пре́данность земле́, крестья́нскому де́лу.

Но ны́нче зна́ний, полу́ченных таки́м путём, несмотря́ на всё их значе́ние, недоста́точно. Техни́ческое перевооруже́ние се́льского хозя́йства СССР, перево́д его́ на индустриа́льные ре́льсы внесли́ суще́ственные измене́ния в хара́ктер и содержа́ние труда́ крестья́нина, потре́бовали от него́ ка́чественно но́вых зна́ний, отвеча́ющих усло́виям нау́чно-техни́ческого прогре́сса. Селу́ нужны́ образо́ванные, квалифици́рованные рабо́тники, спосо́бные бы́стро ориенти́роваться в но́вой те́хнике и техноло́гии, постоя́нно обновля́ть зна́ния. Есте́ственно, что и дереве́нские подро́стки тя́нутся к той разнообра́зной те́хнике, к тем но́вым профе́ссиям, кото́рые сво́йственны жи́зни сего́дняшнего села́.

Стать совреме́нным крестья́нином — зна́чит стать специали́стом. А э́тому на́до учи́ться. Ве́рный путь — учёба в се́льском профессиона́льно-техни́ческом учи́лище (СПТУ), где профессиона́льная подгото́вка сочета́ется с по́лным сре́дним образова́нием. Ребя́та поступа́ют в СПТУ по́сле восьмо́го кла́сса общеобразова́тельной шко́лы, т.е. по́сле оконча́ния непо́лной сре́дней шко́лы. И че́рез три го́да колхо́з и́ли совхо́з получа́ет специали́ста, профессиона́льно моби́льного, уме́ющего легко́ адапти́роваться к усло́виям се́льского произво́дства.

本号のテキストは，次号（8号）に掲載される農村の技術教育をテーマにした記事の最初の部分です。なお，前号のテキストの訳文は本号42ページから始まる記事『森林を守る生徒たち』の最後の部分にあります。

【注】

☆1行目：**Вероятно, слова, вынесенные в заголовок, могут вызвать недоумение.**〈多分，見出しに掲げられた言葉は，疑問を呼び起こすかもしれない〉

☆1行目：**В самом деле, крестьянин не профессия.**〈実際，農民というのは，職種（職業）ではない〉。**В самом деле** は，前文を肯定的に受けとめて言う場合の〈実際に〉の意味。これに対して，**на самом деле** は〈ところが，実際には〉の意味。

☆2行目：**помимо всего прочего**〈その上に，それに加えて〉

☆2行目：**образ жизни**〈生活様式〉

☆4行目：**... обретались в повседневности**〈…は日常生活の中で身に付けられた〉

☆5行目：**в нём как бы аккумулированы жизнь, труд ...**〈この経験の中にはいわば，…の生活，労働が集積されている〉

☆7行目：**несмотря на всё их значение**〈それはそれとして価値のあるものだが〉

☆8行目：**перевод его на индустриальные рельсы**〈農業を工業的基盤に移行させること〉

☆13行目：**деревенские подростки тянутся к ...**〈村の若者たちが…にあこがれる〉

☆14行目：**... которые свойственны жизни сегодняшнего села**〈現代農村の生活に特有の…〉

☆15行目：**А этому надо учиться**〈専門家になることは，学ばなければならない。専門家になるには，教育を受けねばならない〉

☆16行目：**Верный путь**〈そのための確実な方法は…〉

☆17行目：**... сочетается с полным средним образованием**〈…は後期中等教育と併せて行われる〉。このあとに出てくる **неполная средняя школа** は前期中等教育までを行う学校のこと。

☆18行目：**т.е.** は **то есть**〈すなわち〉の略。

☆19行目：**профессионально мобильного ...**〈職業的に応用のきく，つぶしのきく〉

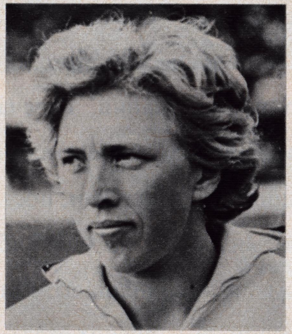
OLYMPICS-80

オリンピックとソ連選手 (1)

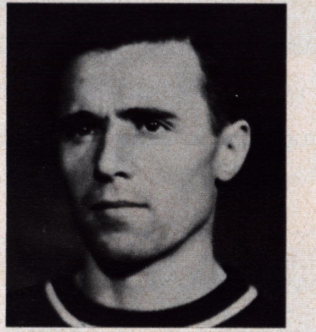
ワレリー・シテインバフ



1



2



3



4



5

1 女子円盤投げで優勝したニーナ・ロマシコワ（ポノマリョワ）

2 女子砲丸投げで優勝したガリーナ・ズイビナ

3 ヘルシンキ・オリンピックのヒーローになった男子体操のビクトル・チュカリン。金4個、銀2個のメダルを獲得した。

4 女子走り幅跳びとやり投げで銀、走り高飛びで銅と合計3個のメダルを獲得したアレクサンドラ・チュージナ

5 シングル・スカルで優勝したユーリー・チュカロフ

これまでのオリンピックでソ連のスポーツマンがどういう活躍を見せたか、本号からシリーズで紹介します。

ヘルシンキ大会（一九五二年）

ソ連がオリンピックにデビューしたのは一九五二年のヘルシンキ・オリンピック。一九五〇年、ヘルシンキ・オリンピック組織委員会はソ連国内のスポーツの発展と国際舞台における成果を高く評価し、五二年のオリンピックへのソ連の参加を要請する正式の招待状をモスクワに送った。IOC（国際オリンピック委員会）は一九五一年5月7日にソ連オリンピック委員会の加盟を承認し、ソ連の選手はオリンピックに初めて出場した。

ソ連の選手はホッケーを除く全競技に出場したが、金メダルを22個、銀メダルを30個、銅メダルを19個獲得し、メダル獲得数において米国に次いで二位に入るという大きな成果を収めた。体操、レスリングのフリースタイルとグレコローマン、射撃、重量あげでは非公式得点数においてソ連が第一位、ボクシング、陸上、バスケットボール、ボートでは第二位であった。

女子円盤投げのニーナ・ロマシコワ（旧姓ポノマリョワ）は一九五二年7月20日、ソ連選手として金メダル第1号に輝いた。なお、8年後のローマ・オリンピックでも彼女は金メダリストとなっている。

陸上ではソ連選手は9種目に出場し、4つの世界新記録をふくむ8つのオリンピック新記録を樹立した。女子砲丸投げで世界新記録を出したガリーナ・ズイビナは五二年から五六年にかけて8回にわたって世界記録を更新した。

ソ連の女子円盤投げ陣——ニーナ・ロマシコワ、エリザベータ・バグリャンツェワ、ニーナ・ドゥムバーゼの3人は金、銀、銅メダルを独占するという快挙をなしとげた。

重量あげには42カ国一四〇人の選手が出場したが、ソ連勢は金3、銀3、銅1のメダルを獲得した。優勝した3人はイワン・ウドドフ、ラファエリ・チミシキャン、トロフィム・ロマキンである。

体操で男女の団体優勝をはたしたソ連の選手は、大きなセンセーションを引き起こした。女子個人総合優勝のマリア・ゴロホフスカヤは金メダルを2個、銀メダルを5個獲得した。また、男子体操で4個の金メダルと銀メダルを2個獲得したビクトル・チュカリンはこのオリンピックのヒーローになった。

ソ連男子体操チームは五七四・七点をあげ、一九五〇年の世界選手権で優勝したメンバーをそのまま残したスイス・チームを六・九点抑えて団体優勝した。

チュカリンが一九五六年のメルボルン・オリンピックでも金メダルを獲得した時、日本の有名な体操選手小野喬氏は、「チュカリンに勝つことは不可能だ。彼は失敗すればするほど、新たな闘志をもやす人だ」と語った。現在、チュカリンはリボフ体育大学体操講座助教授として後進を指導している。

ヘルシンキ・オリンピックはたちまちソ連を世界のスポーツ大国の一つに押し上げた。ソ連のオリンピック参加史の第一章は、このように大きな成果から始まったのだった。

☆ ☆ ☆

モスクワ・オリンピックの競技シンボル



モスクワ・オリンピック組織委員会が、80年オリンピックの競技種目を表すシンボルマークを発表した。この競技シンボルは美術家ニコライ・ベルコフがデザインしたもの。IOCも承認した競技者の姿を図案化したこのシンボルマークは、ポスター、本、記念コイン、郵便切手、通行証等に使われる。また、オリン



ピック期間中は、入場券や競技記録に使われるほか、各競技会場の場所を示す道路標識として全市内で使用される。この道路標識があれば、オリンピック期間中にモスクワを訪れ、市内の道路に不案内な外国人観光客でも競技会場にたやすく行ける。

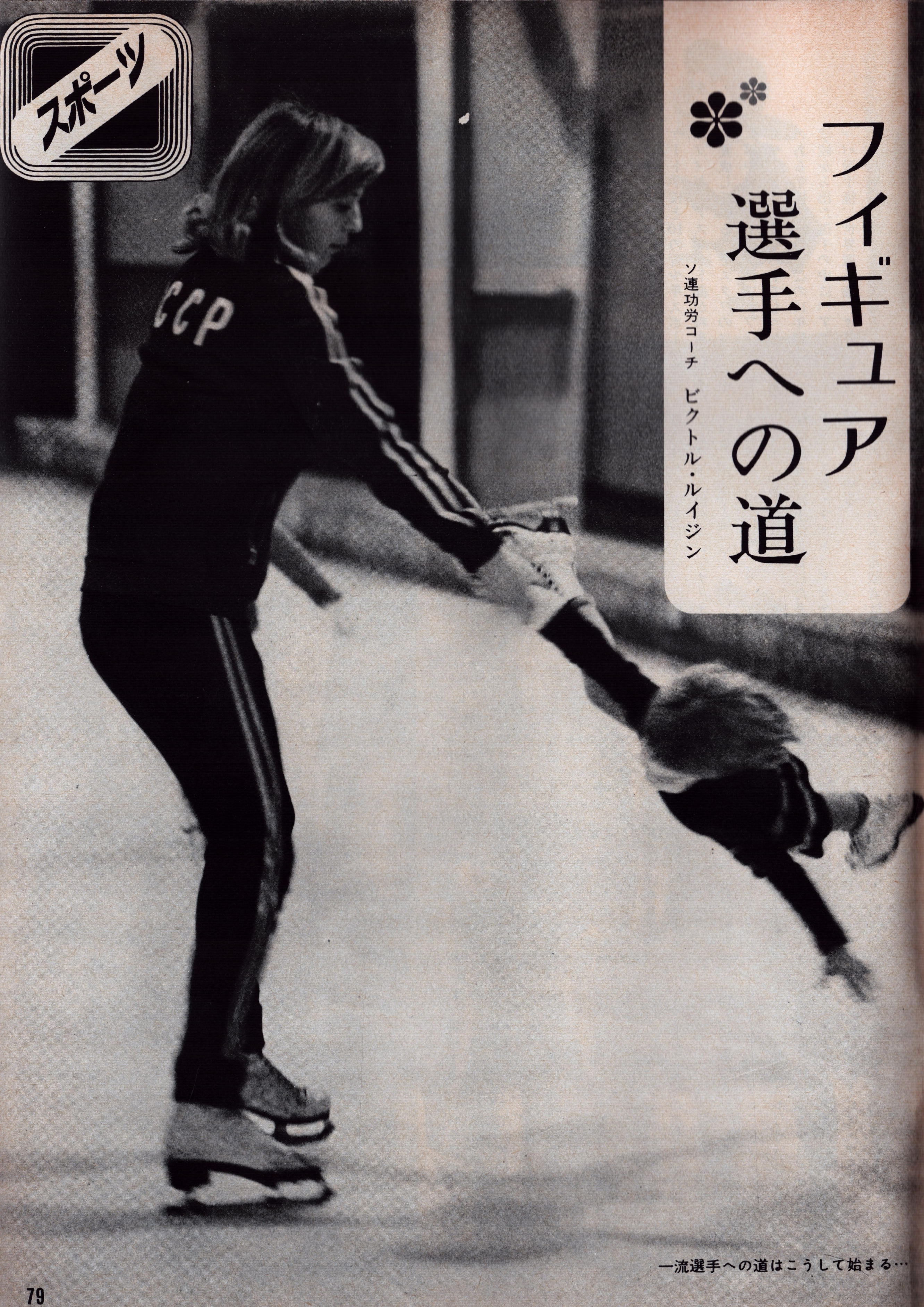
競技シンボルの作成は、一九六四年の東京オリンピックから各大会の組織委員会の重要な問題の一つとなっている。モントリオール・オリンピック組織委員会は、七二年のミュンヘン・オリンピックの競技シンボルを部分的に修正して使用した。

モスクワ・オリンピック組織委員会はまったく新しいシンボルマークを作ることを決め、とくに一連の美術学校にたいし卒業制作および学年末制作のテーマにこの競技シンボルの作成もふくめるよう要請した。多数の作品が組織委員会に送られてきたが、全ソ工業デザイン研究所のスタッフの助言をえて審査した結果、昨年V・ムーヒナ記念レニングラード工業デザイン大学を優秀な成績で卒業したニコライ・ベルコフ（27歳）の作品が最優秀作品に選ばれた。

近代五種のスポーツマスターで、かつてレニングラード市チャンピオンでもあったニコライ・ベルコフにとって、スポーツのテーマは得意とする部門だった。デザインの専門家は、ニコライ・ベルコフの作品は非常によく図案化されていると同時に、分かりやすいのが特徴で、技術的に製造しやすく、いろいろな色や色調を使ってさまざまな材料や製品にたやすく書き入れることができる、と指摘している。単純明快な図案は、拡大や縮小にも便利だ。

フィギュア選手への道

ソ連功労コーチ　ビクトル・ルイジン



一流選手への道はこうして始まる…



仲間の練習を見守る年少組の少女たち

ソ連では7つの青少年フィギュアスケート学校と10の青少年スポーツ学校のフィギュアスケート部が将来の選手を養成している。モスクワのツェスカ（軍中央スポーツクラブ）・フィギュアスケート学校はその中でももっとも人気のある学校の一つ。この10年間にこの学校から出た選手の中にペアでヨーロッパ選手権、世界選手権、オリンピックを制覇したイリーナ・ロドニナ、アレクセイ・ウラノフ、アレクサンドル・ザイツェフ、同じくペアでヨーロッパ・世界選手権、オリンピックに入賞したタチヤナ・ジュークとアレクサンドル・ゴレリク、アイスダンスでヨーロッパ・世界選手権、オリンピックに優勝したリュドミラ・パホモワとアレクサンドル・ゴルシコフといったトップクラスの選手がいる。彼らを追う選手として期待されているヨーロッパ選手権女子シングル3位のエレーナ・ボドレゾワ（14歳）同選手権ペア2位のマリーナ・チェルカソワ（13歳）とセルゲイ・シャフライ（18歳）をはじめ、ソ連選手権で優勝あるいは上位入賞した多くの選手がツェスカ・フィギュアスケート学校で学んでいる。

この学校への入学希望者は非常に多い。毎年9月初め、この学校の予科の入学試験が行われる。昨年、試験会場のツェスカ・スポーツパレスには二〇〇〇名以上の少年少女が集まった。試験は音感、柔軟性、ジャンプ力を中心に行われ、一二〇名が合格した。

新入生は体力をつけることから始め、ダンスの初歩を習い、スケートで立つことからフィギュアの基礎を身につけている。さらに、予科の生徒は水泳、陸上などが必修課目。

7歳になると子供たちは普通教育学校に行くが、とくに優秀な生徒はツェスカ・スポーツパレスに隣接する第七〇四普通教育学校に入る。そして、この学校の特別クラスにはツェスカで特定のスポーツをしている者のみ入る。

このクラスの生徒はスポーツ用具を無料で使用でき、競技会に出場するためのユニフォームも無料で支給される。

この特別クラスでは普通の授業のほかに、トレーニングが毎日行われている。コーチは生徒の学業成績をきびしくチェックしており、2以下の評価（5段階評価）を受けた者は練習に参加できない。

11―12歳になると、シングル、ペア、アイスダンスへの組分けが行われる。

そして、とくに才能豊かな選手には専属コーチがつくが、たとえば、ソ連功労コーチのスタニスラフ・ジュークはすでに4年間エレーナ・ボドレゾワを、リュドミラ・パホモワはモスクワ・ジュニアカップに優勝したエレーナ・バタノワとアンドレイ・アントノフ（共に12歳）をコーチしている。



ダンスは必修課目



幼児を指導するソ連女子シングルの第一人者エレーナ・ボドレゾワ選手

今日のソ連邦
一九七八年4月1日号
編集・発行
ソ連大使館広報部（東京都品川区東五反田3—9—13
郵便番号141、電話03・447・3536）
印刷
大日本印刷株式会社

ハンターと釣り人の皆さん！



“インツーリスト”はソ連での楽しい狩猟と釣りをお勧めします！

よい目としっかりした腕、よい銃とよい釣り具をお持ちの方には、すばらしい獲物が待っています。

“インツーリスト”はソ連国内でのクマ、イノシシ、シカ、ヘラジカ、ノロ、野生ヤギ、シャモア、山鳥、水鳥などの狩猟ツアーと魚釣りツアーを提供しています。

ハンターの方たちには、ソ連の最も風光明びな土地——イルクーツク、クラスノダル、ソーチ、ロストフ・ナ・ドヌー、カリーニン、バクー、オルジョニキーゼ、ヘルソンその他の周辺にあるホテルが提供されます。

“インツーリスト”は、狩猟の場所までのご旅行、ホテル、狩人小屋、テントでの宿泊のお世話をいたします。また、狩猟のときの交通のお世話、狩猟と釣りのさいの装備のお世話もいたします。

詳細についてのお問合わせは、東京都港区六本木4—1—16　六本木ハイツ内　ソ連政府観光局（電話03・584・6617）、あるいはソ連旅行を扱っている日本の旅行代理店へどうぞ。